

姜克實

現代中國を見る眼

民衆からみた社會主義

姜克實著

姜 克實

現代中國を見る眼

民衆からみた社会主義

丸善ライブラリー

はしがき

日本での研究生活が始まってから、居酒屋の席で、年輩の学者たちから社会主義への熱い思いを聞かされたことが、しばしばあつた。マルクス主義の社会主義論、現在の独裁・非民主の工セ社会主義体制への激しい指弾、あるいは本来あるべき理想的な社会主義の姿など。ほろ酔いで赤みを浮かべる彼らの表情は、このとき真剣そのものであつた。社会主義という四文字には、彼らのひたむきな信念、あるいは人生の生き甲斐が込められているように、私の目に映つた。

彼らの熱意に対しても畏敬の念をおぼえたが、しかしながら、語られた内容にはほとんど共鳴することが出来なかつた。酒肴の匂いが漂う居酒屋の席で描かれた社会主義の理想像は、私にとつては、あまりにも空虚で遠い存在だつたからである。それだけではない。自分の経験したつらい日々を思い出しては、古傷の疼きを感じたことさえあつた。私は彼らの真剣な顔を見

つめながら、もしこの暖かい酒席ではなく、かつて自分が経験した、零下四〇度をこえる不毛の辺境地の村で三ヶ月の思想改造を体験させたら、彼らの意気込みは変わるだろうか、とふと思つたことがある。私は、これらの愛すべき先輩たちを、「ビール社会主義者」と密かに呼称し、ときどき、心の中にある埋めるすべすら見えない、深い溝の存在を感じていた。

私の社会主義問題への関心は、周りの多くの論者に見られるような、イデオロギー上、理論上からの親近・憎悪感によるものではない。解放後の中国で育ち、青少年期を毛沢東の継続革命の実践に翻弄された、「文革世代」の経験を持つが故に、精神上、肉体上の苦痛からこの運命のシステムを見つめるようになつたのである。こうした精神的、肉体的苦痛の体験が訴えるものであつたろうか、私は既存の社会主義の議論に対し、最初から、ある方法論的疑問を感じた。いわば、ほとんどの研究者は、マルクス主義経典の解釈、政治・経済理論の分析、国家政策、指導者の言動に対する「上」からの研究・分析に熱中しているが、実際に社会主義という政治形態の下で生存し、社会主義の実験台となつた一般民衆の政治・生活意識への関心はほとんど持たなかつたのではないか、と。この長い間なおざりにされてきた問題の存在と、それに自ら答えようとする宿命的義務感が、私をこのつたない本の執筆に駆りたてた動機である。

本書の目的は、決して登場人物たち一人一人の人間ドラマを描くのではない。よりたくさん
の実例を通じて、社会主義制度の下に演じられたある民族全体のドラマを仕上げ、未知の歴史
像を紐解くことにある。「文化大革命」とはいつたい何だったのか、毛沢東の「継続革命」の
意味はいつたいどこにあるのか、さらに社会主義という歴史的現象はいつたいどのように解釈
すべきかを、こうした作業を通じて垣間見ようとするものである。ありふれた「上」からの理
論の展開ではなく、民衆の傷・痛みを通じて「下」から逆に社会主義の理論にアプローチしよ
うとする試みである。ここでは、他の大著に見られる深奥な経済学理論の解釈、華麗な政治学
理論の展開こそ見られないが、血と涙で綴った多くの民衆の肉声から直に、社会主義とは何
か、という難問を解くヒントが得られるのではなかろうか。



「於無聲處」
著者作

目 次

I

中国を見る眼

1	社会主義の世紀	2
2	理想論、感情論の陥穰	
3	方法論の行き詰まり	
4	本書の手法	
15		
10		
5		

I

II 中国民衆の意識変遷史——一九四九—八五年···

一 「新中国」旗下の結束（一九四九—五二年）

20

二 社会主義改造への困惑（一九五三—五六年）

41

三 「反右派」と「大躍進」（一九五七—一九六一年）

58

1 知識人の受難——「反右派」運動

58

2 共産主義への盲進——「大躍進」運動

72

四 現実と理想の確執——調整時期（一九六一—六五年）

85

1 「調整」政策

85

2 毛の反撃——社会主義教育（四清）運動

95

五 「無私」の世界を目指して（一九六六～七六年）

- 1 狂気の時代——「文化大革命」前期 107

- 2 意識転換の胎動——「文化大革命」後期 136

六 十億民衆の意識転換（一九七七～八五年）

- 1 転換の準備期 155

- 2 大転換の訪れ 166

155

107

七 意識転換の意義と問題点 197

- 1 特徴と意義 197

- 2 意識転換の問題点 202

III

社会主義とは何か

207

- 1 社会主義衰退の原因 208
2 社会主義における「人間」の問題

3 システムの原因を問う

224

- 4 非常時の社会形態
5 現代中国の行方

228

218

213

あとがき

235

主要参考・引用資料

238

I
中国を見る眼

1 社会主義の世紀

一〇世紀は、社会主義国家が生成、発展、隆盛、そして衰退の途をたどつた世紀であり、社会主義の世紀ともいえる。国家形態としての社会主義は、一〇〇年足らずで歴史の舞台から姿を消そうとしているが、人類の歴史に大きな足跡を残した。

それは、被搾取階級の解放、被侵略民族の独立の足跡であつた。第二次大戦後、長年にわたる封建制度の重圧、階級的搾取、あるいは帝国主義の植民地支配下から、広範な民衆が立ち上がり、マルクス主義理論の下で、被搾取階級が主人公となる新しい国家を次々と創設した。社会主義のメッカたるソ連の麾下きか、公有制・計画経済、公平な分配および完全な社会保障という新しい社会形態の実現を目指して、一時十数カ国を擁した強大な社会主義陣営が出現し、他の国家・地域からも、共産党、社会党など進歩的勢力の多大な声援を受けていた。

社会主義が残したもののはまた、人類同志の殺りく、民衆受難の足跡でもあつた。階級闘争、

プロレタリア独裁と共産主義の実験が生ませた、スターリン時代の大肅清、毛沢東時代の大飢饉、狂気の文化大革命（以下では「文革」とも略称）、ポルポト政権の大虐殺、チャウシエスクの独裁、ベトナムの難民、アルバニア、キューバの窮乏など数々の人間の悲劇に象徴されるように、社会主義の実験はある意味で戦争よりもおそろしい悪夢であり、“国家の強大”、“独裁者の栄光”を綴つたのは、蹂躪じゅうりんされた無数の人間の命、そして民衆の血と涙であった。

社会主義は一方で、人類社会の進歩を促すことにもなった。東西両陣営による冷戦の対峙は、結果的に核戦争の危険を人類全体に悟らせ、不戦、非核の平和意識を世界の人々の中に定着させていった。また、社会主義制度と資本主義制度との対立・競争の展開も、危機に瀕した資本主義に回生の力を与え、その自浄、奮起、進歩を促した結果となつた。

表面上、国家形態としての社会主義は、二〇世紀の生存競争の中で敗れ、世界史の舞台から姿を消そうとしているように見えるが、しかし、理念としての社会主義は、いまなお機能し続け、人類社会の不平等を是正する武器、また資本主義の醜惡を映す鏡として、きたる二一世紀にも影響を及ぼし続けるであろう。

社会主義の理論は、一五〇年まえからマルクス主義の經典に始まり、二〇世紀に入つてソ連の社会主義実践とともに、レーニン、スターリンによつて継承された。第二次大戦後、社会主

義の理論は、被支配民族の独立、被搾取階級の解放とともに影響力を拡大し、平等、自由、平和、大衆福祉など斬新なイメージをもつて、虐げられてきた一般の人々、弱い民族に生きる希望を与える、理想郷の夢を提供した。第二次大戦後、多くの社会主義の国家が生まれ、ソ連の周囲で結束して、新しい政治勢力として戦後国際政治の舞台で羽振りを利かせた。冷戦の発生により、世界は東（社会主義陣営）と西（自由主義陣営）に分かれて対峙し、これによつて社会主義は、世紀の巨人として不動の地位を獲得したかのように見えた。

しかし、社会主義の運命は決してその予見者、実践者の期待にそよよな、単純なものではなかつた。戦後まもない頃にあつた繁栄、強大、民主、平等のイメージは、五〇年代の後半から崩れ始め、冷戦の進行とともに、社会主義の体制内部の矛盾が次々と暴露された。スターリン批判、ハンガリー事件、キューバ危機、中ソ論争、文化大革命、チエコ事件など一連のショッキングな事件は、多くの支持者たちを困惑させ、離反させていった。また、六、七〇年代以降、社会主義諸国に普遍的にみられた政治の不安定と経済の不振は、さらにその結束力を弱め、その存在感を薄めていった。そして七〇年代以降、生き残りをかけて各社会主义国家は相次ぎ政治の民主化、経済改革に踏み切つたが、この試みの結果、社会主义の政治・経済原則が余儀なく放棄され、いつそう社会主义制度の危機を募らることとなつた。

八〇年代以降、衰退した社会主義は資本主義世界の経済繁栄の陰に息を潜めて目立たなくなつたが、久しぶりに世界の注目を浴びはじめたのは、皮肉なことにも一九八九年以降のベルリンの壁の崩壊という、その転落の事実をもつてである。

2 理想論、感情論の陥穀

社会主義とはいつたまにか。この問題は、社会主義の中国で生まれ育ち、その盛衰の一部始終をこの目で見、この身で体験してきた私にとって、宿命の課題といえる。それは自分自身の運命への疑問であり、また四〇年にわたつて十億民衆の運命を翻弄したこのシステムへの疑問でもあつた。

歴史学の学徒となり、学問の道を志してから、いつか必ず解きたいと思つた問題であつたが、そのきっかけを作ってくれたのは、一九八九年の天安門事件とその後の東欧の激変である。

事件後私は、研究者として自分の祖国を見つめようと決心した。テレビ、マスコミの時事評論に耳を傾け、学界の関係部会に出席し、また現代中国と現代社会主義に関する書物も集めて読み漁った。社会主義の変動に対する日本の学界、研究者たちの対応を見ていて、私は二つの大きな疑問を抱きはじめ、同時にある種の危機感も覚えた。歴史学の立場と社会主義研究の方法論に対するものである。

第一の疑問は、これまで学界の大きな流れをなしていたマルクス主義的立場、あるいは経典中で述べられた社会主義の理想にこだわる非現実的な立場についてであり、こうした立場は果たして歴史学の使命に応えられるか、というものである。

天安門事件をきっかけに起こった一連の政治変動の結果、ベルリンの壁が倒れ、四〇年の歴史を有した社会主義陣営が解体した。これらの出来事は、二〇世紀の歴史の大事件であり、二一世紀の人類社会の発展にも極めて重大な意味を持つていて、言わなければならない。

歴史学の研究者としては、こうした世界史的变化を事前から予測すべき責務があつたが、実際にには、戦後マルクス主義から出発した多くの研究者たちは、この歴史的変化を予測するどころか、既成の事実に対する事後の解釈にさえ、苦しむ観があつた。政治学、経済学、国際関係学などの諸学界にくらべ、歴史学界の反応・対応は一番鈍く、一番受け身だったのではなかろ

うか。あまりにも劇的な展開にショックを受け、既成の思想体系、価値観でどうしても対処しえなかつたためであろう。

一方、マルクス主義陣営の沈黙とは反対に、アメリカではフランシス・フクヤマのような自由主義の論客が早々と登場し、ベルリンの壁の崩壊を社会主義の敗北、自由（資本）主義の勝利と高らかに謳つて論壇をにぎわした。^{*}

（＊邦訳『歴史の終わり』三笠書房）

やがて、こうした安易な結論へのさまざま反発が生まれ、世界的範囲で自由主義、社会主義論のブームを形成した。一九九〇年以降日本国内で出版された社会主義に関する著書は、寡聞だけで百数十冊以上を数える。内容は哲学、政治学、経済学、社会学、時事政治論など多岐に渡つており、社会主義社会の没落の原因と再生の可能性に、議論が集中しているようである。社会主義に対しては賛否両論があるが、経済理論・政策の研究、政治組織・制度の構造分析、政府の政策・方針の検討など種々の方法が取られ、多様な新成果が上げられている。またこの反論を通じて、いつたん敗北感を味わつたマルクス主義者、理想的社会主義者の論客も、次第に論陣を整えていった。

錯綜した社会主義論の中で、私が特に気になるのは、マルクス主義的立場から来た理想的社

会主義論である。曰く、二〇世紀の社会主義国家は、すべて歪められたエセ社会主義であり、従つてその敗北は毫もマルクス主義理論の敗北を意味しない、と。

これらの論者は社会主義陣営崩壊の具体的な理由として、社会主義が民主主義の洗礼を受けている「後進国」で発生したことを挙げ、また独裁者の出現、特権階層の腐敗など指導者個人の責任を追及し、あるいは共産党的政治、経済政策面での誤りを指摘している。

こうした外因論の下では、理論体系、システム内部構造への追究がおろそかにされ、種々の非現実的な仮定が生まれる。もし、共産党が腐敗しなければ…、もし、社会主義が後進国ではなく先進的資本主義国家で発生すれば…、もし、レーニン、スターリンのような「エセ」マルクス主義者、独裁者が生まれなければ…、もし計画経済が合理的に行われれば…といったように。歴史の現実の如何にもかかわらず、こうした論者たちは真正な社会主義はいつかどこかで必ず実現すると信じる。

要は、戦後社会主義国家の衰退は歴史の必然ではなく、人為的ミスやタイミングの悪さによる偶然の出来事にすぎない、という。

このような非現実主義的方法によつて果たして社会主義という歴史的現象を認識できるのか、「偶然」という説明によつて歴史の「必然」が覆い隠されてしまうのではないか。

さらに私は、こうした理想的社会主義論を生み出した土壤には、学術論争のレベルを越えた、ある感情的因素が根強く生きているように感じてならない。

戦後、ファシズム、軍国主義の悪夢から目をさまし、マルクス主義の道を選んで再出発した多くの日本の学者にとって、社会主義は学問だけではなく、自分の政治の理想、人生の生き甲斐でもあった。この理想の実現を目指して彼らは半世紀の人生を費やしたが、そのあげく目の当たりにしたのは、八九年以降の厳しい現実であった。この場合は、歴史の現実に基づく反省が必要であるが、しかし、一部の学者は反省するどころか、感情論にとらわれ、引き続き社会主义の理想像を描き続け、歴史の現実に突き破られた心の風穴を懸命に縫い繕おうとする観さえあつた。ただの認識上の錯誤なら、また是正する可能性があるが、錯誤に気づいてなお感情論にこだわり、袋小路に突き進む態度ならば、やがて歴史学の墮落という結果を来すのではないか。

3 方法論の行き詰まり

第二の疑問は、これまでの社会主義研究に見られるような、経典解釈、理論研究、指導者個人の言動への注目、政府の方針・政策分析など「上」からの研究方法についてであり、これで果たして社会主義問題の実質を把握できるか、というものである。

最近の中国研究の迷走を例にこの方法論の問題を見てみよう。

一九八九年五月、天安門広場で民主化を求める北京の学生と市民が立ち上がり、デモ行進に参加した民衆の数は、百万ともいわれた。北京の鼓動は、中国の民主化を期待した日本のマスコミや研究者に大きな幻想を生ませた。テレビ画面に映し出された広場の熱気を見、登場した政治・軍事評論家、学者の解説を聞いて、遠からず民主中国が誕生することを確信した日本人も、決して一人二人ではなかつたろう。マスコミを席卷した楽観的な見通しは、政府当局が武力弾圧に乗り出した後も変わらなかつた。専門家の中では、三八軍（師団）の市民支持説や、

元老の手出し説など種々の分析と予測が飛びかい、あたかも軍隊の一部も民主化運動の支持に立ち上がったかのように騒がれた。結局これらの甘い予想、分析はことごとくはずれ、民主化運動は地方からの声援もなく軍からの支持もないまま、最悪の局面を迎えた。この結果になつても、マスコミと専門家たちは強気の論調を改めず、民主化運動の再発、あるいは内戦割拠、民衆の反政府蜂起が遠からず起ると予測するものが、大多数であつた。

事件から一年後、民主化運動の連鎖反応で東欧の社会主義陣営は解体したが、この時、外国の経済制裁に苦しむ「社会主義」中国の行方は再び世界の注目の的となつた。政治、経済面で孤立した中国の社会主义は果たして独自に存続できるか。中国も結局東欧と同じく民主化の道をたどるのではないか。種々の疑問や予測がマスコミに充满し、東欧の民主化運動の熱に煽られた日本の学者たちは、再び挙^{こそ}つて中国の民主化運動の再興と旧体制の崩壊を予測したのである。

しかし、これらの予測はまたしても外れてしまつた。「権力抗争と権力者を飲み込んでしまう」とされた民衆運動の息の「吹き返し」がなく、「四〇年体制」の崩壊、「人民共和国の解体」も実現されなかつた。やや稳健の類に属する「政治協商システムの復活」や「政権交替」の予測も結局当たらず、事件当時の指導部は顔ぶれひとつ変えずに生き延びてきた。

それどころか、事件後の中国は、むしろ西側の経済制裁と不況を成功裡に乗り越え、民心の安定を図りつつ日覚ましい発展を敵視者たちに見せつけている。

事件から六年後、今の中は専門家に「最善」とみなされた小康社会主義のシナリオを遙かに越えて「中興」や「高度成長」の段階に入り、世界の反対を横目に、核実験の再開、人権問題への強腰、台湾海峡における軍事恫喝どうかつなどをもって、大国としての自信を誇示したほどである。

中国問題に関する、専門家、学者、マスコミの迷走の原因は、いつたいどこにあるのか。

六・四事件の熱が冷めた後、私は運動当時は全く無視された、いくつかの庶民の声を聞いて考えさせられた。「気をつけな、そんなとこ（天安門広場）に出るんじやねえぞ、騒ぐ連中は結局自業自得になる」。「天下はグルグル変わつたって、おまえたちのもんじやねえ。蛙の子は蛙さ：我慢しろ！」（天安門広場に出た大学四年生B君のお父さん）。長年政治の動きを見守り続けた経験から得られた、まさに庶民の生きるための知恵なのである。民主運動家や学者たちの性急な予言より、こうした巷の庶民の勘が正しかったのではなかろうか。

もちろん、この意見は、街頭に繰り出したといわれる「百万市民」以外から出たものだが、しかし、このような意識の持ち主が北京市民の多数、いや、中国民衆の主体を占めているから

こそ、天安門事件の無惨な結果とその後の密告政治の土壌を生成したのではなかろうか。

しかし、ほとんどの中国問題研究者が、この肝心な主体を見落とした、と私は思う。

ここで一つの方法論の問題が浮かび上がってくる。

日本における中国研究、報道は、戦後以来、一貫して「上から」の方法が採られていたといえる。アカデミーにおける理論研究、国の指導者の言動への注目、政府の政策方針の分析など。こうした研究は、冷戦の壁に阻まれた時代での、やむを得ない方法ではあったが、同時に、毛沢東が絶対的な政治権力を振るい、共産党の指導、政策方針が滯りなく下部の末端へ貫徹できた一九五〇、六〇年代の中国において、有効な方法でもあった。この時期には、研究対象となる中国の「上」（政府）と「下」（民衆）の利害、意識、理想が一体化した部分が多く、また、たとえ一致しなくとも、「上」からの統制力の発動で党と政府の政策方針が社会の下層部まで貫徹することができた。従つて、民衆の意識を観察せずとも、致命的な認識の誤りをおかすに至らなかつた。毛の言動、国の政策は、いやおうなく中国そのものを代表したためである。

しかし、文化大革命の後半から、とりわけ一九七八年の改革・開放政策の後、情況が変わつた。閉鎖された門が開けられ、もともとアクセス不可能だった「下から」の情報も手に入れる

ことができるようになつた。反対に、共産党への求心力が減衰し、民衆の価値観・意識の転換により、社会主義イデオロギーと実際の民衆意識とが著しく乖離した現象が現れた。共産主義の精神教育は力を失い、政治運動、共産党的組織整頓も形骸化した。この結果、国の政策方針や上層部の言動を、中国、あるいは中国人の意識のバロメーターとする価値は減少してしまつたのである。つまり、従来の「上から」の方法では、政府の政策的意図や指導者の政治的願望などは十二分に汲み取れるが、政策の受け皿となる民衆の反応・意識はもはや把握できないのである。

にもかかわらず、このような変化を無視するかのように、日本の学者、マスコミの大半は「上から」の研究方法に固執し続けた。一九八九年の天安門事件に関する予測外れも、あまり教訓に生かせなかつたようである。広場にいた「百万」市民の熱に浮かされ、農民を含む「十億」の存在に背を向けたことに、問題の原因があるのでなかろうか。

4 本書の手法

以上のような二つの疑問点に対して、本書の執筆には以下のようなどころに配慮した。研究の前提・出発点となる重要な問題なので、前もつて記しておく。

一、中国、ソ連のような二〇世紀の社会主义国家の存在を、「エセ」また「粗野な社会主义」ではなく、唯一存在可能、あるいは必然的な社会主义の形態と見て、考察の対象とする。言い換えれば、実際には存在していなかつた、あるいはいつどこで実現できるかおぼつかない理想的社会主义は考察の対象外とする。これによつて社会主义論を、イデオロギーの束縛や純理論的な空論から解放し、より現実的に歴史的現象を分析することを可能にし、また研究者同志の議論の土台をつくることに益すると思う。

また、二〇世紀の社会主义国家のほとんどが、例外なく独裁者、独裁政治を生みだし、人権を抑圧し、また計画経済の行き詰まり、さらに民心の離反で崩壊の途をたどつていったとい

う、普遍的現象に対する観察から、本書は、これらの現象を人為的、政策的な誤り（偶然）と見ず、歴史の現実（必然）と見て、システムの内部からその原因を探ることとする。

一、方法論として、これまで多く見られた「上」からの理論研究や、政策分析ではなく、「下」からの方法を取り、「人間」の問題^{*}を中心に、社会主義実践の対象とされた民衆の意識変遷の分析から、社会主義の問題点にアプローチしていく。

（＊ここでいう「人間」の問題とは、社会を中心とする見方に対して、それを構成する各個人の役割・可能性をみようとするものである）

具体的には、社会主義イデオロギーの中心である「公」の意識に対する民衆意識の変遷という課題を設定し、建国以来、人口の大多数を占める普通民衆の意識の変化の考察を通じて、社会主義の意味を解釈し、また共産党、中国の未来を予測するのが目的である。言い換えれば、この試みは、これまで禁止されてきたアンケート調査のようなもので、直に各階層の民衆に、「あなたは過去社会主義・共産主義を信じ、協力したか、今も信じるか」と聞くことと同じような結果を期するものである。「上」からの研究方法が行き詰った現在、こうしたアプローチは、全く無意味とはいえないであろう。

また、資料の運用面では、本書は多数者の意識に特別の注意を払つつもりである。文革後、

迫害を受けた知識人の一派が海外に移住し、第二者の手あるいは彼ら自身の手で被害体験を記した書物が多く出回り、『ワイルド・スワン』のような、世界的ベストセラーとなつて広く読まれたものもあつた。これらの記録は非常に貴重ではあるが、しかし、それだけを読んで社会主義の実践と文化大革命の眞の姿を認識し、あるいは中国の一般民衆の意識を把握することは、やはり難しいだろう。たとえ文革による犠牲者が一〇〇〇万人あり、被害者が一億人あつたとしても、それは中国の人口規模から見れば、一パーセントないし一割に過ぎず、したがつて彼らの意識・経験で多数民衆の意識・経験が代表できるとは限らない。ここで、もつと知るべきなのは、少数のエリート知識人たちの受難談ではなく、一パーセント、一割の不幸な人々に加害した、人口の九割以上を占める一般民衆の心理・精神状態である。党への忠誠の証に親や親類を裏切つたり、同僚、同志を「反革命分子」と密告し、不利な証言をしたり、あるいは「反革命分子」に暴力を振るつたりするような人々は、むしろ被害者より多かつたのではないか。本心から毛沢東・共産党を信じ、文化大革命を支持し、社会主義革命の成功を確信した人数はむしろ多かつたのではないか。このような一般民衆の思想・意識状態とその変遷の過程を把握して初めて、「大躍進」、「文化大革命」のような大衆的エネルギーにあふれる事件、事象を認識することができ、また、社会主義の衰退の原因、及び、これからの中の行方を正しく

把握することができると思う。

ただ、理屈をいうと易しいのであるが、実際このような「下」からの研究に入ると、大きな困難にぶつかる。資料収集の困難である。言論の自由が存在しなかつたため、公開の情報市場にあふれたものには、検閲の許可をうけた、あるいは加工された宣伝性のつよい小説類、政治文書が多く、新聞・雑誌や、簡単に手にはいる体制側の資料もその信憑性が疑われている。一般民衆の意識、心理をそのまま伝える手記、日記、回想録のようなものは、度重なる政治動乱の中で災いの元となるため処分され、中国国内にはほとんどない状態である。また、文革以後のものより、その前の一七年間の資料がさらに不足しているのも、指摘できる。

以上のような困難があるため、紙幅に限りのある本書では、とても意を尽くした研究の効果が期待できないが、この研究の第一のステップとして、まず方法論を提起し、また手元の資料によつて、戦後中国民衆の意識変遷の輪郭を描くことに中心をおいた。

II

中國民衆の意識変遷史——一九四九—八五年

一 「新中国」旗下の結束（一九四九～五一年）

一九四九年一〇月一日、マルクス主義の理論で武装した共産党の指導の下で、六億の人口を有する革命の中国、人民の中国が悠久の歴史を育むアジア大陸に誕生した。この新生政権の誕生には、帝国主義の打倒、半植民地状態からの独立という民族革命の意味と、「人民の立ち上がり」という階級革命の二つの意味があり、とりわけ後者は、二〇世紀社会主義盛衰史のメールマールとして、アジア、世界の新独立国家の国づくりに大きな影響を及ぼした。

民族革命の歴史的要請から始まつた、糺余曲折の中国の近代。独立、統一達成という至高の目標の下で、孫文のブルジョア的「三民主義」（民族、民權、民生）と、毛沢東の共産主義という二つの方法が同時に試みられ、時には統一戦線、時には激しい内戦という状況の中で、国民党と共産党的主導権争いが続けられてきたが、最後の勝利を収めたのは、広大な労農階級の

利益を代表する共産党であつた。

延安という農村からでた農民政権は、なぜ、アメリカの装備で武装した国民党を打ち破り天下を治めたのか。その理由は、「民心の向かう所」という一言でくくれるのではなかろうか。ブルジョア、地主階級の利益を代表した国民党政府は、抗日戦争（日中戦争）中、民族解放のため貢献したもの、その後内部の腐敗が進行し、共産党討伐の内戦に熱中するのみで、農民、労働者など勤労大衆にもたらす利益はほとんどなかつた。これに對して成長中の中国共産党は、その新鮮なイメージ、廉潔さ、厳正な軍紀と対日抗戦・祖国統一の実績などの理由で一般民衆の称賛を集めばかりでなく、被搾取階級の利益を代表する階級的性格によつて、農民、都市のプロレタリアをはじめとする広範な勤労大衆の支持を獲得していた。

建国初期の共産党は、内外の困難を克服するため、階級革命の色彩を前に押し出さず、統一戦線による「新民主主義建国」の綱領を制定し、愛国の知識人、一部のブルジョアをはじめとする幅広い非無産者階層の支持を獲得していた。

(* 「中国政治協商會議共同綱領」、一九四九年九月二九日制定)

一方、共産党にとつて「新民主主義」は困難期を乗り越える策略に過ぎず、共産党の絶対的指導地位と鮮明な階級的性格は、最初から政権の性質を決定した。共産党は政治協商會議をつ

くり、民主党派、知識人、ブルジョア階級に対し寛容、団結の態度を示す一方、プロレタリアの階級的独裁を行使し、流血を伴う革命によつて建国を果たした。

(*ブルジョアではなく、共産党指導下の民主主義革命と定義されている)

「土地改革」による地主の土地の没収、外国資本の在華資産、特権ブルジョア・官僚・買弁^{*}階級の資産没収など、経済面での過激な措置が実行されただけではなく、土地改革に伴う「人民裁判^{**}」、社会の治安維持のために行われた「反革命分子鎮圧運動^{***}」を通じて、百万単位のいわゆる悪徳地主、旧国民党軍人、官吏、匪賊、スペイなどが「革命の敵」として処刑された。

(*外国勢力と結託する政治家・商人)

(* * 法的手続きを踏まない、大衆の恨み、要請による階級裁判)

(* * * 一九五〇年夏から、朝鮮戦争の勃発を背景に展開された肅清運動、約七〇万以上の「敵」が処刑されたと伝えられる)

共産党の新中国は、こうして人民の立ちあがり、国の独立という希望に溢れる明るい一面もあれば、処刑、流血の伴う階級的弾圧という恐ろしい一面もあった。

この新中國の評価について、海峡両側で対立する宿敵の国民党（台湾）と共産党（大陸）はまつこうから対立することはいうまでもない。また、冷戦によつて隔てられた自由主義、社会

主義両陣営の普通の人々も、イデオロギーの影響や情報の操作によつてそれぞれ違つたイメージを持つていた。

建国初期の共産党、新中国はいったい民衆によつて支持され、協力が得られたか。以下では、具体的な事例——その時代、その体制下に生活する一般民衆の見聞・体験——を通じて、答えを求めてみよう。

一般的印象

まず、共産党に対する民衆の一般的印象を見てみよう。

四川省達県の河市郷は、抗日戦争期（三七—四五年）、内戦期（四六—四九年）を通して国民党の支配下にあつた地域で、解放軍、共産党に関しては、国民党系新聞のニュース、うわさによる貧弱な情報以外ほとんど知らなかつた。一九四九年国民党の敗色が濃くなると、政府の官僚、大地主が先を争つて逃げだし、逆に使用人、貧しい家の人々は、解放軍の到来を待ち望んでいた。

地主の未亡人として現地で解放を迎えた福地いま（現地の地主と結婚した日本人妻）は、家柄ゆえに階級闘争の対象となつていたにもかかわらず、解放軍に対して良い印象を抱いた。

「解放軍は非常に規律がいいのです。あんなに規律正しく、正直で上品な軍隊を、はじめて見て、みんな驚いてしまいました。：彼等は非常に丁寧で親切で、またどんな買物をしても少しも値切らずにお金をキチンキチンと払つたので、これにもみんな驚いてしました。国民党軍は値切るだけ値切つた上、お金の不足分は拳骨で埋め合わせたのですから、この解放軍の氣風には、誰もすっかり感心したわけです。『世界一の軍隊がきた』という声が人から人へ、村から村へと伝わっていきました」。

福地の家に宿當したある砲兵中隊は、腰を下ろすとすぐ村人のために水をくんでくれたり、農作業の手伝いをしてくれたり、共産党の「三大規律八項注意」^{*}を宣傳したりして人民との親密な関係を図つた。訓練で夜中に帰るような時には「騒がないで静かに」と「母親のような注意を与え」、また病弱の娘を見舞い、時にはご馳走まで持つてきてくれたりした。「とにかく解放军は、国民党軍とまるきり違つて、実に規律がよく、また人に親切です。それでいて、強く、たくましく、思想的にも深く、政治的にも高いのです」と福地はいう⁽²⁾（引用に付した番号は巻末の文献リストに対応する）。

（*共産党軍隊の伝統ある厳正な規律。民衆との親密な関係を重視するのが特徴。一九四七年解放军の軍規として成文化）



水利工事に奮闘する解放軍兵士（1952）

解放の時北京に滞在した日本人技師山本市朗も、解放前の国民党政府と対比しながら共産党時代を讃えた。

「国民政府の役人たちは、要人から小人にいたるまで、勢力争いか、物のぶんどり合いか、妾狂いか、賄賂の強要に明け暮れしていく、北京に市民の生活があるなどということは、だれも思い出す者のない非国民政府であった」。これに対して、一九四九年一月入城してきた解放軍は、国民党軍隊に見られない厳正な軍紀を保っていた。その上、入城早々、治安維持の面でも貢献し、暴力団「黒旋風」の一党を退治し、女郎屋にいた妓女たちを解放して新しい生活の手助けをした。また通貨を整理して物価の安定、生産の回復にも努力した。手を打つて喜ぶ庶民階層、懷疑的な知識人、ぐちをこぼし合う資本家たち、と市民の反応はまちまちであるが、「物価が安定して社会悪がごつそりと減つた、ということは、みんなが認めて、その点は、：¹⁰ 共産党の時世を徳とした」。

共産党の革命事業への共感はまた、献身的で理想に燃えている共産党員、解放軍幹部・兵士の表情から自然に伝わってくる。日本敗戦後、解放軍のタイピストとして徵用された日本人少女^の埜口阿文^{あみ}は、革命の理論は全く理解できないが、「年若く、素朴で、おおらかだった」延安から來た共産党幹部たちと接觸している内に、「今までに接したことのない新鮮な雰囲気を感じ

じた。彼らはそれを『革命的大家庭』と言つた。私には、何もかもが敗戦によつて崩壊したなか、ただひとつ希望が持てそうに思えたのが、これら理想主義的な人びとが語る熱意だつた』。一九四八年秋、解放軍が国民党支配下の長春、瀋陽を陥落させ、東北の全域を統一した時、この敗戦国の少女も、中国の民衆と同じように「『解放』の喜びに身も心も燃えたつ思いだつた」と述べている。⁽⁵⁾

以上のように、「解放」とは決してすべての階層の解放を意味していないにもかかわらず、戦乱、国民党の暗黒政治に不満を感じた大多数の民衆は、やはり普遍的に共産党の解放を歓迎し、支持したといえる。理想に燃える革命者の献身的精神、厳正な軍紀と好転した社会生活秩序を見て、人々は次第に新生中国への期待を膨らませたのであろう。

知識人の対応

知識人の場合、人によつて、反応の落差が大きいのが特徴である。国民党政府とともに台湾・海外に逃れたものもあるし、逆に外国に逃れず共産党を迎へ、あるいは海外からわざわざ帰国したものもあつた。全体的傾向として、愛国的・進歩的知識人、とくに学生や若年層は、共産党の政権を支持し、新生中国の誕生を熱烈に歓迎したといえる。

国民党支配地域の貴州で高校を卒業した学生樂黛雲は、貧しい民衆の生活、国民党政府の失政、アメリカ兵の横暴^{*}を目の当たりにし、未来の希望は北の共産党にあると信じ始め、国民党が提供した奨学金と出世の道を拒み、一人で北上して燕京大学（後の北京大学）に進学した。ここで彼女は共産党の地下活動に参加し、「一つの新しい社会、完全な平等を基礎にした、腐敗のない社会」をめざして、共産党に入党したのである。⁽⁵⁵⁾

(*この時期、アメリカ人は義勇軍、あるいは軍事顧問団の形で後方にはいり、蔣介石の抗日を助けていた)

樂黛雲と違つて、資産家の息子肅磊のような、共産主義の現実についてほとんど無知の支持者もいた。肅は、留学先のイギリスで社会主義の理論やソ連贊美の記事を読んだだけで「マルクスの信奉者」となり、上海解放の前、家族からの要請を拒んで上海にとどまつた。「中国に復興と正しい政府の新しい時代が明けようとしている」と言つて、彼は解放軍の進駐と共産党の政権奪取を熱狂的に歓迎したのである。⁽²⁷⁾特權ブルジョアで、国民党と深い関わりを持つ家庭の出身であることが、いかなる危険を意味しているかを悟らずに。この肅磊は、後の三反運動で手ひどく「鬭争」され、身の代金が支払われやつと着の身着のままで香港に脱出したのだつた。

以上の二人は多かれ少なかれ、共産主義についての自分なりの理解があつた。一方、共産主義を全く知らず、愛国心のみに駆られて「新中国」の旗下に結集してきた知識人も少なくなかつた。

シカゴ大学で博士論文に取り組んでいた巫寧坤は、母国の親戚や親友から送られてきた、国民党政権の崩壊を断じ、共産党を「新しい救世主」として讀えた熱気のこもつた手紙を読んで感動し、「自分の専門分野を生かして新生中国に貢献したい」という素朴な愛国心に駆られ、学業を中断して帰国した。⁽⁴⁵⁾ 共産主義やマルクス主義に関する彼の知識は、帰国を決意した後の一夜漬けで、皆無に近かつた。

解放（一九四九年）前の上海で国民政府の無能ぶりに幻滅を感じ、わずかの情報源を通じて「共産主義の指導者たちの生活の厳しさ、規律の正しさ、そして目標へ向かうひたむきさ」に感動し、解放を「平和と安定到来のよい機会」と歓迎したウイニー夫妻もいた。⁽²⁷⁾ 彼らは巫寧坤と同じように、愛国心こそあれ、共産主義への理解はほとんどなかつたのである。

一方、当初愛国心から出発し、次第に共産主義の世界観を受け入れていった知識人もいた。社会学者の費孝通は、その一人である。解放の初期、彼はアメリカにいる友人宛に次のようないい手紙を書いた。

「私は解放の過程から多くのことを学び、また非常に基本的で、貴重な経験を得ました。この経験は…多くの本質的な問題を考え直し、これまでの私自身の仕事を批判する機会を与えてくれました。私は再び一人の学生となつて、私自身の思想改造という『再建』の過程を心から喜んで受け入れています」。

自分の事業、新中国の未来・希望は、すべて共産党にあるという認識は、彼を共産主義に帰依させたのであつた。⁽¹⁸⁾

アメリカから帰国した建築学者梁思成も、費と同じタイプの人であつた。「共産党も中国人であるから、建築技術を必要とすることは変わりはない。どうせ雇われる身ならば、祖国に奉仕した方がよい」。父の梁啓超から「天下は我等が担うべきものなり」という抱負を教えられた彼は、大学教授のポストをなげうつて帰国し、入党願書まで書いて共産党員になつた。もつとも、共産主義、党の規則について彼は何も分かつていなかった。⁽³³⁾ 梁が共産党を通じて求めたのは、新中国の夢、自分の事業であつた。

無産階級

国民党時代の中国で高い社会的・経済的地位が保証された知識人とは違つて、階級的利益の

面で共産党を支持したのは、プロレタリアである。資本家に搾取され、社会的地位や私有財産がほとんどなかつた彼らにとつて、解放はまさしく自分たちの「翻身」（立ち上がる）ことであつた。

北京の浴場に勤めていた李福賢は、一九四九年解放軍が入城した時、三〇〇〇名の浴場労働者といつしょに町に繰り出して万歳を叫んだ。「夜明けだ、解放だ、毛沢東は我々の救い星だ」と。解放前の見習い時代、番頭や客に打たれたり、罵られたりするのは日常茶飯事で、給料はなく、唯一の現金収入は客から渡されたチップであつた。このわずかな額も、番頭に納めることが義務づけられ、理不尽な控除、頭割りの末、四分の三が取り上げられる始末だつた。「共産党がなくて、俺たちの今日があると思うか」と、李は三十数年がたち、文革を経た後でも、共産党への感謝を忘れない。李が解放によつて得た利益は、経済上の「翻身」だけではなく、「平等」を入れ、国家の主人公になつた政治地位の変化でもあつた。解放前は客を「二爺」（旦那）と呼んだが、⁽²⁵⁾解放後みんな「同志」となつた。

華北の太行山脈の麓に位置する峰峰炭坑でも、解放後、貧しい坑夫たちが立ち上がり、封建的身分制度を廃止して国家の主人公になつた。この炭坑に訪れたオーストラリア人記者W・G・バーチエットは、坑夫たちの「翻身」ぶりを次のように生き生きと描き出している。

「奴隸状態からの解放、労働者の経営管理、三〇〇人の労働者が昇進して経営の衝に当つていること、六〇人の労働者が技師としての教育を受けに派遣されたこと、四〇〇〇の新住宅が建ち、あとは引続き建築中であること、住宅も食事も無料であること、危険防止の最善の措置が講ぜられたこと、病気の手当ても医療施設の利用もすべて無料であると…」⁽¹⁾と。こうした政治、経済面での「翻身」の結果、「労働者たちのあいだに、高い政治的自覚をうみ、国民党や日本軍をも中国に連れ戻そうとしている潜在的侵略者（朝鮮戦争に介入したアメリカを指す）を阻止するためには生産を増強しようという無限の情熱をうんだ」のである。

農民

人口の大半を占める貧しい農民は、「解放」による最大の受益層であった。地主階級の搾取、迷信、売買婚姻など封建諸制度から解放されたばかりでなく、共産党の「土地改革」を通じて、念願の土地も無償で手に入れることができた。「自分の土地が持てるという希望こそ、革命への参与の最大の動機であり、多くの農民にとつては、それがすべてであった」と中嶋嶺雄氏が指摘している（『中国革命とは何であつたのか』）が、まさしくその通りだろう。

戦乱、飢餓による人口移動の激しい中国では、温情的な共同体意識、宗族、血縁的つながり

が薄く、独占的な土地所有の下での地主による農民収奪の残酷さは、言語に絶するものがあつた。土地が集中する四川省成都県では、人口一・一パーセントの地主が土地の九割以上を所有し、大邑県の場合、大地主の劉文彩の一族だけで、全県の土地の六割に当たる三〇万畝（一畝二六・七アール）を所有していた。地租も収穫量の五割から八割と高い（林蘊暉『凱歌行進的時期』）。

安徽省淮安県の管袁村の例を見れば、解放前、一二〇〇畝の土地のうち、地主は一〇二四畝を所有し、中には三〇〇畝以上を所有する地主も一人いた。²⁶

「土地改革」で、悪徳地主は「人民裁判」にかけられ、その土地、家畜、農具、種、粋、家屋もいっさい没収され貧しい農民に分配された。一九五三年当時、約三億の農民は七億畝の土地を無償で手に入れ、免除された年貢は、年七〇〇億斤（三五〇億キロ）にのぼつた、という（靳徳行他編『中華人民共和国史』）。

河市郷では、土地改革によつて土地、家屋だけではなく、地主の衣装箱、テーブル、椅子、鍋、釜、湯沸かしから花瓶まで分配され、農民への損害賠償金も渡された。「みんなは大喜びで毛主席を神様のようにあがめて毛主席と共産主義を信仰し始めました。たしかに、一生涯祈つても与えられなかつた財宝倉庫を、毛主席から頂いたわけで、他の宗教などきれいさっぱり



土地改革にともない、地主をつるし上げる農民たち（1951）

と投げ出しました。：起きるにも寝るにも毛主席です。雇農（小作）、貧農、一般無産者階級の毛主席信仰はたいへんなのです」と、福地いまはいう。⁽²⁾

土地革命と同時に、共産党はまた政治宣伝、思想学習を通じて農民を組織し、数千年来農民を圧迫してきた封建的制度、意識をも一掃した。男女平等を規定した共和国婚姻法の制定、識字運動の展開、封建的迷信の排除によつて、農民たちは精神的な解放も味わえた。

北京郊外の衙門口村では、政治的に国民党、日本軍と関わりを持った一貫道（民間宗教）が解散させられ、教祖による信徒のたぶらかしもお布施の強要もなくなつた。貞操の教えを守れず、妊娠して自殺寸前に追い込まれた未亡人の張は、新しい婚姻法のおかげで子どもを生み、再婚して自分名義の土地も与えられた。「毛主席が私に新しい生活の機会を与えてくれたのです」と彼女は感謝の気持ちを忘れない。また一二歳の時、許嫁にされ、奴隸のように打ちよう擲ちやくされた胡玉婕も、自分の名義の土地が与えられ、離婚を申し立てる権利も知らされた。これに元気づけられた胡は、重苦しい雰囲気に包まれた家庭から飛び出し、村の劇団、「掃盲」（識字）学級で活躍するようになつた。⁽¹⁾ 共産党は、人口の八割をしめる農民に、土地と新生活の可能性をもたらしたのである。

共産党への協力

以上のように解放の直後、各階層はそれぞれ受けた利益の多少により認識の差があるものの、大多数の民衆が「新中国」を歓迎し、またその代表である共産党を支持したといえる。この民衆の歓迎と支持は、また言葉にとどまらず、共産主義思想の受け入れ、「抗美援朝」（五〇～五三年）時の従軍熱や、新政府が起こした「生産節約運動」への自発的な協力となつて現れてくる。

（＊朝鮮戦争時、中国政府は「保家衛国」のスローガンの下で一〇〇万以上の義勇軍〔志願軍〕を朝鮮に送り込み、金日成政権を助けた）

朝鮮戦争が勃発後、燕京大学のキヤンパスは愛国的情熱に満ちていた。「アメリカ帝国主義の戦争目的は中国の侵略・支配にある」との宣伝を疑わずに信じた学生たちは「かつてのような従属と屈辱の再来は、絶対に堪えられない。どんな犠牲を払っても祖国を防衛し、戦争を国境の外に押しとどめなければならない」と激しく怒っていた。

三年生の樂黛雲は自分の激情を詩に表し、こううたつた。「（毛主席）あなたが一言呼びかければ、私たちは直ちにすべてをなげうつでしょう。暖かい衣服も、心地よい住まいも、安定した仕事もなげうつてあなたに従うでしょう：」。結局、この領袖愛・祖国愛を表した政治作

品は四つの賞に輝き、近所の若者、高校生まで連日押し掛けて来てキヤンバスに掲げられた詩を書き取るありさまであった。共産党の宣伝効果もあつたと思うが、一方、この詩は「当時の人々の一つの共通の感情をとらえて、人々が求めていたものを表現していた」ことも、間違いのない事実である。⁽⁵⁵⁾

四川省の河市郷では、土地改革の後、主人公となつた農民たちはよろこんで「公糧」（農業税）を納めるようになり、「秋の納税はまるでお祭りのような騒ぎで：神前に捧げものでもするように一番よい穀物を選んで、太鼓やつづみではやしながら、全村の農民が、男も女も、めいめい自分の分を行列をつくつて、かついて行く。：まったく解放中国でなければ見られない美しい光景」だと、福地いまが感嘆する。そのほか、共産党の政治、文化教育も効を奏し、村の子どもたちまでも、政府は人民の政府だ、工作員（公務員）はわれわれ人民から月給を貰っている、国家の富は人民のものだ、工作員はわれわれ人民のために服務しなければならない、と口をそろえる。土地改革後の一九五二年の正月は「甦った人民の歴史的な正月のよう」であった。人民達は「共産党は太陽だ、照らせばどこでも夜が明ける」と心から共産党への感謝を表したという。⁽²⁾ 河市郷の熱氣から、解放による農民意識の変化と共産党への協力の様子が窺えよう。

同じ時期、峰峰炭坑でも、模範競争と生産革新運動が始まり、「翻身」した坑夫たちは競つて過去の生産記録を次々と塗り替えた。日産四七トンの採掘記録は、七〇トン、一二〇トン、二〇〇トンへとはね上がり、最後には一五三・四トンという驚異的な成績がつくられた。「朝鮮の同志たちを援助」し、アメリカの「中国を侵略し、日本軍をもう一度つれて来ようとしている」陰謀を、生産記録によつて粉碎しようとする情熱が、記録の保持者羅永勤のエネルギー源であつた。

労働者たちの「抗美援朝」の従軍熱について、記者バー・チエットは次のように記している。

「私が訪ねた工場や鉱山や農村では、すべての身体強健な男女のうち、朝鮮行きを希望するものの割合がひじょうにたかかつた。機関士が七十二人ほしいというところへ、二、三時間のうちに千人の志願者がでた。：地方の農民組合が二百名の義勇兵を募集したところ、十二時間のうちに一万人が記名し：北京駅の列車勤務班の少女たちは、十六人のうち十五人までが第一日に志願した：」。従軍の動機を訪ねたところ、「生まれてはじめてわれわれは、ここ一、二年の間に幸福というものを知ったのです。われわれは土地を得ました。われわれは充分食べています。われわれの子供たちは学校へ行っています。われわれは軍閥に苦しみ、日本軍に苦しみ、国民党に苦しみました。そしてまた、これ以上アメリカに苦しめられようというのです。

アメリカは日本人を中国に連れ戻そうとさえしています。：われわれは、かれらが国境をこえるまえに、阻止しなければなりません。われわれが今日あるは、すべて共産党と毛主席のおかげです：」といった。

こうした熱狂的な従軍ブームの中には、三度も志願してやつと認められた、山東大学医学部長馮容堅のようないンテリの姿もあつた。「この二年間、私たちは新しい生活をしました。私たちの全部が希望に溢れています。これが破壊されようとしているのを、傍観していられますか？…もしも自分の力で、侵略者を私たちの国境の外に阻止するのに役だつことができれば、私は、私自身の家族の生命を救つたことにもなるわけじやありませんか」と、馮はいう。こうした高い政治的自覚を見せた馮は、つい二、三年前まで、国、人類に対する希望をなにもかも棄て、「考えることすら、他人にやらせた」、その日暮らしのインテリであつた。⁽¹⁾

ようするに、建国初期の三年間、各階層のほとんどの人々は、新中国の成立を歓迎し、共産党を支持したといえる。共産党の方針・政策は、軍隊、党員幹部の献身的努力、また立ち上がりた民衆の自発的協力によつて社会の末端組織まで貫徹され、国をあげて、一致団結して新中国の建設に取り組む新しい気運が形成されたのであつた。

たゞ、ここで無視できないのは、「新中国」に対する民衆の支持は、必ずしも社会主義、共産主義への支持・理解を意味しなかつたことである。小生産者意識の強い農民と、民主・自由を求めて「新中国」の旗下に結集してきた知識人たちは、やがて来る社会主義改造（所有制度の私有から公有・国有への改造）の潮流の中で厳しい試練に直面することになる。

二 社会主義改造への困惑（一九五三～五六六年）

共産党は、建国初期に獲得した幅広い階層の信頼と協力を背景に、土地改革、「抗美援朝」、反革命分子鎮圧運動、「三反五反」、^{*}党の組織整頓、など諸運動を成功に導く一方、経済面で国営企業、国家計画経済の強化を柱とする調整を行い、広範な「増産節約」運動を興して経済の復興も実現させた。一九五二年度は、国内の工農業総生産、国民収入のいずれも一九四九年度を大幅に上回り、折しも負担となっていた朝鮮戦争にも停戦交渉が進み、国際情勢と国内の政治、経済、社会の各面において、安定・繁栄の様相を見せたのである。

（* 党員幹部の汚職、浪費、官僚主義反対と資本家の贈収賄、脱税、国家物資横領、手抜き、情報窃取反対の経済闘争。五一年から五二年にかけて展開された）

建国初期の成功に自信をつけた毛沢東は、一九五三年六月、かつて政治協商会議において合

意を見た「新民主主義」の建国公約を破り、所有制度の社会主義改造^{*}を目的とする「過渡時期の総路線」を打ち出して、社会主義への邁進を始めたのである。

(* 所有制度の面における在来の農業・手工業・資本主義商工業に対する社会主義的な改造)

農業集団化の概況

この私的所有の根絶を目指した生産手段の社会主義改造は、農民、商工業者に大きな不満、不安をもたらした。

農村では、生産手段の公有（集団的所持）化運動は、「互助組」の段階をへて「初期合作社」「高級合作社」へと進み、公的所有の範囲、採算単位^gが次々と拡大していった。毛沢東の強い牽引の下で、運動は一九五二年夏から三つの高潮期をへて突き進み、五六年末終息に向かった。これで数千年来続いてきた農村の私的所有が根絶され、当初一五年間を予定していた目標はわずか四年余りで達成されたのである。

最初に行われた、農作業の協同化を内容とする「互助組」は、村の伝統であった、農繁期に労働力を融通しあう「換工」の性質を持ち、「自発、互利互恵、等価交換」という無理のない原則の下で、むしろ農具・家畜の少ない貧しい農民層からの自発的協力を得ていた。国家資金

の貸し付け及び農具・肥料供与面の「優先権」という利点もあり、五二年末には、組織率が農家の四〇パーセントに達し、生産性も高められた。「私的所有」に触れていないことと、党、国家の政治的支持と経済的支援を受けて安心感があることが、農民の多くがそれを受け入れた理由であった。

一方、共産党の『農業集団化重要文献匯編』によると、この時期、農具・家畜と生産の経験を豊富にもつ富農層は、ほとんど「単独經營を望み」、それに次ぐ実力を持つ中農層も「とりあえず互助組に参加して実力を養い、もつて将来の単独經營に備える」という志向であった（林蘊暉ほか『凱歌行進的時期』）。つまり、多くの農民にとって、「互助組」は生産手段の公有化の第一歩ではなく、逆に、いつか自立するための、実力の養成所であった。

しかし、推進者毛沢東にとつては、「互助組」はあくまでも「社会主義の萌芽」であり、それは半ば社会主義化された「初級社」、さらに完全に社会主義化された「高級社」へと発展してゆかねばならないものであった（『毛沢東選集』V）。毛は、この基本認識上のギャップを、思想教育と力の行使を通じて埋めようとしたのである。

「初期合作化」運動は、一九五二年一〇月に行われた共産党の「互助合作會議」の後に強められ、同時に社会主義工業化建設を支えるものとして、新たな食糧統制政策（統購統銷政策）

も敷かれ、農民に対する収奪が強化された。この新食糧政策は、また農村の個人経済（個人単位の生産方式）・自由市場経済を国営経済の枠組みに組み入れる方向性を示すものでもあった。

こうした社会主義改造の強行は、農村に大きな混乱をもたらした。一九五四年第二次合作化運動の高まりの中で、食糧の供出に抵抗したり、「公有」の対象となる家畜・農具を処分したりするような現象が多発していた。

広東省の新会県、高要県の農民が「共産党は変わった」、「現在の政府はなにを考えているか分からぬ。我々を袋小路に追いやろうとしているのではないか」、「毎年このようになるとられたらこれからどうやつて生きていけるか」と政府の食糧供出策に対して不満をこぼし（『中国農業合作史資料』）、熱河省（現河北省の一部）では、農民たちは「合作」を見込んで急いで手持ちの家畜を処分したため、家畜の価格が軒並み暴落した。同省における一九五四年度の国営公司の家畜購入量を見ると、前年度同時期に比べ、牛は六・五倍、羊は一〇・二倍に増えるという驚異的な数字を示している（『農村工作通信』）。報告を聞いた毛沢東でさえ、この現象を、「生産関係（手段）の暴走」（所有制度の激しい変革）によつてもたらされた「生産力の暴動である」と嘆いたほどであった（『三中全回以来の重要な文献匯編』）。

合作化運動は、以上のように農民からの強い抵抗を受け、一九五三、五五年の二度にわたつ

て、「冒進」政策の「調整」が余儀なくされたが、いずれも効果が十分に現れる前に毛沢東本人によつて否定された。五五年七月末、毛は各省市党委員会書記長の会議で、合作化の推進と反対を「資本主義と社会主義との二つの路線の闘い」と規定して（『毛沢東選集』V）反対意見を封じ、その後、自ら第三次合作化運動の高潮を興し、五六年末までに一気に農村の合作化を完成させたのである（林蘊暉ほか『凱歌行進的時期』）。

農民の対応

この急激な「合作化」運動に対し、農民はどのような反応を示したのか、具体的な例を通じて見てみよう。

房山県吳店村の場合、土地改革後、「互助組」が貧農層を中心自發的に組織されていた。「初級合作社」をつくるとき、「動員大会」が開かれ共産党からの圧力があつたが、不参加の自由も認められていた。最初、初級合作社の組織率は戸数の約三分の一だったが、次第に増えていった。「最初は参加する必要を感じなかつたが、後に全員参加となつたので参加しないわけにはいかなくなつた」とか（賈瑞）、「初級社がうまくいき、力量があり、政府も支持しているのをみて、やがて入社した」とか（趙鳳鳴）理由はまちまちだが、一つの潮流として普遍的に

受け入れられたようである。

吳店村の初級合作社は、經營の方もうまく行つた。参加者が金を出し合つて高価な家畜を買ひ、「勞八地二」の原則で、拠出した土地の面積に応じた分配も行われた。前より食糧の分配も多くなり、「二分かせげばよい」時代といわれた（禹國英）。成年男子は一日六から十分稼ぐのが普通であるのを考えれば、生活の余裕が窺える。

しかし、「高級合作社」の段階になると強制の色が強まつた。派遣された工作隊による大がかりな「掛紅旗」（赤い旗を掲げて社会主義化を受け入れること）動員が繰り返され、上からの動員、教育も徹底的に行われた。参加したがらないものもいたが、時勢に流されて、すべて参加した。「あの頃は共産党の道を歩まなければ、すなわち反社会主義だつた」と農民郭仲安は語る⁽⁴⁴⁾。

陝西省柳林村の場合、合作化は最初、良質な農地・家畜を豊富にもつ富裕農民層から強い抵抗を受けたが、これに対し、工作隊は綿密な思想教育を行つた。内容は、入社すれば、決して損はないという収入上の試算と、「働きに応じて分配する」という社会主義の分配原則に関する説明であり（陳洪亮）、また、「自分の利益のためだけに働くことを考えるべきではない」、「新時代なのだから、貧乏人も他人を働かせて暮らす者もいてはならない…」という共産主義

精神に関するものであつた（高賓⁽⁴⁾）。もともと革命の根拠地だつた柳林村は、村人の政治的自覚が高く、全体としてうまく行つたようだが、逆に高圧的な手段で合作社化を進める地方も少なくなかつた。

浙江省吳興県善連区では、合作化の動員大会は、地主、富農のつるし上げと同時に行われた。主催者の県党委員会宣伝部長は、「社会主義の道はすなわち農業合作社であり、この道を歩まないと、彼ら（つるし上げられた地主、富農）と同じ結末だ」と、農民の入社を迫り、また階級の区分（富農に指定されると、政治面で非常に不利な立場になる）、食糧供出高の面で単独経営の農民に圧力をかけ、合作社への参加を強要した（『農業集団化重要文献匯編』）。

戦後東北の某地に居残つた旧日本人開拓団員の話である。

「一九五三年の春、区政府、县政府から工作員が来て、毎夜十時すぎ、十二時すぎまで全村會議が開かれ：初期農業生産合作社を作れといふのです。全村の農民はもちろんのこと、党員の村長さんも、本心では組織したくない様子でしたが、組織せぬわけにはいかないということになり：」二一戸の農民による合作化が始ました。初期社の生産実績は上々で、秋に一人当たり三五〇キロの食糧を手元に残すことが許された。五五年の春、隣の部落と合併して高級社を組織することを命ぜられ、「本心では誰も加入したくなかったのですが、一人として反対した

者ではなく、農民たちが県から來た黨員の顔の動きを見守るだけで…、「土地はいつか返してくれるのですか」『馬はどれくらいで買つてくれるのですか』『食糧はどれくらい残してくれるのですか』などと聞くのが、精いっぱいというところでした」。

こうした半ば強制的な合作化は良い結果を生むわけではなく、一九五七年、この村の成年男子一人に残された食糧は「互助組」時期の半分程度の一七五キロだった。豚、馬などの家畜が瘦せて死に、「どの農民も、自分から進んで鍬をとれるのは、政府が自由耕作のため僅かばかり目こぼしをしてくれている自家保留地に向かう時だけでした」という。

合作化に反対した者には、普通の農民ばかりではなく、運動の推進者たるべき共産黨員も含まれていた。

「王という黨員は、…土地改革で配給を受けた土地を基にして、その後、一心に働いて土地を買い、五ヘクタールの土地を持つて、共産党に感謝していましたが、合作社が出来て土地を全部奪られ、『被國家没収了』（國に没収されてしまった）と言つて泣いていました」。「その他の黨員たちも、…共産党が土地を無償でくれたという事実に一番感謝して、党のために本気で働いて」いたが、突然の土地「没収」に「すっかり消極的になっています」。

以上の例は中国農民のすべてを代表できる典型とはいがたいが、合作化の裏側を示してい

ることは、確かにある。勿論、農民の中に積極的な協力者はいないでもないが、全体として、土地の公有化に困惑を示したといえる。土地を与えてくれた共産党・毛沢東への純朴な報恩意識、お上の命令に逆らえないという伝統的な諦観と、敵としてつるし上げられる階級闘争への恐怖感などの、複雑な感情が入り交じって、農民は与えられて数年もたっていない土地を、自らの手で共産党へ返上したのである。

「公私合営」

同じ時期、都市において、私営の手工業、資本主義商工業に対する生産手段の改造も、「公私合営」の形で行われた。貰った土地を「返上」する農民の場合とは違つて、国有化を最終の目的とする都市の社会主義改造は、形式上は有償であるとはいゝ、私営企業の所有権、経営権の全面委譲を迫る、露骨な「没収」でもあつた。一九五三年一〇月、「中華全国商工業連合会代表会議」で、社会主義改造の「総路線」精神が貫徹されると、資本家たちの動搖が現れた。「やはりすばらしいのは新民主主義の方だ。新民主主義万歳こそ、我々の内心の叫びだ」。「なぜ共産党は一九四九年の時点で『総路線』を言わなかつたのか？」はつきり言つておけば、「誰もここ（大陸）に残つちやいなさいさ」。「賊の船に乗つた以上もう降りられない。ついていく

なら出口があるかもしれないが、逆らえば自滅のみだ」。「鞭で打たれて進むより、進んで歩いた方が増しかもしれない」（林蘊暉ほか『凱歌行進的時期』）。

資本家たちは陰口をたたくが、表だって反旗を翻すものはほとんどなかつた。農民の抵抗とは反対に、諦めて柔順に「公私合営」の改造を受け入れたのである。五五年一月、共産党中央の「資本主義商工業改造問題についての決議草案」が可決されると、たちまち、大都市を中心、「公私合営」のブームが起こり、わずか数カ月で資本主義商工業の改造が一気に完遂されたのである。手順を踏んだ堅実な過渡ではなく、社会主義「革命」というべきものであつた。

『人民日報』の記事は、「公私合営」の光景を次のように描写している。

「…上海では、至る所に『公私合営慶祝』と書かれた赤い横断幕と金色の『喜』字が見られ、資本家と労働者たちが一緒に参加した吉報隊は銅鑼をならして通りを行き来した。『公私合営』として認可を受けた企業、商店の入り口は、まるでお祭りのように、幾重にも飾りたてられ、慶祝式典が盛大に行われた。

「…同じ時期の北京でも、資本主義商工業の改造が高潮を迎える、各地区で昼夜分かたず銅鑼、爆竹の音が響きわたつた。主要道路に面した私営の工場、商店のほとんどは、赤い横断幕を掲げ、祭りの飾りたてを施し、万歳行進を繰り広げた」（『人民日報』一九五六年一月三日）。

こうして一九五六年一月、中央の決議案可決後わずか二カ月で、北京、上海の官製集会で「社会主義改造」の完遂が宣言されたのである。

資本家たちはなぜ銅鑼、太鼓をならして、「公私合營」を歓迎したのか。二つの理由があると考えられる。

まず政治面で、強大なプロレタリア独裁に対する怯えである。建国初期の「反革命分子鎮圧運動」や、「三反五反」運動を経験した彼ら（民族資産階級）は、反抗した仲間の悲惨な最期を見て戦慄し、その上相次ぐ政治教育、階級教育に煽られた従業員の階級的敵愾心にも圧倒された。かつて「新民主主義」の建国綱領の中で、自分たちも共産党の同盟軍として認められたが、三年も経ずして毛は前言を翻した。

「地主階級と官僚資産階級が消滅してから、国内の主要対立は労働者階級と民族資産階級の対立に変わった。故に民族資産階級はもはや中産階級ではない……」（『毛沢東選集』V）と、毛はいう。「搾取階級」のままでは、社会主義に向かう人民中国でもはや生きる道はない、と、彼らは悟つたのである。

工場などの資産どころか、秘蔵の古美術品まで政府に寄付したある塩業資本家の息子は、父親の動機を次のように分析した。「徳を積み名を後世に残したい心も全くないではないが、将

来のための政治的資本を少しでも買い求めようとするのが、父親の本意だつた。当時の資本家はみんなこういうふうに考えただろう⁽³⁵⁾。多くの資本家にとつて、政府への協力は、安全投資のようなものだつたのである。

次に、経営面の理由である。建国後の国営經濟、計画經濟優先の政策の下で、市場經濟の法則は次第に失効し、私営の商工業は、発注・商品確保の面で優遇策を受けた国営企業に圧迫され、次第に経営難に陥つた。一九五二年、朝鮮戰争の最中、全国的に私営企業の経営危機が出現し、生産の回復を急いだ当時の政府が、私営企業に譲歩してその再建を助けた一幕さえあつた。その後、私営企業はいつたん活気を取り戻したものの、社会主义改造の横波をうけて再び後退した。一九五五年の段階では、資本主義の工業の比率と、私営商工業の年商高は全体の一割程度までに萎縮してしまつた（宇野重昭ほか『現代中国の歴史』）。このまま破産するより、企業を献上して「定息」（配当）とポストをもらう方がましかも知れないと、資本家たちは考えたのである。

このように「公私合営」は、私営商工業者の経営意欲を喪失させ、企業生存の道を遮断した後で行われたとどめの一刺しであり、資本家にとつて選択肢のない、ただ一つの道であつた。

知識人の思想改造

知識人たちの受難は建国してまもなく始まった。共産党は知識人の協力を必要としたが、それには思想の「脱胎換骨」（徹底的な改造）という条件が付されていた。知識人のすべてを対象とする大規模な思想教育は一九五一年秋から始ましたが、内容は、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の学習と、「人民のために奉仕する」という革命的的人生観の樹立であった。一九五二年春になると、思想改造運動は時の「三反運動」と一体化し、組織の肅清に重点を移してエスカレートしてゆく。ほとんどの知識人が運動に巻き込まれ、過去の経歴を告白させられ、革命・共産党への忠誠を誓わせられた。共産党の資料によると、大学の場合「必要な自己批判をして順調に通関した」教員は約六割強、「適当な批判を受けてから通関できた」教員は二割弱、「批判と自己」批判を繰り返してやっと通関を認められた」教員は一二パーセント、「最後まで通關できず（敵として認定）処分を受けた」教員は一パーセント、といった割合であった（靳徳行他編『中華人民共和国史』）。ここでいう「通關」の意味は、マルクス主義、プロレタリアの階級的立場の全面的受容という、文字通りの洗脳であった。「民主建国」という共産党の約束は、結局空手形に過ぎず、マルクスを信じない知識人には最初から生きる道が閉ざされていた。

新中国の建設に情熱を燃やして帰国した巫寧坤を待ち受けていたのは、こうした「知識人の精神と良心に対する宣戦布告」ともいうべき思想改造であつた。燕京大学（一九五三年、北京大学と改名）では、思想改造と同時に組織粛清が行われ、朝鮮戦争を背景にして「親米、崇米、恐米感情」の一掃が、思想教育の重点となつた。反米キャンペーンの中で、陸志偉学長、趙神学部長、張東遜哲学部長らが真っ先につるし上げられ、大衆の非難・罵倒をうけた末、職をはくだつされた。運動の先頭に立つたのは、教え子であつた学生たちであり、陸学長の一人娘も糾弾の先頭に立つ一人であつた。

巫寧坤のいた英文科でも教師陣が残らず批判され、教員集会で過ちを告白させられた。

「教授が順番に自分の過去の過ちを悔い、あるいは革命の道で進歩の遅いことを反省するのである。オックスフォード大学出身の教授、愈女史は、当時台湾の蔣介石政府の国防次官をつとめていた兄との過去のかかわりを語り、完全に兄との縁を絶つと誓い、この話にふれるとよく泣きくずれた」。巫本人も、かつて国民党政府の航空隊に参加した経歴（抗日のため）が怪しまれたので、自ら帰国するまでの詳細な履歴を書いて提出し、「思想改造に邁進する決意」を披瀝したが、受け入れられなかつた。

運動の結果、学者たちは「そろいもそろつて、いつせいにマルクス主義の唯物思想へ宗旨変

えをした」のである。⁽⁴⁵⁾

この「脱胎換骨」の思想改造は、多くの知識人を傷つけ、巫寧坤のように、失望、苦痛を感じたものは少なくなかったが、全体として知識人たちに受け入れられたといえる。若い学生を中心とした積極的な支持層はさておき、七割をしめる順調に「通関」した者の数からも、知識人全体の豹変ぶりが分かる。また、知識人たちの回想、体験記を見れば、のちの受難者の中にも建国初期のこの時期を贊美するものが多い。

資本家の息子で小学校教師だった某氏の回想である。「…私はひたむきに思想改造に励み、出身に問題があるので、改造を通じて榨取階級の血をすべて取り替えようと決心した。…同時に、小心翼々として自分の『安全係数』に気を配り、今日は何を話し、何をやった、上司の機嫌をそこねたことはないか、と毎日徹底的にチェックして怠らなかつた」。共産党に信用され、青年団（党的外郭組織）の支部委員、労働組合の議長に選ばれた彼は、ますます恐縮し、仕事を通じて共産党に恩返しする気持ちがいつそう強烈となつた。「私は公私をとわざあらゆることについて真っ先に党からの指示を仰ぎ、…ブルジョア的階級意識の台頭を防止しようと努めた」⁽³⁵⁾。

のち右派となつた樂黛雲も、この時期は非常に樂天的だつたと回想する。思想改造による私

生活の犠牲も苦痛ではなく、敵対者を摘発する組織の粛清も、社会主義改造の「基礎作業」と認識していた。

「一九五六六年には誰もが興奮していた。闘いが終わり、とうとう国家の建設に専念する時が来た。もう階級闘争も、対立もなくなるのだ。今や、人民が自己⁽⁵⁵⁾を発展させ、それによつて社会主義の未来に貢献することが党の方針だつた」。

社会主義建設の使命感を抱き、樂は希望に溢れていたのであつた。この時、樂と同じような意識を持つた若者は決して少なくなかつた。

「一九五〇年代のようなすばらしい歳月を決して忘れまい。われわれあらゆる職種の若者は、自分は社会主義祖国の子供だと、みんな強く意識していた」（鮑恵喬、ピアニスト⁽³³⁾）。

「一九五〇年代のあの頃は幸せな日々でした。党の言うことは何もかも信じだし、それに自分の建設のために働きたかった。私たちはとても愛国的でした。それは共産主義者であることと同じでした」（木蘭、学生⁽³¹⁾）。

社会主義の改造、知識人の思想教育は、つまり、以上のように無数の純真な若者のエネルギーによつて支えられ、成功したといえる。

要するに、出し抜けの社会主義改造は、農民層、ブルジョアジーと知識人層に大きな衝撃を与えたのは事実だつたが、改造 자체は、大した反抗を受けずに順調に実現された。自ら思想改造をして社会主義の潮流に順応しようとするものもあり、不承不承ながら時流に流されていつたものもあつた。順応の理由には、「お上」への恐れや行政手段の強行など受け身的な一面があるが、生活水準の相対的安定と、思想教育による政治的自覚の向上から生まれた、民衆の自発的協力の一面も無視できないだろう。

建国初期と比べ、民衆の結束力、共産党への支持と共産主義信仰の熱気は幾分薄れたものの、共産党政権の組織力と政策の行使力はなお有効に機能したといえる。

三 「反右派」と「大躍進」（一九五七—一九六一年）

1 知識人の受難——「反右派」運動

生産手段の社会主義改造に「勝利」を収めた後、毛沢東は、時を移さず、独自の社会主義建設の道を模索し始めた。「建設」となると、またしても建国初期と同じような問題にぶつかつた。知識人の協力問題である。一九五六年四月、毛は知識人の支持をとりつけるため、言論の自由化と思わせる「百花齊放・百家争鳴」のスローガンを打ち出し、世論の活発化を期待した。ところが、同じ年、社会主義陣営の内部からソ連のスターリン批判、ハンガリーの民主化・脱ソ連化の事件^{*}が相次ぎ起り、これと呼応するかのように、国内では「百花齊放」に乗じ

て共産党を批判する動向が生まれた。

(*一九五六年一〇月発生した脱ソ連化の民主運動。ソ連の武力干渉によつて弾圧された)

これに對して毛沢東は、社会主義改造の順調な展開と安定した国内情勢を背景に、党内外の批判・自己批判という「民主」的手段によつて「人民内部の矛盾」を解決できると確信していた。五七年四月、共産党は大規模な「整風運動」（組織整頓）を起こし、「言う者には罪なし」という寛容な姿勢を示して、党内外に率直な意見・批判を呼びかけた。

しかし、毛は国内の情勢を甘く見ていた。社会主義改造による「新民主主義」の公約違反、思想改造の強要、一党独裁の高圧的姿勢と發生しつつある官僚主義などに対する一部の知識人の不満は、この時すでに爆發寸前にまでなつていた。彼らは、「整風」の機会を借りて、好意的な諫言、悪意の攻撃などごもに、数年来たまつた不満を一気にぶちまけた。一時は、種種の意見、建議、あるいは攻撃・批判が新聞の紙面に溢れ、中には部長（大臣）級の大物の発言や、「党の天下」の独裁支配を批判、自由化を要求し、一党制の実施を迫る大胆なものもあつた。

この共産党批判の勢いは、毛の予想よりはるかに強かつた。このまま手をこまぬいて放つて置いたら、社会主義建設への協力をえるどころか、第二のハンガリーアン��事件にまで發展しかねなかつた。

いと、毛は危機感を強めた。慌てふためいた毛は五月、「言う者には罪なし」の約束を「洞穴から蛇を誘い出すための陽謀」（陽謀とは、陰謀に対し用いられた毛の言葉）として逆用し、自ら陣頭に立つて「反右派」運動を開展させた。

各官公庁、マスコミ、大学、研究機関では、大がかりな右派狩りの運動が一斉に始まり、共産党への意見を掲載していた諸新聞も一夜で論調を変え、運動の急先鋒をつとめた。「言論の自由」を味わったのもつかの間、人々は再び反右派運動の波に飲み込まれてしまったのである。この運動の結果、数カ月前まで「人民内部の矛盾」（内部で解決をはかる問題）として処理されるはずの知識人五五万人は、「右派分子」のレッテルが張られて「敵」となり、そのほか、「右傾」として批判され行政処分などを受けたものは、さらにこの数倍にのぼつた。

北京大学では学生五〇〇名、教師一〇〇名、大学構成員の七パーセント以上が右派分子の宣告をうけ、文学史教室の三七名の教師のうち、一〇名が一九五八年に何らかの処分を受け、そのうち八名が右派のレッテルを受けていた。⁵⁵ 天津市の某設計院では、総勢五〇〇名の知識人のうち、八八人が右派として摘発されていた。⁵⁶ 知識人たちはこの毛沢東の「陽謀」によつて完全に打ちのめされてしまつたのである。

以下では、実例を通じて反右派運動の中の人間像をみてみよう。

帰国早々、思想改造と階級隊列整頓の衝撃を受けた巫寧坤は、永遠に弁明できない「歴史問題」（経歴上の汚点）の焼き印を背負って、天津市の南開大学に左遷された。しばらくは教育の本務につくが、「バカげた思想改造」に消極的な態度を示し、また思想・言論の不自由さにも不満を持ったため、再び睨まれ、学部の集会でつるし上げられた。^{*}一九五五年には、「隠れた敵、スパイ」というでっち上げの嫌疑で「胡風反革命集團」事件に連座させられた。この運動は、一〇〇人あまりの外国文学系の教職員のうち、于晋鐸教授をはじめとする三人の犠牲者を出してやつと収まつた。

（*胡風は共産党の文芸理論家。毛の文芸理論と対立し「反党集團」として摘発された。連座者一二〇〇名、逮捕者九三名、うち「胡風分子」と断罪されたもの七八名。完全な「文字の獄」〔言論の弾圧〕であった）

一九五六年は、巫寧坤にとつて、人生の転機に思われた年であつた。「百花齊放・百家争鳴」という対知識人政策の転換で、隔離監視中の彼は党中央の幹部養成学校に転任し、教職に復帰したばかりでなく、英語の能力が買われて党中央会議の専属翻訳者に起用された。中央機関の高級リゾートへの避暑旅行や、国慶節の日に閱兵台に立つ優遇も受けられた。知識人政策の転

換に感激した巫は、過去の恨みをすべて水に流し、改めて国に対する信頼感を取り戻したのである。

五七年の「整風」が始まると、彼は党组织からの要請に応え、祖国につくそうとしてアメリカより帰国した自分の純粹な気持ちと、帰国後うけた数々の苦難の経験を話し、燕京大学、南開大学時代のつるし上げ、闘争会の理不尽を訴えた。教授仲間達と酒を酌み交わして真情を吐露しあう酒席で、ほろ酔いで興奮した巫は、「自由か、しからずんば死を！」と英語で叫び、同席の黄教授も、スターリン批判を進めたフルシチヨフを称賛し、しまいには「フルシチヨフ万歳！」と絶叫した。

反右派運動が始まると、これらの発言はたちまち罪状となり、巫は、再び全校の学生、教職員の前でつるし上げられた。同じ席で騒いだ仲間たちが、わが身の安全のため前言をひるがえしはじめ、自己の誤りを告白したり、密告したりした。一緒に転任してきた楊教授は、南開における巫の過去の「罪惡」まで暴き、コロンビア大学卒の若い女性教員は喉もさけんばかりに、巫は米帝国主義のスローガンを教唆煽動したと証言した。酒席でいつしょに高笑いをした晁も、自分は「こみ上げてくる怒りをおさえて、いやいや聞いていた」と身の潔白を訴えた。巫は「妻は私を密告するよう何度も勧められ……つい数カ月前までは親しく接してくれた同僚や

学生も、私を避けるようになつた」と述べている。⁽⁴⁵⁾ 共産党の階級・敵味方の壁の前での、良心、友情、人格というもののもうさが窺える。巫はさんざん罵倒され鬭争されたあげく、「過激の右派分子」と認定され、裁判もないまま刑務所行きの身となつた。

「档案」（身の上調書）における「歴史問題」を引きずつた巫寧坤と違つて、もともと共産党に忠実だった党员、活動家たちが党に意見を提出した理由で右派に指定された例も多かつた。燕京大学の学生時代、毛に対する忠誠を示した樂黛雲はこの時、教員で、共産党支部書記のростにいた。毛主席の偉しさを留保なしに信じた彼女は、「整風」運動が始まるとき、党の呼びかけを素直に信じ、党に対し誠意的な批評を行つた。その後反右派鬭争が始まった時も、支部書記として協力し、右派を搜しだしては真剣に告発した。しかし、まもなく、彼女自身の個人主義的教育の主張、同人雑誌の企画などが密告され、樂もついに右派分子としてつるし上げられた。

「そんな！……私は党や毛主席に反対したことは一度だつてないわ。国家を害するようなことは何一つしていない。私は心底、完全に忠実だわ！」と、樂が受けたショックは大きい。つるし上げの集会やその後の様子について、樂はつぎのように描いた。

「今教室を一瞥して、私の運命を見届けようと集まつた人々の顔に冷たい好奇心を認めた。

：誰も私に話しかけなかつた。ありありと満足の表情を見せてゐる者さえいた。：さあお前の番だ、と日々にいつてゐるようと思われた」。「いざれも永年の友人、同僚でありながら、みな私を見ぬふりをし、私が近づくと顔を背けるのだつた。自分がまぎれもなく追放者であることを、私は衝撃を持つて実感した。私は傷つき怒りがこみ上げた。どうしてこんなに素早く変われるのか：」。

右派と認定された者は、内心の不満、冤罪意識はあるものの、ほとんど反抗せずに罪を認めた。抵抗は無駄だけでなく、死を意味するからである。

巫寧坤の対応を見てみよう。

「私は、人民革命とたたえられた国に身を捧げる決意で帰国した。本当にまじめな気持ちだつた。：先の政治キヤンペーンでは、迫害を新政府が犯す過渡的な逸脱行為として大目に見た。私は新政府が長い暗黒時代から、国を光の世界へと導くことができるという希望を抱いた。だが、残酷な現実につき落とされると、希望的観測で自分をごまかすことができなくなつた。共産主義者の弁証法的全能世界では、意のままに白を黒といいくるめ、悪を善に変えることができた。私は高い代償を払つてそれらの教訓を学んだ」。「私は徐々に折れて少しづつ自己批判を進上し、罪をみとめたあげくの果てに、『寛大なご処分をお願いします』と哀れみをこ

う始末だつた」。⁴⁵

一方、巫寧坤とは反対に、右派と認定されながらも毛沢東、共産党への信頼を搖るがさないものも多かつた。

党からの処分を受けるに当たつて、樂黛雲は苦しい立場に立たされた。「眞実を述べ、自分は右派分子ではない、私を追放するのは間違つてゐる」と反論する気持ちは山ほどあつたが、「反論は私のためにも、党のためにもならない」、「個人が不当な扱いを受けることは党の権威を堅持することに比べたら、はるかに小さなことだ」と己に言い聞かせ、黙つて自分を除名する組織決定に同意し、屈辱的なサインをしたのである。樂は、「敵」になつてからも心の中で党員であり続け、「偉大な党はいつか必ずこの誤りに気づく」と、心から信じていた。

自分の無実を確信する樂と違つて、わけの分からぬまま右派となり、繰り返された批判の中で次第に自分の「罪」を悟り始め、心にもない自虐的な反省を演じる知識人も少なくなかつた。樂の同僚、文学系党総支部書記の魏もその一人である。右派のレツテルをはずしてもらうため、彼女は党から求められるままに服罪し、長い告白文を書いて「人民の中に戻る」ことを達した。「我々は、たとえ今まで革命につくしてきたとしても、今は党の敵なのだ。とにかく自分が本当に犯罪者であると認めることが必要なんだ。正常な生活を取り戻すには、ほかに道

はない。しかも、それが党の政策の正しさを確認することになり、党のためになる」と魏はいう。⁽³⁴⁾

声楽家の張権は、魏よりさらに単純である。党の組織整頓運動の折、彼女は「毛主席の呼びかけだから間違いない」と思い、党に対して善意的批判を行つたが、このお陰で、夫婦とも右派と認定された。夫が獄死に追い込まれ、自分も酷い迫害を受けたが、共産党への信頼を搖るがさなかつた。「この間、私は毎日のように、ひたすら自分の罪を懺悔した。心から罪とは思わなかつたが、『結果的には党に反対した』⁽³⁵⁾という理屈をもつて自分の心を責め、内心の落ち着き、精神的な救いを求めようと努力した」。

天津市某設計院のある技師は、無実の訴えをあきらめ、献身的働きぶりを通じて党に対する赤誠を示し、右派のレッテルが外される日を待ち続けた。「現場で、私はがむしやらに働き、昼間は肉体労働に励み、夜は呼び出しに応じ設計の手伝い（原則として右派になると技術から外される）に精を出した。いくら疲れても決して文句を言わなかつた」。このほか、時間を見つけては、食堂で皿洗い、野菜洗い、掃除、ゴミ出しに励み、毎朝現場の労働者たちがまだ起きない内に、洗面器に水を張つてそれぞれの宿舎に届けた。「右派のレッテルがまもなく外されるという噂を聞いたとき、その喜びはとても言葉で表せるものではなかつた」。この技

師の努力は結局すべて水泡に帰し、右派のレッテルが外されたのは、二〇年以上後の一九七九年であった。

共産党の階級教育の下で、右派となつた被害者の家族が、肉親より共産党を選び、家族の悲劇をさらに拡大した例も少なくなかつた。

梁恒の母は、共産党の下級幹部であつたが、党に意見を述べたことで右派分子となつた。「父は心から党を信頼しており、党が誤りを犯したり、間違った判決を下すなどということは絶対ないと信じていた」。伝統的家族観と政治的忠誠心のジレンマに苦しんだ末、梁恒の父は党を選んで妻を糾弾した。「それこそが家族を崩壊から救う唯一の道だと彼は信じた」。まるで「宣伝機械」のように変身した彼は、妻に「自己改造」を強要し、時には怒鳴つたり殴つたりする暴行をくわえた。幼い子ども達にも、「敵」である母への敵愾心を教え、最後にはついに政治離婚の悲劇を演じた。母親の愛から引き離された子供達は、最初母が恋しくてたまらなかつたが、学校で階級教育を受けていた内に次第に変わつた。「私は母がほんとうに何か悪いことをしたのだと信ずるようになつた。父や先生たちがそういつたし、同級生たちは、母が犯したはずの罪のゆえに私を憎んだからだ。とうとう私は淋しくても母を訪ねようとしなくなつた」。遠くからみかけても、声もかけなくなつた。梁恒は、この時まだ小学校に入学したばかり、この時まだ小学校に入学したばかりだ。

りの子どもであつた。⁽¹⁶⁾

次はある女優の懺悔録である。

舞踏家のたまごだつた一歳の時、文芸界の幹部である父は右派の宣告をうけた。先生から父と一線を画すように言われた時、「私は悲しんだが、頷き、そのまま父と別れた。まるで無血動物のように！」その後、父が死ぬまで、会うことはなかつた。この選択は、階級教育から得られた自然な反応であり、「決して巻き添えを食うこと」を恐れるためではなかつた。：ある日、父が敵の軍服をきて、後ろから私に追い迫り、銃を私に向けて発射する夢さえ見た。これが当時の私が父に対してもつっていた実の感情であつた。父が強制労働キャンプに送られた後、彼女は父に一通の手紙を差しだしたが「お父さん」の称呼を使わなかつた。右派の父を持つことに恥辱を感じたからである。あたかも厳しい判決文を下すように無情な言葉を投げつけていた。「あなたはいま人民の敵なので、慎んで自己改造しなければなりません。人民の隊列に戻るまで、私はあなたをお父さんと認めることは出来ません」と。

冤罪を着せられた上、娘の愛情まで奪われた父は、四年後の大飢饉の中、「北大荒」（黒竜江省の辺境地）の労働矯正キャンプで餓死した。四五歳の若さであつた。枕の下から、娘のスチール写真を載せた古い雑誌が発見された。⁽³⁵⁾

反右派闘争の中、共産党の「陽謀」を目の当たりにして賢くなり、自己防衛の護身術を学んだ人も、少なくなかつた。あるキリスト教徒の医師は、人間の良心と党に対する信念の間で揺れ、苦悩した末、わざと伝染病に掛かり、隔離病棟に運ばれたおかげで、良心に反する政治運動から身を守つた。共産党に進言した正直な友人がつぎつぎ右派にされたのを見た彼は、決心する。「私は絶対に自分の考えを言うまいと誓いました。思わず言つてしまふような事態は極力避けたかったので、人を招待もしなければ招待されないようにもしました。手紙も書きませんでした。仕事上必要なとき以外、人と口をききませんでした。子どもたちの前でも、妻と私は会話に気をつけて、安全な話題や惜しみない党賛美しか口にしないようにしました。私も妻も、二人のあいだか神とのあいだでしか本当の感情を表しませんでした」。³⁸⁾

一九歳の時右派と宣告されたS市の技術者がいう。「我々の世代は、一九五七年を境に、性格に大きな変化があつた。樂天的で明るかつた性格は、いつの間にかどこかにいつしまつたんだ。狡くなつた連中、無口になつた連中、みんな九〇度の大転換を経験した。私は右派にされた以上もうダメだと覚悟したが、事業心（社会に貢献する気持ち）だけは、どうしても棄てきれなかつた」。やがて「私はある絶妙な方法を見つけた。隙間の中で生存することである。石の隙間の中でも生きられる。問題はこの隙間を見つけることだ」。後、この技術者は、自らの

志願で農村に入り、かろうじて政治の荒波から逃れ除草剤の研究を続けることができた。

一方、反右派闘争において手柄を立てた協力者側も、一枚岩ではなかつた。党に忠実であることと政治運動の生け贋となることは、紙一重にすぎないと彼らは感じ、また、無実な人をわざと陥れた罪悪感にも苛まれ続けていた。共産党の幹部で右派摘発の最前線に立つた張戎の母親もその一人である。反右派闘争の摘発者の割り当てを満たすため、誰かをつるし上げなければ自分自身も危ないという窮地に追い込まれ、忠誠心と人間性の板挟みに苦しんでいた。厳しい党の規則の前で、この苦悩を自分の夫に訴えることさえ、できなかつた。「多くの人々にとって、一九五七年は転換期になつた。母にしても、共産主義を信奉する気もちは⁽⁴⁵⁾変わらなかつたものの、実践面ではしだいに心に疑問を抱くようになつていつた」と張戎はいう。

北京大学の学生で党支部書記の郭羅基は、一九四九年に入党した忠誠な共産党員であつた。党の指図に従い反右派運動を推進する一方、心の中で「正直な人間として、一部の右派分子に深く同情していた」。苦惱し、良心に苛まれた彼は、運動後、みずから支部書記をやめたのである。⁽⁴⁶⁾

一九五七年の反右派運動は、知識人全体に大きな衝撃を与えた。知識人の人間性と良心は、

共産党への忠誠心と恐怖感によつて完全に征服されていた。「敵」の密告・摘発に走り回り、親友・同僚を裏切り、闘争会でヒステリックに声を張り上げた者は、知識人の大半に及んだ。この運動を通じて共産党への懷疑が生まれ、或いは良心の呵責を感じていくぶん消極的・利口となつた人が多くなつてきたが、全体として共産主義信仰の放棄にまでは至らなかつた。反右派運動以降、なお半数以上の知識人は引き続き共産党に協力し、忠誠を示したと考えられる。もはや選択肢のない、共産主義への一本道に入ったためであろう。

また、被害者の多くも、冤罪と分かつていても共産党を信じ続け、矯正労働などを通じて自らの忠誠を示し、偉大な党により冤罪が晴らされることを待ちわびていた。その辛抱を支えたのは、決して純然たる共産主義事業への忠誠心だけではない。「生」への渴望、家族への未練、社会に貢献したい事業心、あるいは人間の群に戻りたいという、弱い人間の心でもあつただろう。

毛沢東は、反右派運動をつうじて、知識人の口を封じることに成功した。知識人不在のつけは、その後まもなく社会主義の物質建設を目指す、毛の「大躍進」運動に回ってきたのである。

2 共産主義への盲進——「大躍進」運動

生産手段の社会主義改造を完了し、厄介な知識人の問題も力で押さえつけてから、毛沢東は、経済建設へと方向転換し、中国独自の社会主義を目指して、「大躍進」運動を始めた。一九五八年五月、共産党の八期二中全会で、ファイトを燃やし、高きを目指し、多く、速く、立派に、むだなく社会主義を建設する「社会主義建設の総路線」が確立され、夢の「共産主義」へのスパートは、「人民公社」と「大躍進」運動を通じて展開されていった。

大躍進の目標は、鉄鋼、食糧の飛躍的大増産にあるが、当時の産業基盤には毛の要求する高い生産目標に応える力がなかつた。にもかかわらず、毛は共産主義の精神力を過信し、強力な行政指導を通じて大躍進の運動を盛り上がらせた。大躍進は、物質的な生産建設であると同時に、共産主義精神の建設の試み（国家への無私の奉仕）でもあつたのである。

農村の大躍進

農村では、自然村落を単位にした合作社がさらに大きな行政単位である人民公社に統合され、中央、県政府の統一指令の下で、大量の労働力が土法製鉄や農地基本建設（農地整備）などの工事に投入された。社会主義的な大農業の建設を目指して、村落、土地の集約化が行われ、先祖代々の村落、墓地が平らにならされる所もあつた。また従来の作柄、農法も無視され、中央からの命令に従い「深耕・密植」の実験田が各地で造られた。一方、人民公社の「一大二公」の基本精神の下で、私的所有とその意識に対するせん滅作戦も着々と進行した。土地、農具、家畜の公有化に続いて、自留地^{**}、さらに家庭の台所も禁止され、食糧を生産隊に集め、共産主義の平均的分配を思わせる「公共食堂」が設けられた。

（＊規模の大きいことと公有化程度の高いこと。毛沢東[†]がまとめた人民公社の特徴）

（＊＊合作化の時、生活の足しとするために認められたわずかな私有地）

プロパガンダの役割を忠実に果たしている共産党のマスメディアによつて、日産一〇〇〇トンの鉄の土法炉、「畳産万斤」（六・七アールで五〇〇〇キロの収穫）の豊作田のようすが写真つきで大々的に報道され、米英に追いつき追い抜く工業化、農業機械化の共産主義がまもなく実現できると宣伝された。



農村の共産化によって、農民たちは強制的に食事を大食堂でとることになった（1958）

大躍進運動は、強力な行政指導によつて大がかりに進められ、一時的に、国民の協力を得て大きなエネルギーを産み出した事実もあつた。社会主義のため何もかも失つた農民には、他になすすべもなく、この共産党の示した唯一の活路に生きる希望を繋いだものも多かつた。

山東省臨城県の生産隊長張裕喜はその一人である。土地改革で土地をもらつた張は、貧乏人を救つた「良き皇帝」毛沢東に恩義を感じ、合作化の時、毛の呼びかけに応え、率先して土地、農具を社に提供し、また仲間の説得にも走り回つた。大躍進が始まると、彼は村人を率いて土法製鉄の現場に赴き、昼夜分かたずがむしやらに働いた。やつと引き上げたのは、食糧が切れ、家族のみんなが餓死寸前の便りを村から受けてからである。⁽²⁵⁾

山西省太谷県大坪村では、毛の「深耕」の号令に従い、「三昼夜、ロボットのように休まず働きつけ、鍬が持ち上がりなくなり、畑に倒れ込んでしまつた」農民穆奪小もいた。穆はこの働きぶりで望みもしない「戦場入党」（現場での献身により入党を認められること）を果たしたのである。⁽⁴²⁾

房山県吳店村の郭仲安も、大躍進の時、若さと体力を頼りに、党の呼びかけに応え意欲的にダム・道路建設現場、農場で働いた。「一人で今の五人分」の働きをし、社会主義建設の「模範的労働者（の称号）」を勝ちとろうと頑張つた。こうして稼いだお金では、家族さえ養いき

れなかつたにもかかわらず。⁽⁴⁴⁾

大躍進下の農村では、労働力の集中管理・支配によつてダム建設、農地整備等の面でいくらか成果が現れたものの、農業労働力の不足、「深耕・密植」による伝統農法の破壊、官僚主義的・命令的指導および集団生産による労働意欲の減退などで、農作物の生産高が軒並み減つた。政府の統計資料（國家統計局）を見ると、一九六〇年の食糧総生産高は五八年より三割減の一億四三〇万トンであつた。にもかかわらず、省、県から個々の生産隊まで、みんなマスコミの口調に倣つて「大豊作」と報告したのである。

安徽省鳳陽県の蔣莊村では、大躍進の時、一畝あたりの生産高は通年より半減して二〇〇斤が最高であつたが、「ノルマを達成するために上級「機関」には八〇〇斤とウソの報告をした」。一九六一年には凶作となり、一畝あたりの生産高はわずか一〇〇斤余りで最低の記録であった（石田浩『中国農村の歴史と経済』）。

食糧の減産だけでは止まらず、行政の指導で行われた誇張申告が祟つて、命綱の食糧が農業税として政府にとられたり、大食堂で無計画に食い潰されたりしてもなく皆無となつた。こうして天国への「大躍進」は一転して地獄の「大飢饉」となり、全国では二〇〇〇万人の人々が飢えや栄養失調で死んだといわれる。後に共産党はこの大飢饉の原因を「天災」（自然災害）



密植した稻田に子供を乗せて撮影、大豊作でのちあげ記事が流された（1958）

と「ソ連の背信」に帰するが、実際にはその最大の原因は過度におし進められた大躍進と農民の働く意欲の喪失にあり、疑いのない「人災」であった。

(*一九五九年中ソ間の協力関係が破綻し、ソ連はその制裁措置として原爆技術提供を始めとする一連の協定を破棄し、技術者を引き上げた)

厳しい飢饉を前に、農民たちの熱は急速に冷めていった。鄭州市下坡楊村では、村人は「幹部がおれば一所懸命に働き、いなければサボる」というやり方で、大採算制下の平均主義的分配法に対抗した。土法製鉄や水利工事に労働力の大半が動員されたため田畠の「収穫が乱暴になり、葉だけ取り小麦は畠で腐ってしまうこともあつた。：収穫がなくとも公共食堂で食べられるため、社員は何ら問題を感じなかつた」という（石田浩『中国農村の歴史と経済』）。急激な共産主義化は、小生産者意識の強い農民の働く意欲を損じてしまつたのである。

広東省のチエン村では、人民公社の官僚主義的指導と組織面の混乱で、大躍進初期の熱狂はたちまち萎えた。刈り取られた稲は田圃で野ざらしにしたためカビが生え、個人の食糧がすべて大食堂で「共産」（共有）されたので、村人たちは勝手気ままに一日五回も六回も食事をした。「食べ尽くしの時期」と呼ばれた。公社レベルの採算で、生産したものの大半は他の八カ村と共同で貯えるため、チエン村の農民は「その見返りが得られるかどうかたいへん疑問に思

つた。：田を荒れるにまかせて、山腹で食べられそうな物を探すか、家に閉じこもつてエネルギーを使わぬようにして、飢えをしのいだのであつた。⁽²⁸⁾

同じ広東省のロラム村では、土地、家畜、料理用具の公有化に村人は不満をあらわにした。「すべて非常に馬鹿げていたが、しかし逆らうことはできない。：すべてのことを集産体のためにでなければならぬ。何一つ自分自身のためにはできなかつた。すべてが中央政府次第で、われわれはそれに従わなければならぬ。止まれと言われば止まり、行けと言われば行く。世界は狂つた、と思いましたよ」と、村の党書記のチヨン・ウイングが回顧する。⁽³⁹⁾ 彼は、土地改革の後に入党し、かつては党的諸政策に忠実で意欲的な指導者であった。

土法製鉄の生産現場から村に戻つた張裕喜は、信じられない地獄の光景を目の当たりにした。「最初の餓死者は、恵まれたことに薄い棺桶で葬られたが、その後、棺桶の不足で土瓶⁽²⁹⁾で代用するようになり、さらにその後、村人は歩く気力さえなくなり、家族単位の餓死者がそのまま放棄されていた」。農作物の作柄⁽³⁰⁾が目に見えて悪くなり、堆肥をやることに誰も積極的でないので、地力もがくんと衰えた。解放前畠当たり一〇〇から一五〇キロの作物がとれた土地は、その時一〇〇から一五〇キロしかとれなかつた。張はこの現実の前でやつと悟り始めた。「耕地はやはり個人に分けた方がいい。人間は自分のためしかやる気がないんだから」。⁽²⁵⁾

共産主義への「大躍進」は、禿げ山（製鉄用のコークスが不足するため、代用品として、樹木を伐採し尽くした）、「大風呂敷」、おびただしい餓死者という悲惨な印象しか、中国の農民に残さなかつたのである。

一方都市では、農村と違つて、大躍進に燃える労働者の情熱には目を見張るものがあつた。自転車小売店の責任者王長水はいう。

党から困難な仕事を任されたとき「私は非常に光栄に感じた。当時の仕事は今よりずっとやりやすかつた。上も下も心を合わせて社会主義建設に励み、『一日は二〇年に等しい、三、四年で走つて共産主義へ』というスローガンを、：当時の誰もかも信じて疑わなかつた」。一九八三年の現在になつても、王はこのすぎさつた時代の、「国家の富強」を考える人々の情熱を懷旧する。⁽²⁵⁾

北京市の生産現場で大躍進を経験した日本人技師山本市朗は、「各層の指導者の計画性、技術指導力の不足」を批判しながら、自發的に湧き出る労働者の情熱を高く評価した。

「各種産業界では、技術改良、技術改革をその手段方法とする飛躍的増産運動が、猛烈な勢いで展開されはじめた」。「官庁といわば、企業体といわば、学校といわば、病院といわば、お

よそありとあらゆる人間の働いている場所で、この運動期間中の操業時間の延長はものすごいものであった」。「勤務時間を延長して働くことが、光榮であり、誇りであつて、夕方の五時や六時に家へ帰るなどという肩身のせまい思いをする弱虫は見あたらなくなつてしまつた。私の知つているある労働者は、自分のやりはじめた技術改良に夢中になつて、毎朝一時に起きて、自分の職場へかけつけた。北京中が下から盛り上がつた『働け』『働け』の熱気にうかされて、無我夢中になつて働いた時期であつた。業種を問わず、地位を問わず、この時期ほどあらゆる部分の従業員の作業意欲の高揚した時期を、：私は見たことがなかつた。：全北京の事業体のほとんどの全部の従業員がそうであった⁽¹⁰⁾」。

天津市の国営工場に勤めた技術者の妻林滋子も同じ様な感想である。

「広範な民衆は盲目的な勇み足で、がむしやらに、この『大躍進』に取り組み、たちまちに中国全土は、この大きなうねりの中に、呑み込まれて行きました。：隣組のおばさん達は、付近の空地や路地裏に、企業、工場はその庭に、耐火煉瓦で囲つた原始的な溶鉱炉を作り、昼夜をあげて粗鋼の生産」に励み、「小学生は課外活動で、各家庭から底のぬけた古鍋や、鉄のガラクタなどを拾い集めて、大躍進に協力しました」。：冬の夕方目についたのは「そこかしこの路地裏で、小溶鉱炉のコークスがいきおいよく燃えさかり、真っ暗な中に身体の片面だけが赤

く照し出された、頬かむりに軍手姿のおばさん達の姿でした』。「人々の表情や姿も、みだしなみを整えることすら罪悪であるかのように、質実剛健の精神をはきちがえ、男性は言うに及ばず女性まで、老いも若きも粗雑な干からびた格好になり、一般民衆は『英國に追いつき追い越せ』の、熱にうかされているような日々の連続となつたのです」と述べている。⁽²³⁾

荷物の積み卸しの現場で働いていた駅長代理の郭永志は、生産目標を超過達成するため、一週間に一度しか家に帰らず、共産党员として先に立つて働いた。「夜十二時以前に仕事を終えることはなかつた。昼も夜もなかつた」。部下もきわめて協力的であり、上からの命令もなく、意思疎通をはかつただけでうまく仕事を運べた。みんな大きな目標を掲げ、催促されなくとも三日四日と働きづめだつた。文句を言う人もなかつた。「古い社会から解放された直後だつたから、どんなことをやらせても積極的だつた。ぶたれることもなく脅かされることもなかつたので自分から働いた。現在の人たちとは大違ひだ」と彼はいう。⁽⁴⁴⁾

大躍進の時、原爆の実験を命ぜられて過酷な砂漠の基地に住みついたある学者はいう。

原爆の技術提供を中止したソ連の背信に「我々はみんな、怒りを覚え、それを努力の原動力に転化した。祖国の強大は即ち我々の人生の目標だ。……ここに来たときは、骨を砂漠に埋める積もりでいた。当時の考えはこのように至つて無邪氣だつた。今の若者は我々を『敬虔の世

代』『従順の世代』とあざ笑うかもしれないが、しかし、当時の我々は、希望にあふれる充実感でいっぱいだった³⁵』。

以上のような大躍進期の熱気は、決してでつちあげられたものではなく、実際都市でこの時代を経験した誰もが認める事実である。それは、思想教育と行政管理が都市部でうまく機能したことだけによるものではない。農村のような、合作化・人民公社による私有財産の侵害はなく、飢餓の程度はそれほどひどくなかったので、こうした熱気を持続させたのであろう。

要するに、毛沢東の個人的意志によつて引き起こされた「大躍進」には、その無謀な内実にもかかわらず、民衆の自発的協力が、とくに都市部を中心に多くみられた。こうした民衆の協力と献身的な努力があつてこそ、大躍進は一時、巨大なエネルギーを産み出すことができたのだろう。共産党、毛沢東への搖るぎない信頼、政治思想教育によつて植え付けられた共産主義の人生観および祖国の富強に貢献したいという気持ちが、こうした協力をささえる源であつたと思われる。

しかし、性急な共産主義化と政策指導の失敗、さらにそれに由来する大飢饉は、せっかく民衆に植え付けた社会主義建設の情熱を破滅させた。張戎の父のような良心ある共産黨の高級幹

部でさえ、大飢饉の惨状を目の当たりにして罪の意識を覚え、一時ではあれ、共産党に対する信頼が揺さぶられた。⁽⁴⁶⁾

「大飢饉」によって、農民の不満は頂点に達したが、しかしその矛先は、必ずしも毛沢東、共産党に向けられたのではなかつた。張裕喜はこの災難の責任を「毛主席の身辺にいた悪い奴」に帰し、徳陽県の農民もその後報復の機会を見つけて、大躍進政策を進めた生産隊長をつるし上げ、「この男を罰してくれた毛主席に感謝」していた。

吳店村の郭仲安も「私たちこのような年齢の者から言えば、：みんな共産党に感謝しているし、みんな毛沢東を崇拜している。：明らかに欠点があつたとしても、感情的に受け入れることができるない」と、いう。⁽⁴⁷⁾

ここにみられるのは、寛容で、忍耐強い民族性であり、純朴な報恩意識である。そこには、「皇上」（お上）に対する無条件の畏服、という封建意識のかけらも混じっていたと思われる。

ともあれ、大躍進の失敗の後、共産党の諸政策に対する民衆の自発的協力が弱くなり、中国の社会主义は、行政指導・命令、あるいは共産主義の精神教育によつて他律的に維持せざるを得ないという、新たな段階に入ったのである。

四 現実と理想の確執——調整時期（一九六二—六五年）

1 「調整」政策

大躍進への懷疑・不満

「大躍進」政策の失敗とともに続く三年間に及ぶ困難の時期は、多くの人々に共産主義の理想への疑問を抱かせた。大きな犠牲を支払った農民にとって、この疑問は理論上の破綻からきたのではなく、飢えや肉親の死という、生々しい生活の現実から得たものである。

人民解放軍の内部文書『工作通信抄』には、この時期の軍隊内部の動搖が克明に記されている。

中央警衛团のある中隊では、「一九三人のうち、家からの来信で郷里の災害や家族の死亡、病気、生活困難を知つたものが一五四人」、その内の二八人が「不満の感情をさらけ出したりした」という。

四〇三連隊第一大隊第一中隊の場合、六〇名の兵士のうち、「家郷が深刻な災害を受けたものは二四名で、：昨年（一九六〇）五月から年末にかけて、一〇名の兵士の家族の中で、人数にして合計一六名の死亡者を出している…」。

飢餓を訴える家族からの手紙に接した兵士には、不満と懷疑が深刻なものとなつた。

「食糧は一体どこへ消えてしまつたのだろう。どうして食えないのだ」。「国家が取り上げてしまつて、民百姓に食わさないのと違うか」。「人民公社化後、どうして作柄が以前ほどにいかないのか」。

その不満は、結局、人民公社、党の指導、毛沢東にぶつけられる。

「毛主席は北京に住んでいて、農民の生活はご存知ないのではあるまい」と、兵士董方会。「人々が食べることも毛主席の命令なのだろうか。：中南海（毛沢東などの指導者たちの住む宮廷庭園）の建設労働者は一月六〇斤（三〇キロ）の食糧を食べているのに：百姓はただ菜つ葉やイモばかり食つていて、穀物などはのどに入らない。人民内部には、こんなところにも

矛盾がある」と、兵士許国乱。

「いまの村の百姓が食つているものは、犬にすら及ばない。昔は犬でも糠や穀物が食えたが、いまでは人間は腹へこで力がぬけてしまつていて。……人民公社の社員たちは『毛主席は自分たちに飢え死にしろといふのか』と言つてゐる」と兵士張立臣⁽³⁾。

このような不満の声が、毛にもつとも忠実とされる解放軍内部から出たことは注目に値する。言論統制の下で、大躍進への不満を記載した公式文書はほとんど見あたらないが、この文書は、兵士たちだけではなく、多数の農民の怨恨も代弁したといつて間違いない。

調整政策の奏効

大躍進政策への反発が、国防相彭徳懷の「意見書」による直訴と、劉少奇、鄧小平ら実務派による政策の「調整」という二つの方法によつて試みられた。

五九年七月、共産党中央の廬山会議において、彭は愚直にも毛沢東に意見書を提出した。官僚主義的政策指導の失敗及び早過ぎた共産化の弊害を指摘し、大躍進政策の是正を求めたものである。が、まもなく毛の反撃に逢い、その支持者の黃克誠、周小舟とともに「反党陰謀集團」と決めつけられて、失脚した。

一方、毛は目に見えてきた大躍進の失敗にもはや手の施しようがなく、乱局を收拾するため、実質上生産指揮の第一線から引退し、かわりに劉少奇、鄧小平ら実務派を登場させた。実務派による政策の是正は、一九六〇年後半から「調整、鞏固、充実、提高」の八字方針の下で始まった。高い生産目標が引き下げられ、基本建設（生産基盤づくり）への投資も削減された。人民公社の規模が縮小され、公共食堂、供給制のような「共産」規定も、「人民公社工作条例」（農業六〇条）の制定によつて廃除された。

農村では、農民の生産意欲を刺激するため、採算単位は公社から自然村単位の生産隊へと引き下げられ、消滅していた「自留地」、自由市場も復活をみた。また土地の請負生産も試行され、地方によつては、合作した土地を再び所有者に戻す「單幹」という個人経営の現象も現れた。毛の「一大二公」の人民公社の理念は、ここで事実上否定されたのである。

大躍進の残した傷は「調整」政策によつて次第に癒され、六二年以降、生産全体が回復し、大衆の生活も目に見えて好転してきたのである。

鄭州市下坡楊村では、調整と「自留地」のおかげで、停滞した生産が一九六一年秋から上昇に転じ、農民は再び「飽肚子」（腹一杯）の喜びを味わえた。安徽鳳陽県の蔣莊村でも、一九六一年の凶作を最後に、「三自一包政策」のおかげで生産が回復に向かつた。

(*自留地、自由市場、自営業、請け負い生産の政策)

広東省のチエン村では、合併した人民公社の土地は、五つの生産隊に分割され、生産意欲を刺激するため、働きに見合った現物（金）の支給が実現された。また「自留地」と自由市場が復活し、生産の管理能力を重視した指導部の再編も行われた。この「新しい政策と新しい形態の経済組織は、劇的な効果をもたらした。農民たちは再び熱心に、規律に従つて、働き始めた」²⁸のである。

大躍進の時期、献身的に働いた模範的社員・党員たちは、政策転換の下でも、「私」のために働く模範であった。

生産隊長を辞めた張裕喜は、分配された自留地でブドウ、桃を栽培し、丹精を込めて育てた。努力が報われ、実った果実は自由市場でよそのものより倍以上の高値がつき、家計の大きな助けとなつた。²⁹

大躍進の時倒れるまで働いた大坪村の穆奪小も、「三自一包」政策の下で、自留地の掘り起こしに必死になる。「鍬を担ぎ、ポケットに種をつっこみ、朝は朝星、夜は夜星、山中を歩き回った。誰もが『自由（留）地』を掘り起こしたが、穆奪小の『自由（留）地』が最も多く、数百、数千にのぼり、自分でも数え切れないほどだつた。自ら耕し自ら収穫する、働い

ただけ収穫が得られるという喜びは、彼を刺激し、生死を忘れさせたのだつた。⁽⁴²⁾

「私」の復活は、農村の経済を活性化させ、農民の熱烈な歓迎を受けた。党中央監察委員会の報告書によると、広西省では、個人責任制、個人經營を主張する下級幹部は全体の二五パーセントに達し、龍勝県にある一八六七の生産隊のうち、七九〇が個人責任制を実行した。三江县公明公社の場合、五六パーセントの生産隊は土地を分けて「单幹」（個人經營）にまで進行した（徐達深他編『中華人民共和国実録』④）。太湖県党委員会の幹部錢讓能は、一九六二年八月中央に提出した報告の中で、同県の生産変貌を例にして「責任田」の拡大を提議し、その理由に「やはり責任制はすばらしい」という農民の声を取り上げた。「責任制に賛成する農民の数は少なくとも八割以上、或いは九割に達するかも知れない」と、錢報告は指摘した（『中華人民共和国実録』④）。

「調整」政策の実質は、大躍進時に消滅した「私」や「個」への譲歩政策であり、社会主義の所有制の原則と生産・分配の方式をいくぶん緩めるものであつた。社会主義の生産基盤が動搖し、民衆の自発的協力が失われた今、「私」への譲歩以外、もはや窮地から立ち直る方法はなかつたのである。

実務派の一員、北京市長彭真は、「調整」の実質について次のように語つた。

「集団経済は優れているというが、社員は労働意欲に欠けている。個人経済は劣っていると
いうけれども、自留地はよく耕されていて、土くれもないくらい手入れがいきとどいている
し、農作物を荒らされないよう垣根もつくられている。集団で耕している土地でこれに引けを
取らないところがあるだろうか。：農民の労働意欲は、集団化された場合よりも個人経営の場合
の方が高い。これは普遍的に見られる現象であり、偶然的なことではなく、必然的なもので
ある」（一九六一年二月ごろ、懷柔県視察時談^{〔36〕}）。

「私」の復権（都市部）

「私」の目覚めは、決して農村だけにとどまらなかつた。都市では、早くも官位、等級制を
実施した五〇年代の後半から、共産党、軍の高級幹部を中心に特権の現象が現れはじめた。生
活物資が著しく欠乏した大躍進期の飢餓下において、この特権現象は栄養品、食品の確保、優
先配給の手段として拡大していった。

多くの党、政府機関の構内に高級幹部ための食品特別供給店が設けられ、一般の手に入らな
い貴重な栄養品は幹部の階級によつて割り当てられた。解放軍報総編集長唐平鑄の場合、配給
量は「豚のブロック肉一塊」であつたが、ランクが上の軍総政治部主任譚政となると、「大き

な豚の足一本」²⁹ が配られる。張戎が住む四川省の党委員会の「大院」でも、幹部専用の小食堂、一般用の大食堂に分けられ、配給切符も地位によつて色が違つていた。飢餓の中、省政府の高級幹部たちだけが、大豆、砂糖、たまごなどの栄養品を手に入れることができた。農村の子どもがおおぜい飢えて死んでいたのに対し、幹部の特権を享受した小学生張戎は、「ひもうじい思い」一つなく生きながらえてきたのである。⁴⁶

特権化の現象は、その後、さらに住居と子女教育の面で進んでいく。大都市では、各党、政府、軍機関は「大院」という単位で、旧皇族の庭園、一等地などを分割、占拠し、それぞれ世間と隔絶した生活空間をつくりあげていた。高い塀、鉄条網に囲まれた「大院」内には、仕事場のほか、宿舎、娯楽施設、売店、場合によつては学校まで備えられ、武装した兵士に守られていた。北京郊外に位置するある中央機関の「大院」内に育つた私の経験であるが、小学校時代、院外の子供を「小野孩」（野ざらしのガキども）と呼び、すれ違うとお互いに睨み合つたり、喧嘩したりした。院内の「普通話」（標準語）に対しても院外は「北京話」（方言）で、言葉さえ階層の身分によつて区別されていた。ちなみに私が初めて「北京話（弁）」に慣れたのは、文革後、町の中学校に進学してからのことである。

平民の子で後エリートコースをたどった作家張承志は、自ら経験した、新中国における「闇

家主児」（特権階層）との階級による区別は、「ナイフで刻み込んだように記憶から離れようとな

い」と記しているが、決して誇張ではなかつた。

子女教育の面でも、北京市内の高級幹部の子女たちは、「八一」、「十一」、「育英」、「育材」、「景山」などの貴族学校に集まり、一流の教師による特権教育を享受した。こうした学校は、ほとんど特殊学制（小学校から中学校までの一貫教育）の全寮制学校で、広いキャンパスには大講堂、体育館、プールなど、貧しい中国で考えられないほど豪華な設備が備えられていた。

軍幹部の子弟が集まる北京「十一」学校に在学した唐亞明は言う。

ここに入った幹部の子弟達はみんな「一種の優越感」をもつており、特にランクの高い幹部の子供は、「ずいぶん生意氣」であつた。日頃、父親の官職は少将だの、中将だの、お互いに比べたりして威張つていた。⁽²⁹⁾一年生の唐は自分の虚栄心を満足させるため、父親の官職は「元帥」と嘘をついたことがあつた。

張戎の住む成都市の「省委大院」も、同じような特権世界であつた。武装した門衛に守られた院内には床屋、映画館、ダンスホール、上等なレストランが備えられ、住宅も部長と処長（課長）のクラスに分けられ、週末のダンス、映画が役人の階級ごとの施設で、それぞれ行われる有様であつた。もちろん、張が通つた学校も、四川省政府の高級幹部の子弟が集まる「貴

族学校」であり、ぼろをまとい、腹を空かした「院外」の子供と比べると、院内の生活は、まさしく別世界であった。⁽⁴⁶⁾

こうした、高級幹部の特権化現象は、特に一九六〇年代の前半において、流行したと指摘される。

一方、特権階層とは別に、普通の市民にも、「調整」政策による生活の改善に従つて、革命後かつてなかつた、快適で豊かな生活に憧れる志向が現れてきた。革命、建設、政治運動に明け暮れた五〇年代では、金があつても消費する精神上の余裕はなく、その上、重工業中心の産業政策がたたつて生活消費品が極端に不足していた。調整政策のおかげで、軽工業の生産が急速に伸び、市民のあこがれは次第に、ショーウインドウに飾つた自転車、腕時計、ミシン、トランジスタラジオなどの贅沢品にむけられるようになつた。質素だった服装も少しずつではあるが、カラフルに変貌していった。伝統劇、香港映画、西洋音楽、社交ダンスも流行した。抑圧された欲望が蘇り、享楽、快適志向といった、五〇年代には見られなかつた「ブルジョア的」意識は、当局の批判にもかかわらず、市民の心の深層で広まり定着していったのである。

また、「調整」による私有意識、消費意識の復活と相まって、浪費、汚職、投機などの現象も増加し、「四清」、「五反」のような社会主義教育運動もこの背景の下で展開されたのである。

2 毛の反撃——社会主義教育（四清）運動

毛沢東は、危機的な難局を乗り越えるため、調整政策の默認を余儀なくされたが、社会主義のイデオロギーを否定する「私」の復活を決して容認はしなかった。国民経済が上向き始めた一九六二年九月、毛は「継続革命」論を打ち出し、社会主義、人民公社・集団経済の方針を再確認する一方、翌六三年から、農村の「四清」、都市部の「五反」運動をおこし、「資本主義の復活」に対する大規模な反撃作戦を始めたのである。

「四清」と「五反」は、当初、会計・経理上の浪費、汚職、幹部の専横・腐敗の摘発を内容とし、一見反腐敗の経済闘争のように見えるが、しかし、毛の意図は決してそこにとどまらなかつた。六三年の「小四清」（財務検査）は、のち六五年の「大四清」（組織整頓、思想教育）に転換し、「社会主義教育運動」の別名も付けられた。毛の度重なる指示からも分かるように、階級闘争によつて、調整政策下の農村・都市における、資本主義勢力の浸透を食い止めるの

が、運動の真の目的であった。

樂黛雲はこの時期、工作隊の一員として北京郊外に位置する小紅門村に派遣された。調整政策のおかげで、この村の景気はかなり良かつたようである。村に入るなり、樂は「土手に柳を植えた用水路に、整然と植え付けられた白菜畑」の壯觀と、「上等の衣類を着て、快適な家屋」に住む農民の生活の豊かさに驚かされた。しかし一方、集団化、人民公社化以降は官僚主義が氾濫し、幹部の横暴も甚だしかった。「自分は自分の土地の主人なのだ」という意識の喪失に従つて、幹部の専横、権威主義がはびこるようになつたと、樂は指摘している。⁽⁵⁵⁾

樂のいうように、こうした官僚主義的現象は、社会主義的改造（集団化・共産主義化）の副産物ともいうべきものだが、毛は逆にこれを「資本主義の復活、階級闘争の現れ」と決めつけ、組織整頓・思想教育を通じて、「公」の意識の復活を図つた。この運動の下で、実務派の推進した「責任田」、自由市場、個人経営が次々と批判・廃止され、大寨式（九八頁の注*参照）の共産主義精神、「総路線」・「大躍進」・人民公社の三本の「赤旗」の正しさが改めて確認された（「前十條」六二年五月）。張裕喜の村でも、工作隊が派遣され、調整政策の下で復活した私有経済に対するせん滅作戦が繰り広げられた。やつと生活が上向き始めた張も、頼りだつた自留地の果樹が「資本主義の尻尾」として切り倒され、悔しい涙を呑むしかなかつたので

ある。⁽²⁵⁾

小紅門村の場合、「調整」下の歩合制のおかげで、「村民の一部、特に女たちは早朝烟に出て、夜遅く帰り、普通の日の三倍もの作業点を稼ぐようになった」が、「四清」が始まると、この採算法は「ブルジョア的」として廃止され、代わりに大寨式の平均主義的な採点方法が導入された。農民は「社会主義の道を歩もう」という上からの主張に公然と反対することはできなかつたが、「仕事の速度を落とす」ことで抵抗した。工作隊側は毛の指示に従い、責任田は「資本主義的、搾取的やり方だ」と信じたが、農民が「一致して」歩合制を望んでいることは明らかだつた。⁽²⁵⁾

毛は、自然に崩れ始めた「公」意識を、社会主義教育運動を通じて再興しようとしたのであつた。

共産主義精神教育の展開

組織整頓に重点を置く「四清」運動と同時に、毛はまた精神教育の面にも着目し、政治宣伝、思想教育、手本教育を通じて、かつて「人民公社」の時に提唱した共産主義の精神を復活させた。一九六三年以降、農業は「大寨^{*}」、工業は「大慶^{*}」、全国民は「解放軍」に学べ、とい

うキヤンペーンが全国的にくり広げられ、「雷鋒」をはじめとする滅私奉公の模範人物も次々と担ぎ出され大々的に宣伝された。

(* 山西省昔陽県のある山村。共産主義精神の発揚によって村を変貌させたとして、全国的な農業の手本に仕立てられた。支部書記の陳永貴は「文革」中、副総理の座に上り詰めた)

(** 東北地区の油田。自力更正、努力奮闘の「鉄人」精神で労働者の手本に)

(*** 解放軍の兵士、六二年事故死。党愛、人民愛、滅私奉公、革命事業への忠誠などの事績で英雄に祭り上げられた)

一九六三年から六五年にかけて、共産党、解放軍内部の通達や党の機関誌『紅旗』、機関紙『人民日報』のトップ記事に取り上げられた主な「英雄模範」事例を見ると、

一九六三年

雷鋒、南京路の好八連（上海の繁華街に駐在する解放軍の中隊。簡素な生活で讃えられる）。

一九六四年

解放軍に学べキヤンペーン（毛沢東思想・政治第一、厳正な規律など）、大慶油田（自力更正の奮闘精神）、硬骨の六連（解放軍の中隊。困難と死を恐れぬ革命精神）、歐陽海（解放軍兵

士。愛民模範、列車の事故を避けるための自己犠牲)、謝臣(解放軍兵士。愛民模範)、大寨(共産主義ための無私、奮闘、献身精神)、郭興福(解放軍幹部。毛沢東思想・政治先行の軍事教練法)、韋必江(消防士。消火中の献身)、廖初江(解放軍幹部。毛沢東選集講読模範)、吳興春(民兵幹部。「敵」に対する闘争と人民に対する献身)、龍梅と玉栄(人民公社の財産「羊」を守るため吹雪と格闘した小学生)、董加耕(農村下放の道を選んだ都市青年)、戴海法(業務に精通した献身的な消防士)、趙務春(解放軍戦士。消火中の献身)、鉄人王進喜(大慶油田の労働者)、豊福生・黃祖示(解放軍幹部。毛思想の学習模範)、董加耕・刑燕子・候鴻(党の呼びかけに忠実な下放青年)、大寨経験、毛沢東号機関車常務員(革命の仕事に精進)、馬口消火英雄中隊(解放軍。消火中の献身)、焦裕祿(献身的な県知事。清廉)。

一九六五年

陳永貴(大寨のリーダー)、孫樂義(解放軍幹部。毛沢東思想の学習、思想改造の模範)、普布扎西(解放軍戦士。愛民模範)、大寨精神の称揚キャンペーン、王傑(苦を恐れず、死を恐れない解放軍戦士)など。

軍隊内に手本が多いのが特徴といえよう。この数々の「英雄模範」の頂点に立つたのは、

「雷鋒精神」と「大寨精神」である。「雷鋒同志に学べ」とは、一九六三年三月毛沢東自ら提唱した政治キャンペーンで、一連の精神教育の先頭に位置した。また「雷鋒精神」の代名詞となつた「為人民服務」（人民のために奉仕する）のスローガンは、毛にとつて、共産主義精神教育の原点、社会主義イデオロギーの原点という重要な意味もあつた。ほかの「英雄模範」は時代の経過とともに忘れ去られていたが、「雷鋒精神」だけは文革後も残り、ことあるごとに当局の共産主義精神教育の格好の手本として利用され続けたのである。

「大寨精神」の称揚は、「調整」下において最も大きなものとなつていた農村問題の解決に狙いがあり、折からの「四清」運動の展開と密接に呼応していた。失われた共産主義への献身的精神を農民たちに呼び戻し、大躍進以降社会主義の道から遠ざかつた農民を再統合しようとするのが、目的であった。「大寨経験」の中で、とくにノルマ制を設けず、労働時間を記帳せず、「自報公議」という自己申告によつて採点する方法は注目に値する。この高度な政治的自覚に基づく採点法の実質的な意味は、「調整」によつて否定された、人民公社の「一大二公」の共産主義精神の復活にあつたといえる。

青少年教育の成功

社会主義教育（四清）運動と共産主義の精神教育は、その実践が生活に直接影響を及ぼす農村では、さほどの効果が上がらなかつたが、都市部で、特に学校教育と青少年思想教育の面では、大きな成功を収めた。

大飢饉の後、共産党員・幹部、あるいは被害者層の農民は人民公社と大躍進政策の失敗を何となく悟り始めたが、しかし、それは毛沢東本人の地位にほとんど影響を及ぼさなかつた。それは、聰明な毛が思想意識面における支配力をしつかりと守り、教育・マスコミの操作を通じて、共産主義の精神教育と自分への個人崇拜を巧みに結合させていたためであろう。

一九六二年、毛は階級闘争、継続革命（革命を続けること）のスローガンを掲げ「調整」への総反撃を始めると同時に、個人崇拜の操作も強めていった。継続革命の理論は、結局毛沢東思想の創見であり、「雷鋒精神」や「大寨精神」も例外なく、毛沢東思想の習得がその根本にあるとされた。また、廖初江、豊福生、黃祖示、孫樂義のように、毛思想の学習、応用（活学活用）だけで英雄模範となつたものの例も少なくなかつた。六四年三月、模範教育のさなか、「毛沢東思想の学習運動」が展開され、五月、毛への個人崇拜を仕掛けた林彪国防相の肝煎りで、のべ三億五〇〇〇万冊を印刷した、世紀のベストセラー『毛主席語録』が上梓された。こ

うした操作を通じて毛のカリスマ性がいつそう強化されたのである。

「雷鋒同志」のように革命のために献身し、毛への忠誠を誓つた六〇年代前半の若者の群像を見てみよう。

中学生梁放（前出した梁恒の姉）の場合、母親が右派と認定されたため、巻き添えを食い学校では疎外される身となつた。革命の事業に忠実であった梁放は、社会的尊敬の的である共産主義青年団（党的外郭組織）に加入するため、「敵」の母親と、離縁するにしおなかつた幼い弟たち（右派の家族）と一線を画し、自ら思想改造に励んだ。青年団に提出した思想報告書において彼女は、「自身のなかにある資本主義者の見栄と不潔を嫌う心と闘い、眞のプロレタリアートの謙虚さを養い、労働することの榮光についての理解を深めるために、自分はどのようにして屎尿^{しゃよう}収集の仕事に参加したか。吐き気を催しそうになつたときは、偉大なプロレタリアートの英雄、雷鋒と彼の人民に対する献身を思い出した」と書き、また「資本主義者の母」に会いに行つた自分の弱さを告白し、そういう傾向を克服する決意を述べた。さらに彼女は「すべての家族関係を断ち切つて、党を自分の両親としたい」とさえ、誓つていた。¹⁶

一九六四年チエン村に赴いた都市出身の青年達も、党の呼びかけと思想教育を素直に信じていた。「農村に行つて自分を鍛え：革命の後継者になろう」と、中学卒業後、彼らは自ら進学

を断念して貧しい農村での生活を選んだのである。村に入った彼らは、また「毛沢東思想訓練班」を結成し、学校で得た知識を活用して毛沢東思想の学習、普及運動を開拓させていく。彼らは村人を動員し、「憶苦思甜」、自己批判の方法を通じて、毛沢東、共産党、新社会への愛をあらためた。思想改造の結果、若者の思想は大きく変貌した。

(*思想教育の方法の一つ。過去の階級的搾取の苦しみを思い出しては、共産党、毛沢東時代の幸福を噛みしめる、という)

「労働規律が強化された。人びとは協調せねばならないという心理的圧力を感じた。：彼らは毛沢東の教えがよりよい生活を与えてくれると信じ：毛沢東のことばに忠実に従つたのである」。農閑期における公共的事業への無償の労働提供の説得が受け入れられ、大寨の美德（勤労、献身、自力更正と緊密の連帯）が貫徹され、平均主義的分配の導入も一時、成功した。

「若者たちは本当に毛沢東思想を信じていました。彼らは、毛沢東は偉大な存在であつて、毛沢東のことばはすべてが道理にかなつたものだと、心底思つていたのです。誰もが、より進歩的になり、私心がなくなつたと感じました」⁽²⁸⁾、とある若者が回顧する。

小学生の張戎も、一方的に与えられる教育の下で、資本主義は、「アンデルセンの『マッチ売りの少女』に出てくるような、貧しくてみじめで邪悪な世界だつた」と信じ込み、「毛主席

の偉大な時代」に生きられる幸福を噛みしめ、「毛主席の姿を仰ぎ見る希望さえ持たずに生きていなければならない資本主義世界の子供たちのため何かしてあげたい」と、無邪気に思つた。⁽⁴⁵⁾

彼女は、階級教育、「雷鋒に学ぼう」などの思想教育運動をつうじて、「たとえ自分の親であろうとも毛主席に全面的な忠誠を誓わぬ人間は敵である」との認識をたたき込まれたのである。

北京のエリート校、清華大学付属中学校の様子について、張承志が次のように記している。

「当時、生徒たちの間には思想の進歩を競い、理想を追い求める空気が充満していた。学校の政治学習にはみなが積極的に参加したし、学校が組織する労働や掃除、寄宿舎の整頓なども、競争のようにしてやりとげた」。「一九六四年の中国の青年にとつては、『革命事業の後継者になる』というスローガンはそれぞれの心からの願いを表していた」。一九六五年になると、「生徒たちの間では革命に対する责任感こそがすべてに優先するものと見なされるようになり、ほとんどの若者は大きな風波を乗り越えて進むといった革命者の前途を夢見るようになつた」。「十七歳になつた私の『革命』への憧れは、すでに熱狂的といえる程度にまで達していた」。⁽⁴⁶⁾

次は北京戯劇専門学校の徐丫の回顧である。

「我々の世代は、見えない理想によつて育てられた共産主義の申し子なのだ。優越な家庭環境に恵まれ、渡世の苦労を一つも知らずに、ひたすら勉強に励んでいた。どのように革命の事業を受け継ぎ、どのように理想のため献身するかを毎日真剣に考えていた。社会についてほとんど知らないのに、ユーゴの『資本主義復活』、ソ連における『修正主義』などの国際情勢、党中央内部の反毛主席の動きなど、よく知っているつもりでいた。：毛主席となると、我々は無条件に感服し敬愛した。『一句は一万句に匹敵する』という馬鹿らしい話も心から信じて疑わなかつた。こうした単純な頭脳、高い情熱、革命の大事業を成し遂げたいという希望が、我々を文化大革命の先鋒隊の地位に押し上げたのであつた」。⁴⁸

一方的な宣伝、教育を受けた青少年にとって、毛沢東は、社会主义中国、共産党、共産主義事業の頂点にたつ、神様よりも偉い、絶対的に正しい存在であつた。毛は、このように、青少年の教育を通じて、無条件に自分を信頼・支持し、「公」のため、また、共産主義の理想に自身を誓う無数の親衛軍を創出し、やがて彼らを操り社会主义実践の最後の賭け、文化大革命に突入したのである。

総じて言えば、一九六〇年代の前半、調整政策の進行と相まって、抑圧された「私」が目覚

め、欲望という人間の本能も次第に甦つてきたり、毛沢東が執拗に遂行した一連の政治運動と思想教育に押さえられたため、「私」の台頭はまだ不可能であつた。心から毛を信頼し共産主義のため献身を誓つた学生、若者が大勢いる反面、渡世の手段として沈黙を守り、時代の潮流に身を任せて息を潜めた民衆も、決して少なくなかった。全体として、毛思想の影響力、毛の指導力は勢いを保ち、共産党の方針・政策も有効に機能したと認められる。五〇年代に見られるような民衆の自発的協力こそ少なくなつたものの、社会主义という巨大なシステムは、政策指導・思想教育という上部からなされる強力な牽引によつて、なお動き続けていた、といえど。

五 「無私」の世界を目指して（一九六六～七六年）

1 狂氣の時代——「文化大革命」前期

「文化大革命」

一九六六年から始まった一〇年におよぶ「プロレタリア文化大革命」は、単なる「権力闘争」のみで解釈しきれない、深い意味があつた。思想意識面から見ると、それは、農村の「社會主義教育（四清）運動」、「雷鋒に学べ」など共産主義精神教育に続く「継続革命」の実験であり、非常時の心理状態の創出によつて、崩れかけた社会主义イデオロギーを人為的に持ち直そうとする毛沢東の最後の賭けであつた。雷鋒のような無私の人間を多く作らなければ、社会

主義は遅かれ早かれ資本主義に変わつてゆくという危機感と、「調整」の手腕で政権の中核に着実に浸透しつつあつた実務派の存在が、毛をこの世紀の冒険に駆り立てたのであつた。

毛は文化大革命の目的を、「資本主義の道を歩く権力者」の一掃といふ組織上の肅清と、私心と闘い、修正主義を批判する（「鬪私批修」）といふ精神上の革命（「人々の魂の深層に触れる」とされた、徹底的な思想改造）の両面に置き、また、「調整」政策で潤つた一般民衆の反発や、実務派にコントロールされていた行政組織の不協力を予測し、思想、文化といふ上部構造の面を突破口に選んだ。

これまでの上から下へ貫徹していく運動とは違ひ、毛は忠誠を誓つた無知な「紅衛兵」（中学校・高校の若者の「造反」組織）を従え、下からの「造反」（革命）を通じて国中を革命の渦に導いていった。

「大鳴、大放、大字報、大弁論」という「革命的民主」方法の下で、各種の「造反」組織、紅衛兵組織が相次いで生まれ、政権への反乱は、紅衛兵から一般民衆へと、迅速に拡大していった。「破四旧」（旧い思想、風俗、文化、習慣を廃止）、「造反」の活動によつて、現存の行政組織、法律、道德、思想、文化、理知、人道、人間関係のすべてが破壊し尽くされ、「鬪私批修」の思想革命を通じて、毛沢東への忠誠・賛美、「大公無私」、継続革命の精神が最大限にま



古いものを壊す「破四旧」の運動が展開、仏像などが燃やされた（1966）

で顕揚されていった。

(*ブルジョア的な「民主」に対するものとして唱えられていた)

批判・鬭争会、革命戦闘隊、革命のスローガン、革命の歌、赤旗、赤腕章、赤い語録、赤いバッヂ、赤い恐怖。この激動期、國中が革命の色によつて塗りつぶされてしまったのである。

各地の文化大革命は激動の中、「造反」、「奪權」、「鬭私批修」（自己批判）、「表忠心」、「階級隊列の整頓」などの段階を経て、一九六九年四月、共産黨の第九期党大会の開幕において「偉大な勝利」が宣告された。

「資本主義の道を歩く権力者」と、地主、富農、反動派、悪党、右派など「牛鬼蛇神」と呼ばれる新旧の階級の敵が追放され、造反派の労働者、農民、兵士、革命幹部を主体とする新しい権力機構である「革命委員会」が全国各省で成立した。中央には、毛沢東、林彪を始めとする文革派の新政權が誕生し、それを支えたのは、毎日「万歳」の礼賛を捧げ、継続革命事業、共産党、毛沢東に対する絶対忠誠を誓つた二八省市の億万の民衆であつた。毛の夢見る一致団結、滅私奉公の「延安精神」は、あたかも九六〇万平方キロの中国大地で復活したかのように見えたのである。

この激動の時期において、一般の民衆はいつたいどのように考え、どのように行動したか



「批闢大会」でつるし上げられる党委員会書記（1966）



全身に毛バッジをつけて忠心を示す人民解放軍兵士（1968）

を、見てみよう。

紅衛兵と若者

文化大革命運動の中で一番純情で、しかも先鋒隊の役割を果たしたのは、革命の純血兒で構成された、中学、高校の紅衛兵組織であった。紅衛兵は、エリート学生の集まる清華大学付属中学校で生まれ、当初、官僚主義的学校行政に反旗を翻した少數学生の活動であつたが、まもなくその「造反」精神が毛沢東によつて利用された。

紅衛兵運動の動機について、元祖紅衛兵の一人だった張承志は、「造反」は自らの政治的自覚に基づく行動であると強調し、利用されたというイメージを極力否定しているようである。しかし、この肝心な自覚も結局のところ、思想教育によつて植えつけられた革命理想、毛沢東への狂信・忠誠以外の何物でもなかつた。毛が紅衛兵に目をつけた理由も、まさにここにある。

以下は文革初期の「老（元祖）紅衛兵」のイメージである。

カーキ色の軍服に白いバスケット靴、赤い腕章を巻き、グルー卜をなして自転車で市街地を走り回る。軍服には高級幹部の階級を表した親のお下がりが見栄えよく、自転車もフル・チ

エーン・カバーのつく「飛鴿」、「永久」のブランドが好まれる。靴は上海製の「回力」ブランドの高級品、腕章もシルク生地に黒印字のものが格が上とされた。銅のバッклのある軍用ベルトを振り回して、学校の教師、幹部、あるいは元資本家、地主、富農、反動派、悪党、右派など、敵のレッテルが張られた「黒五類」に殴りかかる。町中の史跡、寺院、文化施設に乱入して打ち壊し、家宅を搜索して反革命、「四旧」（旧い思想、文化、風俗、習慣）の証拠となる古い書籍、文物を見つけては容赦なく焼きてる。古典音楽、小説、文学作品はいうに待たず、長髪、ハイヒール、化粧、細いズボンまで、ブルジョア的退廃の生活様式として取り締まる。

一七歳の盧紅は、仲間の紅衛兵といつしょに教師の宿舎に踏み込み、家宅搜索の間、三名の教師を寒天下、上着も着せずに地面にひざまずかせていた。見つかった英語教科書を「外国のものを崇拜し、外国人の奴隸になつてゐることの証拠」と決めつけて焼き払い、その上、木の板で教師たちに対して暴行を加えた。「私たちは一人の教師が血を吐くまで殴りつけました。すっかり得意な気持ちになつて……とても革命的なよう⁽³⁾に思えた」。「革命は、お客様のもてなしではなく……ある階級が他の階級をひっくり返す暴力行動である」という毛の教えは、彼らを奮い立たせたのである。

紅衛兵運動は、温順な女子学生も暴徒に変身させた。「美」や「性」に関する全ての表現は、ブルジョア的として否定され、胸の豊満すら、非革命の象徴として恥ずかしがられた。一四歳の陳凱歌の見た光景である。

「サクランボウのような可愛い唇をした、女子大生や中学生^が、布を巻いて胸を押さえつけ、髪を短く切り：幹部の一族という自分の高貴な血統を鼻にかけ、粗暴な言葉を吐きながら、じつに凶暴だった」。「：一五、六歳の少女^が、『搾取階級』の女の口に指を突っ込み、力まかせに引っ張っている光景を見たことがある。相手^がうめき声を上げなかつたので、ヒステリー状態になつた少女は、被害者の血で手を真つ赤に染めていた」。

その後、陳自身も生まれて初めて暴力の「快感」を知つたが、犠牲者は、プールで女の胸を触つたとされる惨めな男であつた。

「私は始めは立つてみては立つてみただけだつた。：自分も殴つてみようと思つては、怖じ気づいていた。私はまだ人を殴つたことがなかつた。：私は一度引っ込んで、また、前へ出た。今度は、げんこつが彼の顔面に命中した。相手の頬の骨が、手に痛かつた。彼はまるで反応しなかつた。それで、私はカツとなつた。相手の懷に飛び込んで、力いっぱいビンタをくらわせた。目の前が真つ暗になつて、金色の輪が浮かんだ。馬の骨をひっぱたいているような感触だつ

た⁽³⁰⁾。

暴力は「しばし恐怖と恥辱を忘れさせる」と陳はいう。この暴力を通じて彼は「満たされずにいた虚栄心と気づかずについた権力への幻想」を満たし、毛の陣営、革命の隊列にいる自分の存在を認識したのであつた。

多くの若者は、操られた紅衛兵運動と同じように、はつきりした目的、方向を持つていなかつたが、毛主席と革命事業を守る意識は共通していた。小学生だった一二歳の梁恒も、毛の「造反有理」の教えを信じて、担任教師への攻撃に立ち上^がつたが、苦心して考え出した先生の罪状は、ソ連式の教育法（修正主義）と、ハイヒール・香水の使用（ブルジョア的生活）であつた。「造反」者の梁は、まもなく、父の失脚で「黒五類」（地主、富裕農民、反革命分子、悪党、右派）に転落し、失意のどん底に落ちた。家宅捜索され、血統の良い（革命幹部や労働者を親にもつ）子どもたちのリンチに会つたが、「革命」に対する幼い信念だけは変わらなかつた。「反革命」の父を詰問したり、「造反」組織に父を告発する文書を書いたり、姉たちと一緒に家を出ようと計画したりした。その後、革命に憧れる梁は、昔の赤軍長征を真似して井岡山（赤軍の根拠地）に向かう徒步行軍に参加して「革命」の幸福感に陶酔し、また天安門広場で「赤ん坊のように大声で泣きながら」毛の接見を受けた。「毛主席、あなたは私たちの胸の



天安門広場で催された紅衛兵たちの大集会（1966）

中の最も赤い太陽です！」と彼は、何度も何度も夢中で叫んだ。感激の接見の後、梁は二時間以上も列に並んで家族に「今夜九時一五分、ぼくは世界で最も幸福な人間となつた」と打電した。⁽¹⁵⁾ 決して偽りの心情ではなかつた。

毛への無条件の忠誠は、出身によつて疎外され、或いは親が失脚した不運な若者の中でも例外ではなかつた。父が失脚した一五歳の唐亞明は、労働者宣伝隊員の説教を聞き入れ、「毛主席について革命をやります」と、父との決別を誓つた。一三歳の小兵も、「裏切り者」、「走資派」（資本主義の道を歩む権力者）とされた父の批判大会の壇上にあがり、自ら革命群衆の側に立ち、父に不利な証言をした。「私はあの当時はまだ若くて純情でした。：自分を革命の子と思い、私の父母の子とは思いませんでした」。「革命家は個人的な愛情などは棄て去るべきだ」とは、父母からの教えでもあつた。党への忠誠を誓つた彼女は、その後親と別居したが、毎日のように路上でそれ違つた母に話しかける勇気さえ、湧いてこなかつた。極限に達したホームシックと淋しさに襲われた時、この少女を救う唯一のものは、毛沢東への礼賛と毛の著作の学習であつた。⁽³¹⁾

(*一九六八年以降、毛の指示で生まれ、当初の紅衛兵に代わつて各地の文革を指導していた)
一九六六年の国慶節（一〇月一日）、資本家の子だつた一九歳の鄭義は、「反革命」分子とし

て監禁されていた。毛沢東への礼賛、赤いバッジをつける権利すら剥奪されていた。天安門広場の赤旗の海、万歳の嵐を目に浮かべながら、彼は、人の目から隠れるように、毛のバッジを左胸の心臓の上にぐっと横ざしにした。「毛主席のバッジを胸にとめると、言いようもなく気分がすつきりした。血がどくどく流れ、感涙が後から後から流れ出る。毛主席、奴らもあなたをこの胸から奪い取ることなどできなくなりました！ 永遠に！」この自害行為を支えたのは、「毛主席に対する愛と忠誠」であり、それは「私たちこの世代の青年の神聖にして純潔この上ない感情だつた」と、鄭はいう。⁴²

「下放」の試練

毛沢東は若者の忠誠心を利用して文化大革命を起こしたが、民衆全体が立ち上ると、逆に軍や労働者側に厚い信頼を示し、暴走した紅衛兵運動への制限、弾圧を始めた。一九六八年以降、毛は、知識青年（主として中学、高校の生徒を指す）は農村へ行つて農民の再教育を受ける必要があるという「最高指示」を出し、数百万の学生を不毛の辺境地に下放させた。「再教育」という表向きの理由の裏には、用済みの者たちの厄介払い、都市人口の分散化、中ソ戦争への備えなど隠れた意図があつた。

(* 知識青年が農村に行つて、貧農・下層中農の再教育を受けること)

(**一九六九年黒龍江省辺境の珍宝島で中ソ両国の中に紛争が起こり、イデオロギーの対立にも煽られ、一時両国の間は臨戦状態に入った)

毛の裏切りにもかかわらず、若者の革命への熱狂と毛への忠誠は、少なくとも一九六八、六年に下放されるまで、変わらなかつた。

現在の文学作品では、列車の汽笛と同時に泣き声が一斉に起ころうという悲壯な雰囲気で下放青年の旅立ちを描きがちであるが、事実は必ずしもそうではなかつた。特に当初、下放は志願制であり、大部分の若者は、むしろ意氣軒昂たる革命の氣概で喜んで農村に赴いたのである。

一九六八年末のある日、清華大学付属中学校の正門の壁に山西省への下放学生募集の知らせが張り出されると、半日と経たないうちに四〇〇人の定員が一杯になつた。一定年齢に達していなかつたり、身体に障害があつたりしたために許可されなかつた者は泣きわめき、血書を書いてまでも出かけようとするものもいた。鄭義も、この機会に光榮にも下放の許可を得て、一九六八年一二月中旬、「新しい戦場に突き進んで行くかのような気概とともに、首都と家族に別れを告げ、艱難数知れぬ下放の道を歩み出した」のであつた。⁽⁴²⁾ 困窮の山村に入つた鄭と彼の仲間たちは、昼には農民と同じような重い肉体労働をこなして思想改造に励み、夜は暗い灯油

ランプの下で、マルクス主義の理論書を読みふけった、という。

六八年に中学を卒業した某氏の場合、出身の問題で革命運動の中で疎外されたが、毛に対する自分の赤誠を示すため、一九六九年、下放の呼びかけに応じて一番乗りで志願し、条件の最も厳しい内蒙古への配置を希望した。「家族も支持したし、強要された感じは毛頭なかつた。青年が労農兵の中に入り、彼らの教育を受けることは、当たり前のようと思えた。毛沢東の指示だからね……」最初の下放は、ほとんど自分の意志によるものであつた」と、彼はいう。彼は、後に優秀な働きぶりで農村で入党の宿願を果たし、脱出ブームが起こつた時も動搖せず、指の血を絞り出して農村に根を下ろす誓約書を書くほどであった。

「われわれは確かに騙され、苦難をなめ尽くした。しかし、われわれは倒れかかった国家の柱を支えたのではないか」。都市に戻った今でも、彼は当時の革命的情概を自負している。⁽³⁵⁾

梁恒の姉の放の場合も同様であつた。一家離散の羽目になつても革命的情熱が衰えず、「最も貧しい場所へいくことによつて、中国とマルクス・レーニン主義、そして革命について、何か本当に研究することができる」と考え、また「新しい田舎、機械化された共産主義の楽園」の建設を夢見て湖北省の農村へ赴いたのであつた。⁽³⁶⁾

若者層の革命の熱狂が冷め始めたのは、農村の愚昧、遅れた現実と厳しい自然環境にぶつか

つてからであり、とりわけ一九七一年林彪事件が暴露された後である。

幹部、一般市民

反右派運動の恐怖、大躍進後の飢餓が記憶に新しい一般市民の場合、この大革命に対して学生ほどの純情はなかつたが、いつ身に迫るかしれぬ危険を感じつつ、決して逆らうことのできない毛の指示に従い、文革に身を捧げたのであつた。もちろん、この機会を借りて私憤のはけ口とし、あるいは乱世の英雄になろうという、野心を抱くものも少なくなかつた。

共産党の編訳局に勤めた知識人楊威理も、立ち上がつた一人であるが、その「造反」の心理は複雑なものであつた。

毛沢東の「造反せよ」の指示には逆らえないと心得ているが、しかし、「全国に『悪党』がそんなに多いのか。少なくとも家内のような校長たちが『悪党』だとは、どうしても考えられない（楊の妻はこの時打倒されていた）。毛沢東は一体何をしようとしているのか、この国は一体どうなるのであろうか、当時、私には分からなかつた」と楊はいう。

にもかかわらず、結局分からまま楊は「造反」に立ち上がつた。「…長年抑圧されていた不満」のはけ口に利用したのである。「今回の文革を契機に、私は編訳局の上司に復讐しよ

うと試みたのである。更に、これを昇進の手立てにしようとする潜在意識があつた」。自己の利益をはかるために造反を起こし、上司や同僚を「反党グループ」ときめつけた楊であつたが、「彼らは本当に反党分子なのであろうか。それはこの大字報を書いた時点でも、私はノーリーと断言できる。が、そうでありながら、私はイエスと書いた」と後に告白している。

楊の衝動は、ふだん積もらせていた上司への怨念が爆発した結果のように見えるが、一方毛沢東の権威への畏服と、非常時を生き抜こうとする自己防衛の本能が働いていたのも確かだつた。最も過激な「造反」姿勢を取つたのは、「自分の文革擁護を表明したいがため」であり、また「自分はそんなに政治面で劣っていない」と表明したいため⁵⁰でもあつた。

一方、「造反」に活躍する人が大勢いる反面、つるし上げられ、迫害を受けた無実の人も多く存在した。彼らのほとんどは、投獄され、あるいは迫害され自殺する寸前まで、毛沢東、共産党を信じ、党への忠誠を誓い続けた。

反右派運動後妻と政治離婚を果たした梁恒の父は、文革になると、自分自身が生け贋にされる運命となつた。「文化大革命はますますわけがわからなくなつていていた」「ある日、誰かが黒でも、たちまち赤に変わり、それがまた黒となる」と彼は困惑しているが、毛への忠誠だけは変わらなかつた。子供たちが家を出ようとしたとき、彼はこうつぶやいた。「おまえたちがど

んなに私を憎もうと、私はつねに毛主席に忠実であつたし、党と社会主義を支持し続けてきたのだ⁽¹⁶⁾。彼は、いわれのない罪を認め、忠誠を示して党からの是正を待ちわびたのであつた。

張戎の父の場合、文化大革命の混乱をみて、内に疑問を感じた。「ぼくには、文化大革命というものがわからない。だが、いまの状況は、どう見てもまちがつていて、人民の基本的な権利や安全が侵されている。言語に絶する状況だ。ぼくは共産党員として、これ以上の破壊を放つておくわけにはいかない」と、党中央、毛沢東に直訴しようと決意する。革命事業への忠誠心から生まれた勇気であつた。

「党をうらんでは、いけないよ。どんなに重大なまちがいをおかしても、党はいつかきっとまちがいを正す力を持つていて信じて」。連行される前に家族に残した最後の言葉であつた。

不幸な人々

文化大革命の中、冤罪で酷い拷問を受けて死に、あるいは侮辱に耐えられず自ら命を絶つた人も少なくなかつた。彼らが最期に残したのは、革命事業への忠誠を誓う言葉であり、また「毛主席万歳、文化大革命万歳」という、時代の最強の叫びであつた。

三〇歳のある女医は、紅衛兵の拷問に耐えられず父母と一家心中を図つた。親族に残した遺

書には「私は人民の敵である。周囲の人に毒を及ぼさないため、自ら命を絶つことを決めた。プロレタリア文化大革命万歳！」○○○（夫の名前）よ…、革命の道をまつしぐらに進め！死のすべては私個人の責任である」と書かれていた。革命への忠誠を示し、親族を巻き込まないような、最後の配慮が施されていた。彼女は結局救われ死ねなかつたが、父母の死の手助けをしたため終身刑で刑務所に服役した。刑務所の自己批判会において彼女は、「文化大革命に逆らつた罪状を徹底的に告白して反省した。：党の政策を信じていれば、『罪』（心中自殺）を犯さずに済むはずだ、と自らを責めたてた。妙なことに、自己批判している間に、党に対する信頼が回復し、生き甲斐を感じるようになつた：」と述べている。

二〇歳のある女子大学生は、毛の熱烈な崇拜者であった。文革中新婚の夫が反革命分子と宣告され自殺に追い込まれたが、彼女も「反革命の家族」の汚名を着せられ、山西省の貧しい村に下放された。希望と生きる勇気を失い、数回、自殺寸前に追い込まれた彼女は、逆境の中、毎日のように毛沢東の語録を手にして、太陽の昇る東に向かい、毛への祈禱を捧げた。

「崇拜？ 自分でもよく分からなかつた。ただ、ある種の精神的支えを必要とし、自分を充実させ、生きる勇気を沸かせる精神力が必要であることだけを意識した」と、彼女はいう。この精神的支えは、まさに彼女に悲劇をもたらした、文化大革命の張本人毛沢東であつた。³⁵⁾

前述した共産党編訳局の楊威理も、「造反」に活躍したのもつかの間、台灣出身という理由から「日本帝国主義のスパイ」と決めつけられた。監禁された彼は、毛沢東に対する忠誠を忘れず、真心をこめて「早請示、晚匯報^{*}」に励んでいた。まもなく楊は、こうした忠誠の権利さえを剥奪される重罪の身になつたが、身分の区別がつかない病院で見知らぬ患者数十人と久々に「毛語錄の歌」を合唱できた時には、「あたかもここで公民権を再獲得した」ような感激で胸が一杯であつた。

(*毛に対する礼賛の日課)

無実にもかかわらず、楊は心から反省し、あたかも自分を本物の犯罪者と見なしているかのようであった。一九六八年二月に開かれた自己批判の反省会について、楊はつぎのように描写している。

「無実の罪人たち」皆涙を流して泣き叫んだ。私も例外ではない。『毛主席、こんなに堕落して誠に申し訳ありません』『私をエゴイズムの泥沼から救い出してくださったのは、ほかでもない毛主席でございます』『これまで犯した過ちは必ず徹底的に改めますので、引き続き革命の道を歩ませてください』と一人一人誓うのであった。それは見せかけではなかつた。罪人と見なされた当初は抵抗心があつたが、こんな異常な村八分の境遇に一年も二年も置かれる

と、次第に自分は罪を犯したに違いないという、ある種の錯覚に陥る」。

「私も眞面目に自己批判の準備をした。…よし、やるぞ、これからは眞人間になるのだ、と私はまず党に参加した後の『反動思想』をさらけ出した。必要なら編訳局全体会議で自己批判をさせてください、とまで要求した」。「…罪人としての自己意識と、そして一日も早く自由になりたいとの強烈な願望がそうさせたのである」。⁽⁵⁰⁾

こうして、監禁中の楊は毎日のように「共産党を賛美し、自己を罵倒する内容」の反省書を書き続けたのである。

「五七幹部学校」

若者の下放と同じように、「造反」で失脚した幹部（知識人）も、一九六九年、文化大革命の勝利宣言と同時に、大量に農村に下放された。いわゆる「五七幹部学校」であり、若い学生と同じように、農民の「再教育」を受けさせるという理由であった。

（*一九六六年、毛の五・七指示によって作られた労働キャンプ）

権力の座から追われた幹部たちには、最初からこうした馬鹿げた「再教育」の実質を見抜いたものが少なくなかったが、反抗に出るものはほとんどなかつた。抗し得ぬ毛の指示である



「五七幹部学校」に入るため、列を作り下放する幹部（知識人）たち（1969）

上、心身ともに疲れはて、一日も早く革命の嵐から逃れようとする心理も加わり、喜んで農村に赴いた人もかなりいた。彼らの大多数はまじめに生産労働に従事し、それを通じて魂の深層にあるとされた、ブルジョア、修正主義の思想と格闘し、思想改造に励んだのであった。

樂黛雲はその一人である。農民による「再教育」と言われながら、實際には外界と隔離された幹部学校のあり方に疑問を抱くが、努めて毛の教えの意義を理解しようとし、自分たちに対する扱いに憤りを感じることはほとんどなかつた。「かりに、人民の利益になることを何もしていかないとしても、少なくとも何か価値のあることを学んではいるのだと思つていた。自ら困難な労働に立ち向かい、……一人で生きられるよう自らを鍛えるのは實に楽しかつた」。一年後の総括において樂は、「私は基本的には農村での日々を楽しんだこと、労働者として社会に目に見える貢献ができるのをうれしく思つてゐる」と発言し、農村で得た「強く、健康で、有用で、自然と一体となつた実感」に満足を示したのだつた。⁽⁵⁵⁾

作家陳白塵の場合、「五七幹部学校」への志願は、革命の激動から逃れるためであつた。「三年をこえる激動と不安、心痛の日々を過ごしたあとでは、農村での静かな田園生活というのは、まさしくあこがれといつてよかつた」。「蚊にくわれても悪口雜言に傷つけられるのよりもずっとましましてあつた」。下放者のリストから自分の名前を見つけた時の陳は、「范進が舉人に合

格したのにも似た狂おしい喜びでいっぱいになつた」、³⁴ という。

農村の文化大革命

文化大革命の影響は農村にも波及し、地域の差こそあるものの、大部分の農村でも「造反」、「奪権」（政権奪取）、階級隊列の整頓、「表忠心」（忠誠の誓い）の儀式など、形式上の文化大革命を一通り経験した。ただ、全体として都市ほどの熱気はなく、破壊が甚だしく行われたり、死者をたくさん出したりしたような所は少なかつた。元の「黒五類」（地主、富裕農民、反革命分子、悪党、右派）を再びつるし上げて再打倒したほか、権力の争い、私的な復讐に利用されたケースも、多く見られた。

チエン村の場合、文革前に下放された都市青年を中心に紅衛兵が組織され、都市の文革をまねして「造反」が始まった。「四旧」（旧い思想、文化、道徳、習慣）を打ち壊し、元の地主に対する鬭争会も開かれた。また毛に対する忠誠を示すため、ベンキで村中を「赤い海」に染め上げる宣伝活動も行われた。³⁵ やがて都会の「奪権」の嵐もチエン村に及び、若者は勇ましく生産大隊（村単位の生産小隊を統べる行政組織）の事務所に押し掛け、「奪権するぞ」と迫つた。しかし、権限（大隊の印鑑）が実際に差し出されると、さすがの紅衛兵たちも受け取る勇気は

なかつた。もともと青年たちは行政管理、生産指導など面倒くさいことに関与する気はなく、また関与する能力も経験もなかつたためである。「本当のところ、私たちは奪権がどういうことなのか全く分かっていなかつた」と、当事者の一人はいう。²⁸⁾

文化大革命の進行に従つて、権力機構は県、公社という上層部から崩れ、一九六七年初め、チエン村も上からの統制を失い、無政府状態に入つた。この時、急務となつて春耕作を支えていたのは、忠実に職務にとどまつた各生産隊の実務幹部であつた。生産をおろそかにすれば村人が飢え死にするという、大躍進において得た経験からであつた。その後、上からの指導で、新権力機構である「貧農下層中農協会」が出来上がり、文革の熱気に促され、生産活動も盛んとなつた。折しも好天候に恵まれ、一九六七年は大豊作となり、人々はこれが文革のお陰だと、毛主席に感謝していた。しかし毛の狙いは、決して豊かさではなかつた。六八年夏から、階級隊列の整頓が求められ、新たな政治の嵐がチエン村に襲いかかつた。「階級の敵」を摘発するため毎日、批判・闘争会が繰り広げられた。結局、チエン村の農民は、「黒五類」の他、生産隊長、「造反」青年、ごろつきなど二十数人の村人を牛小屋に入れてようやくこの嵐をしのいだが、その後にくるのは、「私」の絶滅作戦、毛への忠誠の誓いという、文革の最後の仕上げであつた。忠の字の踊り、語録の暗唱、朝夕の礼賛などの儀式には、演出にぎこちな

さが感じられる以外、抵抗はないが、「私」の領分への侵犯が始まるとき、農民の反抗が現れた。チエン村の場合、忠誠を示す行動として、私的経済の放棄が要求された。個人所有の果樹や竹林の上納を迫られ、家計の足しにするための漁の網も没収された。さらに、自留地の放棄、雌豚の供出、採算単位の引き上げなど、大躍進時代を思わせる共産化政策が次々と遂行された。これに対しても農民の抵抗は次第に強まつた。竹林の無償提供を命じられたものは連夜竹を切り倒し、漁網を手放さざるを得なかつたものも、ひそかに値の張る重りを手元に残した。自留地の没収、大生産単位採算の管理方式に対する、農民はサボタージュで抵抗した。

「あからさまな抵抗はみられなかつたけれども、仕事のペースは落ちた」。「農作業の成績はガタ落ちでした。大隊内の特定の耕地に対して自分に責任があると感じる者は誰もいませんでした。ある作業グループは、仕事を遅く始める隣人たちが野良に出てくるまでは自分たちも野良には出ず、そして夕方にはほかのグループが仕事をやめるのを見ると自分たちも仕事を切り上げるのでした。余計に働いても自分たちには何も得なことはなかろうと思つていたのです。普通なら完了するのに、いまではほんの一部しか終えないのです」。

この抵抗は、やがて効果を現した。農民の不平不満に直面した党の上級機関はまもなく採算単位を生産隊に戻し、自留地、豚、果樹を返し、私的な副業の再開も許したのであった。「毛

沢東崇拝と階級隊列整頓運動の強圧的な勢いも、生産隊所有制度と私的な仕事を放棄することに対する農民の断固とした抵抗に直面したときにはほとんど役立たなかつたのであつた。⁽²⁸⁾

豊かで情報の早いチエン村と違つて、一九六九年初め梁恒の父が下放されたのは、湖南省常寧県鵝院公社の貧しい村であつた。豊作の年でも一人当たりの食糧は年に雑穀一五〇キロから二〇〇キロしかなく、唯一の現金収入は各戸が飼つている豚を政府に売り渡す時の代金、二〇元程度であつた。家族でよそゆきのズボンを一着しか持たない家庭も少なくなく、県庁の都市どころか、五、六キロ離れた町へ行つたことのある者も人口の三分の一ほどであつた。この山村に文化大革命の息吹を吹き込んだのは、農民による「再教育」の対象とされていたはずの、梁恒の父であつた。

祖先の廟堂が掃除され、毛沢東と林彪のポスターが掲げられた。伝統的な「冬眠」（冬の朝寝坊）が破られ、毎朝薄暗い中、ロープでズボンをとめ、乳房にしがみついた赤ん坊を抱えた村人は廟に集まり、教えられた作法で一枚の肖像に向かつて厳かな朝礼が行われた。梁恒の父が組織した夜の勉強会にも、農民達は喜んでやつてきた。「向こうの世界のことを知るのは、めつたにないチャンスだった」のである。しかし、革命の矛先が「私」の領分に向けられる」と、農民達の当惑が現れた。豚など家畜の飼育を禁止する政策が上から伝わった時、農民は抵

抗した。

「おれたちにやわからねえ。鶏や家鴨を育てることが、どうして腐った資本主義なんだ？卵を売らねえで、どうやつて油や塩を買うんだ？」、「梁さん。あなたは学があるんだから、毛主席に手紙を書いて、わけを話してくれめえか」と不審を抱く村人。

そして、公社による家畜没収が始まるに先立つて、農民たちは家畜屠殺の行動を起こした。「どの家の中庭も屠殺場に変わり、誰の手も血にそまつた。悲鳴が山並にこだまし、狂つたような鶏の鳴き声が数千回も太陽に向かつて昇つていった。卵を産む牝鶏も、政府に差し出すよりは自分で食べたほうがいいと、農民達は考えたのである⁽¹⁶⁾」。その後、上からの思想教育、取り締まりが強化され続けたにもかかわらず、農民達は以前のように幹部の目を盗んで家畜を銅つたり、国有林の山に入つて、薪用の木材を盗み取つたりしたのであつた。

農村の文化大革命は、全体として都市ほどの熱狂はなかつたが、毛の指示に服従し、革命の現実をやむなく受け入れる農民の諦めはあつた。しかし、農民には革命的自覚以上に、自己の生活を護る本能があることは、チエン村や鵝院公社の例から分かるであろう。「公」と「私」の死闘を実質とする文化大革命。農民はその最後の、しかも最も重要である「私」の絶滅の段階で、この革命に拒否反応を示したのであつた。

要するに、巨大なエネルギーを噴出した文化大革命は、決して強要されたものではなかつた。軍隊、秘密警察の手によらないところにこの革命の特徴がある。血生臭い赤い恐怖を作り出したのは、他でもなく民衆自身であった。懷疑、不安、怨念、生への渴望など複雑な思いを抱きながら、ほとんどの人——やる方にしてやられる方にも——が、革命の渦潮に飲み込まれて、運動に協力したといえる。「造反」の側はヒステリックに「敵」を探しまわり、「敵」とされた不幸な人も、ありもしない罪を反省し、人民の中に戻ることをひたすら願い続けた。誰が敵か、何が善で何が悪か、何が革命で何が反動なのかについて、誰も弁別がつかなかつたが、革命、毛沢東、共産党、公は正しいという認識だけは、共通していた。

一時ではあるが、毛沢東の賭けは見事に成功し、一九七〇年までの約四年間、毛沢東が期待した「継続革命」と、「大公無私」の共産主義的精神状態は、少なくとも表面上、国中を隅々まで支配したと言える。ただ、民衆の理解と自発的協力が見られた五〇年代と違つて、この精神状態は非常時の恐怖政治によって人為的に作り出されたもので、伝統の犠牲と一〇〇〇万を超える尊い命を、代価とするものであった。

2 意識転換の胎動——「文化大革命」後期

懐疑

文化大革命の激動は、一九六九年、共産党の第九期大会をもつて終了し、七〇年以降、全国各地が次第に秩序回復の段階に入った。もちろん、この段階でも政治運動、肅清の余震は続くが、人々の表情には、もはや二、三年前のような熱狂が窺えなかつた。ひつきりなしに襲つてきた「運動」の高波に心身とも疲れきり、「継続革命」すればするほど、結局わが身が危なくなるのだ、と誰もが予感したためである。

小・中学校ではすでに一九六八年初めから「革命的授業」（主として政治教育）が復活し、閉鎖された大学も、一九七〇年の後半から変則的、限定的に募集（労農兵からの選抜）が始まつた。経済の蘇生を促すため打倒された実務派の指導者たちが次第に復帰し、幹部の復権、生産・生活の正常化、外交・国際関係の修復などの種々の措置が取られた。狂気な時代は一応、

終止符を打たれたのである。

文化大革命の「偉大な勝利」が謳われる傍ら、人々の目に映つたのは悲惨な風景であつた。工場、学校、商店が破壊され、壊れたガラス、剝がれた大字報（壁新聞）、色あせた赤塗りのスローガンはいたるところで目についた。必要な生活物資の供給は極端に不足し、あちらこちらに、配給物を求める長蛇の列ができた。

古い人間関係、家族の絆は革命の激動によつてすたすたに裂かれていた。幸い難を逃れた無傷の人々も、多くは左遷、下放で都市を離れ、家族離散の羽目になつた。傷の痛みを癒しつつ、人々は次第に反省し始めた。

「父と母のように善良な人間が、どうして離婚しなければならなかつたのか？　…人びとはどうして私や彭明（従兄弟）を、何が何でも反革命分子に仕立て上げようとするのか？　…私たちは革命のためにすべてを犠牲にしたのに、革命はどうして私たちに何もくれないのか？」と、自身と家族の数々の悲劇の後、革命、毛沢東に忠誠を尽くした梁恒はついに疑うようになつた。^{〔16〕}

愛娘を「北大荒」（黒龍江省の辺境地の俗称）の農村に送り、自らも二年近くきつい下放生活を経験した樂黛雲も、荒れ果てた北京大学のキャンパスを見て「現行の政策に不安を覚え、

過去五年間が生み出した結果に疑問を抱く」ようになつた。

当局が執拗に続ける文革肯定の宣伝にもかかわらず、「最近まで熱心に革命の目標に献身し、いまや情熱を使いはたしてしまつた若者たちが、状況の変化をふり返り、何がどう間違つたのかという問題を意識し始めたのは、この時期のことだつた」と樂はいう。⁽⁵⁵⁾

北京の下放青年朱維紅は、毛の教えを信じ、一七歳の時、「脱胎換骨」の思想改造をめざして山西省榆次県の貧しい山村にはいった。きつい労働、貧しい生活と遅れた農村の現実に直面しているうちに、「新式農民」になる意志は次第に搖らぎ始める。この間、父も兄も下放され、北京に残る病氣の母は一九七〇年、孤独な死を迎えた。一年あまりの下放生活を振り返つて朱は、ついに心の中にある、拭いきれない「私」の存在を意識した。「毛主席の教えはわれわれに理想的な世界を示したが、実際にそのような世界で生きられる無私の人間はあまりいないのではないか。生きようとしながら私利を顧みないものは、自分の髪を引っ張つて地球から離れようとしているに等しい」。朱は、一〇歳の誕生日を迎えた七〇年一月、革命に獻身する気持ちや「私」と戦う思想改造の意欲がすっかり消失してしまつた。

「誰もが消沈して失意のどん底に落ちた。夢は破滅し、心の拠り所が失われた。：それからつづく窮屈な日々には、みんなはこつそりと自分の将来のことを考えていた」。「厳しい冬が近

づくと、知識青年にはもう前のように農村で『革命化』のお正月（働いたり毛思想の宣伝にでかけたりして正月をすごすこと）を迎えるとするものではなく、大寨式の段々畑の造成に汗を流す意欲もなかつた…」。農村からの脱出は知識青年の唯一の願望となつたのである。^{〔52〕}

林彪事件の衝撃

人々に大きなショックを与えたのは、一九七一年に発覚した林彪事件であった。毛主席の正統の継承者であると信じられた林副統帥が毛の暗殺を計画し、そして陰謀発覚後、「修正主義」、「社会帝国主義」の極悪のソ連へ逃亡した！ このショッキングな事実は、多くの人々に文化大革命、そして中央指導部への不信の念を抱かせたのである。

「林彪事件があつてから、僕は正直言つて、いく晩もよく眠れませんでした。かつてあんなに神聖で、あんなに崇拜していたたくさんのものが、偽りだつたんだからね。ただし、毛に対する感情はまだ変わつていなかつたのですが。その頃、新聞を手にしてよく考え込んでいたものでした。：江青（「文革」派四人組の一人、毛夫人）の醜聞、社会の醜い現実、考えるほど分からなくなり、すっかり元気をなくしていました」と、ある元祖紅衛兵がその時のショックを回想し、樂黛雲も当時の心情を次のように書き留めた。

「発覚した事実は私を打ちくだいた。考へると夜も眠れなかつた。これらがすべて発覚しなかつたならば、林彪は今なお崇高な栄光に包まれた人物のままでいたのだ。『幕の背後』で何が起こつてゐるのかも、あるいは腐敗が党の中核にまで達してゐることも誰も知らなかつたのだ。私たちの實に多くの者が我が國の未来のために命を捧げてきたが、社会が林立果^{*}のようない間に動かされてゐるのだとしたら、私たちの努力は何になるだろう。夫も私も、ひたすら信じてきた制度のどこかが根本的に間違つてゐることに気づいて幻滅した。党に対する信頼が揺らいだのは私たちだけではないだろうと思つたが、誰も自分の不安を人に話すことはできなかつた⁽⁵⁵⁾」と。

(*林彪の息子、事件の中心人物。親の七光で二四歳の若さで空軍作戦部長に)

チエン村では、上からの指示通り事件の善後教育が綿密に行われたにもかかわらず、農民達の疑念を払えなかつた。「林彪事件は私の考へに影響を与へました。事態はトップレベルではいつも変化しているように見え：彼らのいうことを何でも信用するというわけにはいきません」とある青年農民はいい、李という下放青年も、「劉少奇が引きずりおろされたときは私たちは大いに支持しました。當時毛沢東は、紅い太陽だ何だときわめて高く持ち上げられていました。しかし、林彪事件は私たちに大きな教訓を与えてくれました。上のほうの指導者たちは

今日あるものを丸いといいながら、翌日になるとそれは平らであるというかもしれない。：私たちはそうした制度に信頼をなくしました」と、過去の盲信に見切りをつけた。毛沢東に対する崇拜はまだ消え失せてはいないが、自分の頭でものごとを考える人が多くなってきた。⁽²⁸⁾

「再教育」の効果

また、下放政策のおかげであろう、共産主義の理想とはほど遠い、愚昧で貧困な農村の現実も、人々に多くのものを教えた。迫害を逃れて江蘇、安徽省の農村を歩いた紅衛兵魏京生は、革命後の悲惨な現状を目の当たりにし、「共産主義を憎悪し、劉少奇打倒を受け入れなかつた」農民の態度に接して懷疑が深まり、ついに「毛沢東は首切り人だ」という結論に達した。⁽¹³⁾ 德陽県の農村に身を寄せた一八歳の張戎も、農民から大躍進時代の飢餓の話を聞き、平均主義の採算制度の下で「スローモーションのようにのろのろと働いた」農民のサボタージュぶりを見て、心が根底から揺さぶられ、共産党の体制に対する懷疑が深まつた。⁽⁴⁶⁾

共産主義の楽園を建設しようとして自ら農村への下放を志願したチエン村の知識青年たちも、林彪事件以降、きつい、前途のない農村生活をあきらめ、相次いで資本主義の「退廃都市」香港への脱出を試みた。あれほど文化大革命に熱中し、共産入党を念願し、農村での自

らの改造に余念のなかつた若き女性阿奥も、一年間躊躇した末に決断した。

「一九七四年の夏、阿奥は昔の敵対者の一人であつた李と連立つて、長い危険な道のりを歩いて海岸に出た。彼らはそつと海に入り、チエン村での十年にわたる辛い仕事のなかで培つた体力を支えに、外国での新しい生活をめざしてへとへとなりながら五時間泳ぎつづけた」。⁽²⁸⁾ 革命、社会主義の祖国、親との決別であり、命がけの密入国であつた。

一方、幹部が下放された「五七幹部学校」でも、林彪事件の後、革命と思想改造の熱が冷め始めた。人々は動きだし、コネを探して復権の機会を窺つた。陳白塵^がいた雲夢沢五七幹部学校では、「林彪の没落以降、熱気は徐々に引いていった。情熱的『革命家』たちも幹部学校に根をおろして一生を過ごすなどと言わなくなり、自分の先行きのことを考え始めた」。程なく幹部の復権が始まり、人間関係も好転した。みんなは家族訪問の口実で都市に戻り、自分の未來、子供の未来のためコネを作る活動を始めた。「一九七一年末になると、家族訪問が高潮に達し…、新年と春節の前後は、広い中隊の中で残っているのは五分の一に足りない人数であった」という。

父母と一緒に雲夢澤にきていた沈小南（当時、小学生）も、「五七幹部学校」の末期を次のように描いている。

「上部の政策が目に見えぬところで変わり始めたのをみんなひそかに感じていた。五七幹部学校という実質的労働改造農場はもう先の長いものではないと思つていて。『満期釈放』の日は遠からず来る。人々は形勢のなりゆきを見守つていた。積極的な人間はあちこちへ運動し、自分を売りこんだり、仕事の連絡をつけたりして、早く雲夢澤を離れて故郷へ帰ろうと準備していた。幹部学校創設時の緊張した戦闘的気分、天地を動かそうという『五七戦士』の壮大な志は徐々に消えうせていき、階級闘争の殺伐さも相対的に弱まつていた。『五七戦士』たちは戦場を片付け始めていた。余剩物資を享受し始めていた。食堂は一、二日おきにごちそうを出し、各中隊ではふとった豚が殺される悲鳴がひつきりなしに聞こえた。鶏を食べ、アヒルを食べ、最後には番犬のぶち大きえも何人かの若者に太い縄を首にまかれて絞殺され、伝統的美味として食べられてしまった。…労働は減り、暇が増えた。趣味の広い文人たちの間ではひそかにいくつかの趣味が流行した。…それからまた幹部学校の近くにある風景の良いところや名所旧跡を見物することも行われた。…このころには幹部学校はすでに幹部の保養所といった趣があつた」。³⁴

このような食べ尽くし、破壊し尽くしの風景は、当時あちこちで見られ、樂黛雲のいた江西省鯉魚洲の「五七幹部学校」においても、一九七一年夏撤退の前、お祭り気分のうちに、沼地

の中から苦労して築き上げた共同体が解体された。豚はすべて殺され、鶏を食べつくすために「百鶏の宴」が催された。船と農業機具を近隣の公社にたたき売り、発電所を解体し、宿舎や煉瓦工場や稻田を放棄した。「巻き貝や蚊との闘い、うだる暑さとおそろしい雨との闘いは、すべて無駄だった」。⁵⁵

「走後門」

意識転換の胎動を象徴したのは、爆発的に増えた「走後門」（特権によるコネ、裏口を利用した不正行為）の現象である。六〇年代の初期、特権階層の中で小規模に発生し、文革前期にやり玉にあげられ姿を消したこの現象は、幹部の復権と同時に現れてきた。初めは、復権のための活動だったが、やがて、子女を農村から救う手段として利用され、裏口入営、裏口入学、戸籍の裏口異動（都市へ）といった現象が盛んとなつた。その後、「走後門」の現象は次第に拡大し、日常生活に欠乏する食料品・物資の配給、医療、交通、行政面の便宜をはかる潤滑油として大衆生活、社会活動の全面に浸透していくた。

（＊軍の生活は生きるあてのない農村よりかなり良いので、農村脱出の手段として、よく利用された）

文革の激動期に引き裂かれた古い人間関係はコネに絡んで復活し、交際が絶えていた古いつてをたどつての行き来が始まった。「五七幹部学校」での暇を利用して、元の上司、部下、同僚、戦友、教え子たちが互いに連絡を取るようになり、無事をたずねあう挨拶もほどほどに、「コネ」、「路子（裏口）」に関する情報の交換に話が切り替えられる。

下放青年の農村からの脱出ブームは、まず裏口入営から始まった。一九七〇年二月内蒙古生産建設兵团政治部は、次のような報告書をまとめた。

「昨年十一月以来、種々の個人的理由で農場にいる子女を呼び戻し、裏入営させる事例が増えてきた。ほとんどは高官たち自身が、手紙、電報、電話等を通じて直接兵团の責任者、所管部門に圧力をかけ、自分の異動、家族の病気など偽りの理由で不法に子女を帰京させ、そのまま軍隊に送り込む手口だ。」

（＊生産建設兵团は、元の国営農場をベースにした文革中の組織。軍隊の編成を導入し、軍の間接的指導を受け、下放知識青年をたくさん受け入れた場所である）

「某外国駐在大使は、帰国するや外交部名義の公用書簡をよこし、里帰りの理由で子供を呼び寄せ、その後軍隊に送り込んだ。^{〔53〕} 戸籍すら転出しないままの入営である。里帰りは口実にすぎず、狙いは農村からの脱出であつた」。

まもなく、新式の「労農兵大学生」選抜が始まったが、「走後門」の風潮はさらに高まり、軍隊へから大学へと、シフトしていった。

(*「文革」中、教育革命の一環として七〇年から開始。下放中に優れた働きぶりを示し高い政治自覚を有するものが選抜の対象となるはずだったが、実際、ほとんどは裏口で決定された。文革後の七六年に廃止)

一九七一年末に復権した張戎の母も、「走後門」の達人である。地位、コネと交友関係を巧みに利用して四人の子供全員を下放先から脱出させ、工場への配属、大学の入学に成功させた。まず張戎本人を徳陽県の農村から成都市の機械工場へ、さらに四川大学に入学させ、その後、でつちあげの肝硬変の診断書を手に入れ姉の鴻を成都市に帰還させた。また、弟の京明をあの手この手を使って武漢の華中工学院（大学に相当）に入れ、最後に、下放の運命をまつていた次弟の小黒をも、むりやり空軍の航空学院に押し込んだ。

「いまや、何をするにもコネがものを言う時代になつた。母のもとへは、毎日いろいろな人がたずねに來た。学校の先生や、医者、看護婦、俳優、下級官吏。みんな、自分の子供を農村から呼びもどすために母に口ききを依頼しに來たのだ。：母は、自分を頼つて來た人々のために毎日精力的に動きまわつた」と、張は当時の様子を記している。

張戎の在学した四川大学の英文科でも、「労農兵」（労働者、農民、兵士）だつたはずの新入生の中に「高級幹部の子弟がたくさん含まれていた。それ以外の人たちも、全員なんらかのコネがあつた。農民ならば生産隊の隊長か人民公社の書記にコネがあり、労働者なら工場長にコネがあり、さもなければ自分自身が『小幹部』だつた。『後門』以外に大学へはいる道はなかつたのだ」⁴⁶。

もちろん、コネのある幸運児は一部に過ぎなかつた。軍隊、大学に入つたり、地方都市に転出したりする若者が続出する一方、一〇年近く貧しい農村に置き去りにされた不運なものも、少なくなかつた。一九七二年一〇月、絶望に陥つた青年楊益潤は、大学生選抜の噂を聞きつけるや、先を越されないように仕事をさぼつて道端で来村する担当者を待ち伏せた。「僕は担当者のなまえや顔など知る由はなく、どの道を通つてくるかさえ分からなかつた。希望、失望が心の中で交錯し、僕はそれらしいすべての通行人に声をかけて確かめてみた。気をまぎらわすため、口元が痺れるまで狂つたようにタバコをふかした」。暮れ近くになつてやつと担当の教師をつかまえたが、楊が聞かされた最初の言葉は、「すべての定員はすでに満たした」というものだつた。選抜の担当者がまだ村に入る前のことであつた。

労働者の子、朗平はいう。

「北大荒にいた時、物わかりがずいぶん進歩したものだ。親父が革命の幹部であった連中は、そろいも揃つて北京に戻つて幹部やら、大学生やら、労働者やらに変身し、俺のような『すべてを指導する立場』（毛の言葉）にあるはずの労働者の子は、くそつたれ！ この大荒野に置き去りにされちまつたんだ。：俺はようやくある理屈が分かつた。²⁵⁾『大物は権力を握り、小物は錢の力に頼る』、それ以外の理屈は、何もかもうそっぱちだ！」⁴²⁾

農村の厳しい生活と立ち遅れの現実は、多くの下放青年の夢を打ち砕き、反体制の尖兵に育てあげた。一九七四年春、六年の下放生活を終えた鄭義は、「私が最後に私の大坪（下放されていた村）に別れを告げたときにはもう、あの九六〇万平方キロの大地と私の精神世界とを照らしていた五つの太陽（毛沢東、共産党、社会主義、プロレタリア独裁、毛沢東思想）は、すでに沈み始めていることは明らかだつた」と、自分の思想変化を総括した。

人心の荒廃

文化大革命の「勝利」から何年も経たずして、人心も社会秩序も非常時の反動として大きく荒廃した。

日本人技師山本市朗は、当時の職場の風景を見てこう嘆いた。

「新しい工場長、副工場長たちは、造反派のお哥さん^{にい}に比べれば、だいぶましではあつたが、全工場を統率して、この激動する世相の波を自主的に乗り越えていくほどの才能も度胸もなく、ただ、波のままにまを漂い歩き、振り落とされまいともがくだけが精いっぱいであつた」。青年労働者たちは、ぼんやりと仕事場の壁にもたれて、自分たちが好きなことを言い、思うところのことのできた、あの造反派華やかなりし時代を回想して語り合い、その合間合間に、ほんのちよっぴりだけ仕事をした」。⁽¹⁰⁾

梁恒がいた職場も同じであつた。仕事開始時間五分を過ぎても、誰一人として出勤してこないし、やがて集まつた労働者の最初の日課は、約一時間の雑談であつた。その後の着替えにさらに三〇分を要し、仕事が始まるとき、診療所へ出かけるもの、トイレに行くもの、経理課に足を運ぶものと欠員が目立つ。「残つた連中は自分たちの自転車を直したり、友人・親戚のためにカギやら、石炭ストーブやら、鉄の椅子やらを作る。第三のグループは緊急用の大きな水槽の陰で、煙草をかけて博奕をする」。全員が再び一ヵ所に集まるのは、昼食の時であつた。「生産」はこのありさまで、「革命」についても同様であつた。「大慶鉄人」精神の学習会で、「労働者たちは演壇で行われていることをおおっぴらに無視して、グループごとに勝手におしゃべりをしながら、女性は長い下着やセーターを編み、男性はひまわりのタネの殻をはき出してい

た」。「あの文革後半期の数年間の混沌とした無政府状態のなかで、大部分の人々の気分は、もちろん、もううんざりというものであつた」。「たとえ集会で批判を浴びても、労働者達は動搖もしなかつた。どれほど仕事の能率が悪かろうと、：職を失うことはないし、一所懸命働くことが、何もしないでいようが、同じ安月給には変わりないということを、彼らはよく知つていた」。¹⁶

張戎もその時の様子についていう。

「人も党も、やりたい放題のことをしている。ふたたび政治腐敗が蔓延するようになつた。役人は、親類縁者の利益をはかることばかり考えるようになつた。殴られることをおそれて教師は学業成績と関係なく生徒全員に『優』を与え、バスの車掌は運賃を集めようともしなくなつた。公共の利益のために奉仕するお人好しは、あからさまな嘲笑をかつた。毛沢東の『文革』は、党人の規律も民衆の公徳心も、すべて打ちこわしてしまつた」。¹⁶

雷鋒と大寨精神の変質

爆発的に増えていく社会不正の現象を嘆いた毛沢東は、「四人組^{*}」を頼りに再び「雷鋒に学べ」、「農業は大寨に学べ、工業は大慶に学べ」、「批林批孔^{*}」、不正の風潮是正、修正主義教育

路線への「反潮流」（批判）運動など、精神教育、政治運動を相次いで起こしたが、もはや前のような効果はなかつた。

（＊毛の信頼を得ていた文革派の指導者である江青、張春橋、姚文元、王洪文）

（＊＊一九七四年の政治運動。表向きには林彪批判であつたが、その陰で周恩来などの実務派批判を狙いとしていた）

農民の社会主義への献身的精神を呼び起こすため、毛は、大寨の指導者陳永貴を副総理に迎え入れ、宣伝機関を動員して大寨精神を鼓吹する一方、公費を使つて各省・県の農村幹部延べ四七万人に、人口数百の大寨村を見学させた。各地では大寨式の段々畑が作られ、大寨式の採点法も取り入れたが、結局形式上にとどまり、農業の奇跡はついに起らなかつた。

鄭義がいた山西省大坪村では、大寨式の農業の結果は惨めであつた。「段々畑の造築は民を苦しめ財を傷める結果となり、努力の半分も効果はあがらず、しかも仕事量は急上昇しても総収入は基本的に変わらなかつたから、給料はかえつて減つてしまつていて。自留地、自留果樹の制限と『一戸につき豚一匹、羊一頭、鶏一羽、兔一匹（しか飼うことを許されず）』の政策は、：結局農民の生産意欲を極端に低下させ、相変わらず『公有地で怠け、自留地で必死に働く』という状況だつた」。^{〔42〕}

ただ、文革前期に残された傷の痛み、いつ来るか分からぬ政治運動への不安感がなお残っていたため、社会への不満は反抗運動に結びつかず、懷疑の段階を超えることはできなかつた。毛の継続革命の理論のどこかに問題を感じつつも、病因を診断する力はなく、裏口を通じて私益の追求に躍起となりつつも、それを正当化する勇気は持たなかつた。「私」のための営みは陰に隠れて行われ、社会への不満の表出も、サボタージュや不平を漏らす程度に限られていた。表面上では、毛沢東の権威はまだ消えておらず、「人民のために奉仕する」という社会主義イデオロギーも、色合いこそ薄れたが、いぜんとして正統の地位を占め続けた。民衆意識の全面的転換には、なお時間と契機が必要だつたのである。

六 十億民衆の意識転換（一九七七～八五年）

1 転換の準備期

文化大革命の終結

民衆意識転換の契機は一九七六年に訪れた。周恩来の死（一月）、それにちなんだ反「四人組」の天安門事件（四月）、そして毛沢東の死（九月）である。多くの人びとにとって、これらの事件は一つの時代の終結、一つの理想の破滅を意味した。

一月一日、身を切るような寒風の吹く中、一〇〇万人もの北京市民が八宝山火葬場への五キロの沿道に集まり、周恩来総理との最後の別れを惜しんだ。そして四月五日の清明節、人民

英雄記念碑は二〇〇〇個の花輪で埋まり、二〇万の人々は、連日、周の追悼のため天安門広場を訪れた。「某女史」（江青）を始めとする「四人組」への憎悪は、花輪に添えられた無数の詩句から滲んできた。

「人々は総理の苦悩だけでなく社会全体の苦悩を悼んでいた」と樂黛雲はいう。正しくその通りであった。人生も、國も、文化大革命によつてめちやめちやにされた。なのに、四人組は収めどころを知らずにいまわしい「継続革命」を呼び続けた。周の追悼を通じて募つた文革派への不満は、いまや爆発の寸前に達していた。

五日の夜、四人組の画策で、軍隊、武装警察、民兵一万五〇〇〇人が廣場になだれ込み、棍棒で無抵抗の群衆を追い出した。血が廣場を染めた。建国後、政権の手による初めての大規模な民衆弾圧事件である（四・五天安門事件）。

この弾圧事件は多くの人々に衝撃を与えた。「それまで、毛沢東を信じてきた人が、一遍に目覚めたのだ。われわれの世代では、天安門事件以後、毛沢東信者は皆無になつたといつてよい」と文革青年S⁽¹³⁾が語り、樂黛雲も、事件をきっかけに文化大革命そのものを疑うようになつた。

「文革とは何だつたか?」。「最初、私は文革は必要だと信じ、官僚主義を根こそぎにすると

いう毛主席の意図に喝采したが、いま、その皮肉な結果が私に痛烈な一撃を加えた』。「天安門弾圧事件に関するショッキングな詳細が明らかになるにつれ、文革はその目標と正反対の結果に終わつたのだ」という結論が否定できぬものとなつた」と彼女は言う。⁽⁵⁵⁾

九月、建国来二七年間にわたつて権力の頂点に座り、この国をほしいままに支配してきた毛沢東が死去した。一時は、國中が悲痛・慟哭の嵐に包まれたように見えたが、この悲痛の涙には、さまざまな感情が複雑に交じりあつていた。

毛沢東を追悼する葬列のなかで、文革で何もかも失つた梁恒はもう泣けそうもなかつた。『毛主席』は私が最初に口にした名前の一つであつたし、『東方紅』は私が最初に口にした歌であつたが：毛主席が私にもたらしたのは、よりよい生活ではなくて、『革命』という言葉をたくいくつで無意味なものにしてしまうほどに、次から次へと続いた政治運動であつた』。「文化大革命とは結局、人間が浮いたり沈んだりするシーソーゲームか、口と腹がべつの冗談の叩き合いのようなものだつた：はるか雲の上での権力闘争が、われわれ全員の運命を決定した」と彼は顧みている。⁽¹⁶⁾

張戎も、周囲を包む慟哭の嵐の中で、一〇年の体験をもとに「毛沢東思想」の意味について考え込んでいた。

毛沢東思想の本質は、結局大量の階級の敵を製造する「鬭争」の論理にある。「嫉妬や怨恨といった人間の醜悪な本性を：巧みに把握し、自分の目的に合わせて利用する」ものであり、無知の社会、憎しみ合う社会を作るものであると、彼女は結論した。⁽⁴⁶⁾

「反革命」とされた父を裏切つてから良心の呵責に苛まれ続けた小兵も、この時泣かなかつた。共産主義制度に対する彼女の信念はすでに崩れさせていた。「生き残った私にとつては、文化大革命はよいことでした。私たちはいろいろ学んだのです。私の心の中には毛沢東のような神はありませんでした」と彼女はつぶやいた。⁽³¹⁾

このように、一九七六年に発生した一連の事件を契機に、疑念を抱いてきた多くの人々は、自分の頭で文化大革命の意味を考えるようになり、そしてその不満の向け所を次第に文革派の「四人組」に集中させていった。

一方、情報が乏しかつた地方では、中央で行われた権力闘争の内幕が分からず、党中央、毛沢東への忠誠を引き続き示した人はなお数多くいたが、文化大革命のような悪夢だけは、続けてほしくないという思いは人々に共通していた。この民衆の願望に応えるかのように、一〇月、「四人組」が逮捕され、一〇年に及ぶ文化大革命はついに幕を閉じたのであつた。

文化大革命の終息は、権力闘争の角度からみれば、反旗を翻した總理華國鋒個人の決断によ



四人組逮捕後、縛り首にされた四人組の人形（1976）

る、偶然の出来事のように見えるが、民衆の意志から見た場合、遅かれ早かれ訪れる必然的な結末であった。

新価値観の確立

文革後まもなく、天安門事件で失脚した実務派指導者鄧小平が復権し、文革派から実務派への権力の委譲が実現された。鄧は幹部の復権、冤罪の是正、入学試験制度の復活、生産秩序の整頓など、文革後遺症の治療を積極的に進める一方、工業、農業、国防、科学技術の現代化というスローガンの下で、経済体制改革の道を模索し始めた。鄧の復権と一連の新政策は、階級闘争、「継続革命」に厭きた人々に新たな希望を与えたのである。この時期、鄧のかかげる「四つの近代化」に対し物質面だけの近代化の不十分さを指摘し、「第五の近代化」（自由、民主）の確立をめざす青年、知識人も現れてきたが、大部分の民衆は、鄧の路線に満足していた。激動の一〇年後で、国の富強、生活の改善、教育文化の充実など物質的文明への欲求は、抽象的な権利意識よりはるかに大きかつたといえる。

文革の悪夢から目が覚めてから、人々は久々の解放感を味わった。二七年前の「解放」「翻身」の時と同じように。当時、素朴な民衆はその功績を毛沢東、共産党に帰して革命に協力し

たが、いま、毛の代わりに鄧小平を選んで感謝を捧げた。

死なずに生き抜いたことだけで満足し、これまでの恨みを水に流して悲劇の再現がないように祈り続ける人。失った時間を取り戻そうとするかのように、わが身を顧みずひたすら鄧が掲げた「四つの近代化」の目標に向かつて余生を捧げる人。自分の冤罪の是正について共産党に恩義を感じ、文化大革命を終結させた鄧小平に感謝する人。あるいは長年の迫害を受けたにもかかわらず、あらたに共産党入党申請を提出した人々。

こうした寛容な満足派には、文革で酷い目に遭わされた中堅層の幹部、あるいは古参共産党員、中年のインテリが多かった。好きか嫌いかは別として、半生を費やしてひたむきに目指した革命、共産主義の信仰と、君主の存在に慣れた臣民の生き方を、すぐには放棄できなかつたのだろう。

一方、彼らの示した新たな忠誠、感謝にも、時代にふさわしい微妙な変化が現れた。忠誠の対象は、毛沢東、共産党から国家、社会へと変化し、奉仕と貢献の仕方にも、「滅私」から「自己」の確立への転換が見られた。

文化大革命は「巨大なペテンである」と悟った某元祖紅衛兵は、文革後新たな人生をめざして知識を貪り、「国家のために何かしたい」と精力的に活動し始めた。彼を奮起させたのは、

もはや革命ではなく、文革によつて抹殺され、無視された「自己の存在」を確認しようとする意志であった。

無能を装い、自分の存在をなくすことによってようやく生き延びたある技師も、過去を振り返り、抑圧、虚無の中で漂う自己喪失のつらさを噛みしめ、国への貢献を通じて、再び失われることのない自己の確立をめざそうと決意したのであつた。

種々の迫害を受け、一九八〇年やつと北京に戻った北京大学地理学系主任（学部長）の候仁之の場合、帰任してからの最初の行動は、入党の申請であり、右派のレッテルを二〇年以上背負つた樂黛雲も、名譽回復後、苦悩の末「入党して、もう一度革命の目標に貢献する」道を選んだ。彼らは確かに文革後も共産党への忠誠を示したが、しかし、この「党」はもはや共産主義革命の組織ではなく、近代化建設を指導する機関（国家）として、理解されたのであつた。また、復権後のよい待遇、地位に満足し、そのため共産党に感謝するものも少なくなかつた。

冤罪で監獄・監獄病院で三〇年以上過ごした某氏は、出獄後、鄧小平、共産党に感謝した。自分を囚人の身分から救い出したことと、「引退した革命の功労者と同等の年金と特典」が与えられたことに対する感謝であった。³⁵⁾

文革後の復権の一〇年を「まことに向上の時期」と評価した楊威理も同じである。完全な復権と党指導部への昇進、教授資格の賦与、海外訪問の機会、そして電話付きの五LDKの官舎など、庶民にはとても考えられない格別の待遇は、彼の欲望を満たしたのであった。

このように、文革後共産党に感謝し、忠誠を示した復権者の中には、もはや五〇年代のような、革命、共産主義に献身する純粹さが見られない。そこにあるのは、社会、国家、人類に貢献したいという思いか、特別に与えられた地位、年金、特典（特權）に対する哀れな自己満足であつた。

意識転換の政治的背景

一方、復権者が忠誠を示したのと異なり、文革の呪縛から解放された大多数の民衆の場合、その一時的な満足感が結局忠誠心に結実されず、むしろ反対の方向に走つていった。かつて献身を誓つた共産主義、革命の理想、党、国家などをきれいに棄て、抑圧されてきた「私」の領分の再建に全力を投じるようになつた。七〇年代後半、若者の間に流行した出世目的の独学熱、大学受験熱、奨励金、昇級を目指した業務上の研鑽。生活の解放、西洋化を象徴した流行歌・ダンス・ファンションブーム。および住宅分配戦争、「八大件」（電気製品、耐久消費財）

への憧れ、手作り家具への熱中に見られる「家庭生活近代化」への執着には、その一端が窺える。また、「北京の春」、「民主の壁」のような、民主、自由を求める若者の政治上の反体制運動も、水面下で現れた。

文革後の「公」意識の後退と「私」意識の復権と共に、民衆の価値観・意識の大転換が始まろうとしていた。

この意識転換の政治・経済的環境を無意識のうちに用意してくれたのは、一九七八年以降の文化大革命否定という、ポスト毛沢東政権の一連の政治政策であり、また資本主義の市場経済原則を導入した、「改革・開放」の経済政策であつた。

文革後復権した鄧小平はまず、華国鋒首相がとなえた「二つのすべて」の主張^{*}を否定して毛のカリスマ性を追い払い、続いて「真理基準」の論争（真理は実践にあるか、教条にあるか）を起こし、文化大革命否定の理論準備を進めた。一方鄧は失脚幹部の復権を積極的に推進し、一九七七年後半から二九〇万人にのぼる被害者の復権、名誉回復を行い、七八年にはさらに、二一年前の反右派運動の決定を覆し、右派分子のレッテルすべてを撤回した。一九七八年末の共産党十一期三中全会において、文化大革命の中心理論だった「階級闘争」と「継続革命論」が否定され、同十一期六中全会（八一年）にいたると、ついに文化大革命と毛沢東の既成権威

も否定する「歴史決議」^{**}が採択されるにいたつた。

(＊＊毛の「決定」と「指示」のすべては絶対に正しい、すべては守られなければならない、という主張)

(＊＊六月に採択。正確には「建国以来の党の若干の歴史問題についての決議」。文革、毛指導の誤りを指摘した)

政治面の是正と同時に経済面の改革も進められた。十一期三中全会で採択された「改革・開放」政策の下で、資本主義の市場経済、価値法則が導入され、行き詰まつた社会主義経済は基礎から搖さぶられる結果となつた。

毛の共産主義の「雷鋒」、「大寨」精神にとつて代わつたのは、私欲を刺激する鄧の「奨励金制」「責任制」であり、私営企業の許可と一部の地域と一部の人々を「先に富ます」政策であった。鄧の政策は、「大鍋飯」（共産主義）に慣れた人々にかつてない「人間の可能性」を示し、惰性に浸りきつた既得権の享受者たちに不安を与える反面、社会の下層に押し込められた弱者や事業を企てる野心家に希望と光明をもたらした。農村では、大採算制の人民公社が廃止され、責任田制度が普及し、作柄への統制管理も緩和された。自由市場、個人経営など私的経済に対する取り締まりが廃除され、「発財致富」（財産をふやして富豪になる）という小生産者

の伝統意識が三〇年ぶりに、やつと正統の地位に返り咲いた。

鄧小平の「改革」は、あらゆる階層に実益を与え、崩壊寸前の社会主義経済を奇跡的に蘇生させた反面、「信念の危機」に象徴される民衆意識の大転換も促進した。社会主義中国を救うという革命家鄧小平自身の願望とは裏腹に、アンチ社会主義の性質を持つ彼の「改革」は、社会主義のイデオロギーを根本から動搖させる諸刃の剣でもあつたのである。

2 大転換の訪れ

文化大革命終結後から始まつた民衆の意識転換は、「改革・開放」の波に乗つて雪崩のように連鎖反応を起こして進行し、一九八〇年前後、青年の「理想論争」によつて浮き彫りにされた「信念の危機」の出現と共に、ピークに達した。

意識の転換に伴う八〇年代前半の社会現象を見てみると、①向学心、進取心の向上、②責任制生産体制への改革による労働意欲の向上、③多元的文化への理解、西洋文化・物質文明の崇

抨、④思想教育への拒否反応、共産党组织離れの現象、⑤特權、贈収賄など腐敗現象の横行、
⑥抨金主義、享樂主義思想の蔓延、⑦極端な利己主義の発生と公共道德、商業道德の低下、など
が指摘される。

以下では、いくつか代表性のある例を挙げて、この民衆意識転換の実体に迫ってみよう。

潘曉の手紙にみる「信念の危機」

マルクス主義、社会主義、共産主義の理想に対する懷疑と不信は、改革開放の方針が確定された共産党の十一期三中全会以降普遍的に発生し、党の宣伝筋も、一九八〇年一月一三日の『文匯報』でそれを認めた。「…学校では政治理論科は人気がない。機關や工場での政治理論學習は時間つぶしになつていて、一部の人々はマルクス・レーニン主義に対する信念が動搖しており、信用せず、學習しない。これがいわゆる『信念の危機』である」（郭羅基「いわゆる『信念の危機』を評す」）。

思想教育の担当筋はこの「一部の人々」に蔓延している危機的現象を克服するため、同年五月から「潘曉の投書」（『中国青年』一九八〇年五月号所載）をめぐる「理想論争」を開かせ、青年の思想教育を図った。しかし、図らずも批判の対象に設定した潘曉に対する支持・同

情の声が殺到し、半年にわたる論争の末、逆に「信念の危機」を表面化させ、加速度させる結果となつた。

潘曉の投書はいったいどんな内容なのか見てみよう。

革命の人生、理想に幻滅を感じた潘曉は、二三歳の女性労働者である。かつて革命の教育に心酔し、「人は他人に素晴らしい生活をさせるために生きる」、「人民の為なら、命を捧げても惜しくない」とひたむきに信じていた。文革中彼女は、家宅捜査、暴力、農村下放などを経験し、さらにその後、学業の挫折、友人の裏切り、党组织からの不信任など醜い社会現実に接して「革命」の人生信条を懷疑するようになつた。そして孤独な苦慮、思索、読書のすえ、「人は誰も利己的だ」という「人間の本能」論を導き出す。

「人間は結局、人間である。だれも人間自体の規律から逃れることはできない。いつたん利害がからむと、だれもが人間の本能に従つて行動するのであって、日ごろ口にしている崇高な道徳や信念に従つた行動をとる人はいなくなる。人はだれも利己的であり、自分を忘れるほど立派な人はいない。」

こうして人間の本性を見据えた潘曉は、「人は他人に素晴らしい生活をさせるために生きる」という毛が教えた、共産主義的「雷锋精神」の呪縛から脱出し、次のような認識に到達する。

「生存にしろ創造にしろ、いかなる人にとっても主觀（本能）は自己のためであり、客觀（思想教育の要請）は他人のためである。…人間一人一人が力を尽くし、自己の存在価値を高めさえすれば、人類社会全体が發展するのは必然的だ」^{〔13〕}。

この投書は、意識の転換を経験している青年の思想の断面を浮き彫りにし、醜い社会現実と美しい共産主義の理想とのギャップに対する疑問を率直にぶちまけていた。潘曉の訴えは、自我的目覚め（社会現実）と、この目覚めを非とする思想教育（イデオロギー）の間で彷徨する多くの若者の苦悩を代弁しており、「二重性格の人間」（表向きは革命をとなえながら、本心では自己の利益を考えている）を製造し続けようとする共産党の思想政策に対する大胆な抗議であった。

革命の人生を疑うというタブーを犯した潘曉の投書は大きな社会的反響を呼び、半年ほどの間に五万七〇〇〇通の投書が『中国青年報』に殺到した。その大部分は、潘曉に対する支持と同情の声である。「心に閉じこめた言えないことを、潘曉が代弁してくれたのだ」とある解放軍の兵士がいう。結局当局は、このような人生の意義をめぐる論争の展開は、ますます党や社会主義への不信を高めるものと判断し、一九八一年の第二号内部通達で、論争を中止させた、と伝えられている。

潘曉と同じような体験をもう少し見てみよう。

一九三八年生まれの戴厚英は、六〇年に華東師範大学を卒業して御用学問機関で文芸理論の研究に従事した。反右派闘争の時期本人が右傾、父は右派とされたにもかかわらず、共産党を愛し、熱狂的な共産主義者だった。文革の時「造反」に活躍した彼女は、文革の終結とともに自己崩壊に陥る。一九八〇年告白小説『ああ、人間』を発表して、人道主義論争を呼び起す。同作品は、自分をモデルにしており、革命の利益のために愛する先生、愛する恋人を裏切った内心の苦渋を告白するものであった。「後記」において、戴は次のように飾りのない心情を打ちあけた。

「わたしが…小説の中で吐きだしたいことは、まさにわたしが以前に抑え、改めることに努めた『人間らしさ』なのです。…わたしは…正常な感覚器官をもつ普通の人間です。だから、わたしの見たのは運命です。祖国の運命、人民の運命、身内の人間とわたし自身の運命です。…人びとのからだの血痕、顔の涙のあとを見ることができました。…わたしはよく胸のうちで自分にたずねました。われわれの闘争は、いきすぎではないのか。われわれは好い人に無実の罪をさせてはいいのか。中国の国土で、たえず、休みなく、『階級闘争』と『路線闘争』の二つをあおりたてる必要があるのか。…ついにわたしにはわかりました。わたしはずつと、喜劇

の形式で悲劇の役を演じていたのです。思想の自由を奪いとられているのに、自分では最も自由だと思っていた人間でした。精神の首かせを美しい首飾りだと思って見せびらかしていた人間でした⁽²⁴⁾」。

潘曉が個人主義に目覚めたように、戴の場合、意識の転換によつて、共産党の道具たる機械人間、信仰人間と決別し、血も涙もある本来の人間性を見つけたのであつた。

このような、潘曉、戴厚英が示した積極的な個人主義、人道主義の方向は、しかし、四つの基本原則^{*}を堅持しようとする当局によつて認められず、思想教育においては依然として「雷锋精神」、「革命人生」が喧伝されていた。進むべき方向を失つた多くの人々は、戸惑いと内心の苦悩と闘いながら五里霧中、各々の道を摸索していた。

(*社会主義の道、プロレタリア独裁、共産黨の指導、マルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想を堅持。一九七九年三月鄧が打ち出した原則)

二三歳の女性蕭惠英は、革命の理想と社会の現実のぶつかり合いの中で「革命的人格」（革命の理想とされる人間像）に対する懷疑が深まり、失恋、会社からの除名処分を経て、ついに精神的落伍者と自認するようになつた。「…生きるための欲望は、美化された人格（理想的な人間像）とはつねに正反対なものなのね。人間はみんな怪物。…人格と人間の本性は、まつた

く逆をむいたものなのよ」。「十億の人間のうち、いったい何人が、革命の大事業のために生きているのかしら」。喧伝された革命の「人格」の虚妄を見破った彼女は、しかし、人間らしい路を開拓する勇気はなく、極端な政治不信、人間不信に陥り、苦悩、孤独の中でもがき続ける。

新華書店につとめた小劉も同じような消極的タイプである。政治への不信、理想と現実のギャップを感じつつも、決して反抗しようとなかった。「意見をいつたってなになになる？ いい結末はありやしねえさ。一回でしやばつたら一生がおしまい。子孫まで巻き添えを食っちゃうんだぜ：」。彼が選んだのは、「鉄茶わん」（仕事）を守るための、自分の主張を曲げ、上の指示、政治の流れに身を任せた安全な渡世法であつた。

一九歳の「待業」（失業）青年羅斌は、改革のお陰で下放の運命から逃れたが、仕事が見つからずやけになつてしまふ。才能、コネといつた頼りはなく、努力もしたがらない。「この世界で、いつたい何人が自分の力に頼つてゐるのかい。そろいもそろつてコネで通つてゐるじやないか。：『一は権力、二は金、三は医者、四は運ちゃん、そのあと車掌、店員、人事幹部、不動産管理所、台灣の親戚が続く』。聞いたことがあるかい？ これは羽振りの利く連中なんだ。オレ？ 永遠にうだつのあがらない小僧なんだ』。「いつもこう思う、オレは瓶の中の蠅なん

だ。光が見えて前途はない。また栓を開けて自分を出すこともできない……」。羅の妄想は、世界戦争を起こすことである。そこで、英雄になれば⁽²⁵⁾……。羅の悲劇は、社会を否定すると同時に、自分自身も否定してしまつたことにあろう。

二六歳の馮大興は、北京外国语大学のエリート学生だった。文革後四人組の摘發で、自分はだまされていた、精神の支柱が崩れ、理想の冰山も解けてしまつた、と感じた。そしてその反動として「ただ自分のことだけ、自分の社会的地位を守ることだけを考えればよい。人生は戦いだ。目的を達成するには手段は選ばない」と考えるようになつた。共産党にも、現行制度にも、四つの近代化にも希望が見つからない馮は、結局金銭の虜になり、窃盜殺人罪で死刑の判決が言い渡される。⁽¹⁴⁾

「信念の危機」の現象は、共産主義の理想と「公」を中心とする旧価値観の放棄を意味するが、「四つの基本原則」に阻まれ、各々の新価値観の樹立過程は必ずしも順調とはいえないなかつた。信念の危機とともに、人間への不信、社会への不信、極端な利己主義への堕落など、新たな問題が生まれてきたのである。

政治教育への不信

潘曉の投書をめぐる「理想論争」が起こった後、『中国青年』雑誌社の記者は各地に出かけ青年の思想を調査し、報告書にまとめた。この「内部文献」扱いの報告書には、マルクス主義、共産党への不信、理想を喪失した各地の青年の苦惱が克明に記されていた。その断片を取り上げてみてみよう。

共産主義に対しても――

「共産主義はいわば釈迦牟尼仏を信仰するのと同じで、一種の精神的よりどころにすぎない」。

「共産主義実現のため奮闘努力するなんて、数百年、数千年後の人のためにやるようなものだ。全然興味ないね」。

「…経済建設をやるには、マルクス・レーニンはなくともよい。資本主義国はマルクス・レーニン主義を指導思想にしなかつたが、経済発展の速度は逆に速かつたではないか」。

「…資本主義がこれまで世界の文明を築き、いまなお活力を持つていてのに対し、社会主義は人類にどんな文明をもたらし、物質面でも人々に何か恩恵を施しただろうか」（以上は昆明市、重慶市の青年）。

共産党と思想教育に対して——

「現実の生活において、私が知っている幹部党員の中で、心底から共産主義のために奮闘し、生涯を捧げようとしている人は一人もない」（ある解放軍の兵士）。

「政治経済学は大ばらを弁じるのみ。哲学はそらごと、党史は作り話、科学的社会主义はでたらめばかりだ。……信念を語るものに感情はなく、主義を語るものには自由がない」（瀋陽市的学生）。

「へエー、君つたらまだこんなくだらないもの（入党申請）をかこうつてのかい。だれ一人、党なんて信じちやいないつてのに！」。

「なに共産党だい？ 国民党と同じぢやないか。鳩山（反日京劇『紅燈記』に出てくる悪役の日本軍将校）のいう通りさ。自らの利益を計らない者は天罰を受ける……」（瀋陽師範学院の学生^{〔13〕}）。

こうした深刻な政治不信の進行に歯止めをかけようと、政府当局が再び「雷鋒精神」を持ち出し、また一九八一年頃から「五講四美」の思想・道徳教育運動を大々的に展開していった。しかし、これに対する青年たちの反応は冷ややかだった。「雷鋒はもう古い」。「あれは極左ではないのか」。「雷鋒には個性が感じられない」（『中国青年報』八一年三月五日）。

(*教養、礼儀、衛生、秩序、道徳を尊重し、心、言葉、行為、環境を美化する思想教育運動)

若い兵士周曙は、「雷鋒精神」の実践としてバスの中で妊婦に座席を譲ったが、心の中では納得できなかつた。「まったく…なんで赤ん坊を生まなくちゃいけないんだ。まだわが国の人口が足りないと思つてゐるのか?」⁽²⁵⁾ 彼にとつて、席を譲る行為は自分の立場からやらざるを得ないお芝居であり、世の中の常識に反する行為であつた。「雷鋒に学ぶことは戦場の英雄になることよりも難しい」と彼は言うが、「雷鋒精神」と生身の人間の意識がいかにかけ離れているかが窺える。

六〇年代の場合、雷鋒に学び、「模範」や「先進」(共産黨の尖兵)になることが名譽とされたが、意識転換の下で嘲笑の対象に変わる。

湖北省の女性労働者郭秀君は、献身的な働きぶりで四年連続「労働模範」に選ばれた。しかし、彼女を待ち受けていたのは、まわりの冷たい目である。「要するに、党籍を手に入れたくて一生懸命やつてんでしょ」、「動機が不純ね」と陰口をたたかれたり、仲間のノルマの完成に手を貸そようとしたら「オレの顔にドロを塗るつもりか。助けを求めた覚えはない」と拒否されたりした。「こんな目に遭うのも、要するに労働模範に選ばれたから。もうたくさん」。結局、彼女は村八分のいじめに耐えられず、自ら「労働模範」の返上を決意する。⁽¹⁴⁾

理想教育の無効、「雷鋒精神」への懷疑の理由には、被教育者の不信だけではなく、教育者の不忠もあった。ある政治科目の教員（匿名）の告白を見よう。

「私は多くの同僚と同じように今の仕事に悩んでいる。中には『われわれのようなマルクス・レーニン主義を教えるものの前途は真っ暗だ』とズバリいう人もいる」。若者には共産党へ入党を希望するものがごく僅かで、：党員になつたものも、全身全靈、党のために尽くすと思う人はほとんどいない。「もし無記名の国民投票を行なうなら、：マルクス、共産主義を信じるものは数パーセントもいないと思う」。「われわれのような政治教員が信じないなら、大衆が信じるはずがあるだろうか？：学生たちは哲学原理を教える私を、『偽薬の売人』と呼ぶ。さらに、『先生、ただ入試の政治試験に合格するコツさえ教えてくれればいいんだよ』。工場で若者たちに義務労働について説諭したら、彼らは『まだおれたちがロビンソンの手下フライデー金曜日』のようにレーニンにしたがつて土曜日を過ごす（義務労働をする）と思うのか？冗談じやねえ。共産主義はオレたちの孫の孫の時代のこと（とうてい実現できないの意）だぜ』といふ。若者に『理想は』と聞いたら、『出国』、『万元戸』（年収一万元）とずばりいう。「わたしは共産主義の『人生觀』を講義するが、話しているうちに自分でも訳が分からなくなる。私はけつして『私の理想は共産主義のために一生を捧げることだ』といわぬ。そう思つていなか

らさ」。⁽²⁵⁾ こう話した後、この教員はまた「共産主義は理想であり、現実でもある」という講義の準備に取りかかったそうである。

「党」の新価値

一方、大衆の冷視をよそに、「信念の危機」の時、党の組織に進んで接近したりする者も確かにいた。ただそれは、入党誓約書に書かれた「共産主義のために一身を捧げる」という気持ちからでは決してなく、むしろ反対に、自分の出世・将来という私欲の充足手段として、党の組織を利用したのである。

一七歳の高校生吳麗瑤の場合、共産主義青年団にはいった動機は、大学入試上での便宜であった。

「入団できるかどうかは、青年の価値を判断する基準だわ。：大学の選考では、団員かどうか、『三好学生』（成績・品行・健康の優れた学生）かどうかで生徒の善し悪しを判定し、入試でもし同じ点数をとつたら、団員の方を先に採るにきまっているわ：。自分の将来に関わることだから、学校ではみんな争つて入団するのよ」。

若手の大学教師小陳は、党のイメージがた落ちの大学三年の時、勧誘されるまま入党し

た。「すぐくなりたかったわけではない」が、とにかく将来を考えて、「拒否することなんかできませんでした」。「…その理由はとても実用的なものです。一つには、将来、学校当局が職を分配しますが、それはその人間の学校の指導者との個人的関係、それから政治態度によつて決まります。もし『政治的先進』でなければ、悪い職を与えられる…」。小陳の場合、党員であるお陰でその後母校の政治指導員になるが、自分自身信じていないう説教の仕事に消極的であった。「誰ももう共産主義を信じていませんよ。…大聴衆に向かつて話す場合以外は⁽³⁹⁾…」。

文革に活躍し、献身的な仕事ぶりで高い地位に上り詰めた木蘭は、鄧小平の時代になるとすっかり消沈してしまった。「あまりに多くの人々が、自分たちの家族に裏口からの特権を取つてやるために党に入つてきてる」眞実を見て、嫌気がさした。自分の夫もその一人であった。「党員になればいいことがいっぱいあるんです。昇進が早いし、興味ある上品な仕事につかせてもらえるし、外国へ行けるチャンスも増えるし」とずけずけいう。しかし、「組織」の生活に厭きた木蘭は、もはやこの世界に興味を失う。彼女が密かに求めたのは、党組織からの脱退であり、失つた「人間の感情」と「生活」を味わうことであつた。

党員楊明の脱党手記を見よう。

楊は「信念の危機」の年に二三歳。文革中、農村下放の経験もあつた。下放中の一九七五年、彼は純真な気持ちで入党を果たした。申請書を提出するため、一晩かけて四〇キロの山道を歩き、支部書記を訪れたこともあつた。文革が終わり、「四人組」¹⁴が摘発されて極左狩りが始まるとき、彼の党への忠誠は、逆に密告材料に利用され、危うく処罰されるところだつた。都市に戻つて、幹部の腐敗を目撃した楊は、嫌気がさし次第に党の組織活動から遠ざかる。大学進学後、彼の「落後」が批判され、おまけに個人の趣味、生活の細部まで攻撃され、自己批判を迫られた。楊は怒つた。「…五〇年代の党員は党の道具になることで満足したかも知れない。しかし、ボクは自分の生活に党が干渉してほしくない。青年党員といつても、しよせんは若者なのだ。党は人生をあたえてくれやしない。それは自分で探し求めるほかはない」。楊の最後の抗議は党からの脱退であつた。

新たに入党したもの、党から出たもの、動機はそれぞれだが、「私」を軸にした行為である点は、同じであつた。

特権の商品化、大衆化

一九八〇年前後、経済改革は一応軌道に乗つたものの、金銭の力がまだ完全に確立していな

かつたため、金銭で買えない「特権」が全盛期を迎える、ポスト文革時代のシンボルとなつた。七〇年代にあらわれた「走後門」（コネ）という言葉は八〇年代には「関係学」（コネの学問）という言葉へと進化し、特権の大衆化現象と特権の商品化現象という二つの大きな特徴が現れた。大衆化によつて特権は少數者のものから大衆のものとなり、あらゆる職業、職種、社会の隅々までに浸透した。さらに商品のように交換することによつて、職業、職種間のつながりも強め、独特なコネ社会の網の目を作り上げていく。

その実態を見てみよう。

特権の先端をリードするのは、相変わらず文字通りの「特権」階級であつた。超高幹と呼ばれる特権階級の生活について、当時北京駐在の記者だった船橋洋一は次のように描写している。

彼らの「多くは赤塗りの大きな門を構え、中庭のある『四合院』と呼ばれる一軒建ての平屋に住んでいた。：乗用車を二台も所有し、車庫を備えている家もあつた。：四合院の正門わきの一角には、運転手、コック、お手伝いが住んでおり、裏の方には暖房用の大きなボイラーハウスがあつた。家族それに部屋が与えられ、シャワーつきの風呂、水洗トイレがあつた。：部屋ごとに電話を引いていた家もあつた。：春には済南のリンゴ、夏は広東の荔枝、秋は上海の

カニ…といつもシユンが食卓を飾った。…土曜日の夜は自宅で香港映画の映写会を開く。…午前一時ころ、電話したら、マージヤンのジヤラジヤラする音が聞こえた…。

このような超高幹と呼ばれる特権階層は、国民に向かつて「共産主義の理想」を説く反面、密かに自分の子女を「邪惡」な資本主義国に留学させていった。「鄧小平、陳雲、薄一波、方毅、黃華といった現職首脳の子女や劉少奇の遺児が米国に留学、軍隊からも李德生瀋陽軍区司令官の娘がフランスに留学した…」。「米国で勉強している一万人を超える留学生の多くは高級幹部の子女であるといわれている」。これらは、すべて八〇年代初頭の話で、「留学」という言葉さえ、庶民には縁の遠い時代の出来事だった。

こうした超高幹の特権層はさらに子女の婚姻を通じて、閨閣を固めて行く。余秋里副首相（娘）と黃華外交部長（息子）、楊成武福州軍区司令官（娘）と張廷發空軍司令官（息子）、耿飄國防部長（娘）と方毅副首相（息子）、安子文中央委員（娘）と胡耀邦党主席（息子）…といつたように。¹⁴⁾

一九七九年九月号の『人民文学』が暴露した巨額な不正蓄財事件の当事者王守信は、共産黨の書記であり、同年作家の葉文福が作品『將軍よ、そうしてはならない』で取り上げた、幼稚園を取り壊して豪邸を造営した將軍も、実在の人物をモデルにしたものであった。八一年、高

級料理店豊澤園でのただ食いで告発されたのも、現役の商業部長（大臣）の王墨であつた。そのほか、四人組と関わつて失脚した汪東興元副主席の五〇〇万元の豪邸、林彪元副主席の北戴河の豪華な別荘の存在なども、失脚して初めてその事実が暴露された。以上のような事件は、マスコミに取り上げられて初めて知られるようになつたが、昔から「大夫に刑罰を適用しない」という封建的しきたりがあつた中国では、こうした露見はむしろ例外で、ほんの氷山の一角にすぎないであろう。

以上のような幹部の特権に対抗して、庶民も各自の職掌を利用し、自分のための「特権」世界を構築していった。

運転手は公用車流用の特権。店員は配給物資横流しの特権。警察は戸籍管理の特権。電力、水道会社は電気、水道の配給権、といったように。

「人民日報には『道すがら結婚式に向かう公用車が列をなしているのを見かけた。これらの車の車両番号は次の通りです』と十四台の番号を書き添えた投書が載つた。新聞社で調べたところ、車を使つた十四の単位（組織や機関）のうち使用代を払つた二つを除いてあとはすべて流用組⁽¹⁴⁾」。

肉売りの店員史浴宇の場合、配給カードのチェック、肉の質、部位の配分が彼女の特権であ

つた。

「わたしの権限は相当なものだよ。肉を渡してからほんとうに配給カードに記入すると思うの？ 後ろに並んでる連中が見てても平気よ‥」。「ブタ肉の切り売りも、わたしの包丁次第。²⁵ 左にいれれば全部赤味の肉、右に入れれば全部あぶら身よ。お客様が目をむいたつてどうにもならない」。

所管権限の私用は、肉屋さんは肉を食うといったように、受益の幅が狭い。生活の全体を潤わせるため、自分の所管の権限を他の権限と取引しようと、特権の交換現象が現れた。

公用車の公用組にしろ、店員の更浴室にしろ誰もが期待したのは、自分の特権で作ったコネクションからの見返りであつた。

船橋洋一記者は、特権の交換現象について次のように書く。

「売場に出す前にお目当てのものをわざにかけておいてもらつたり、入荷した時の購買者リストの一番上に自分を書くよう頼んでおく。その代わりに映画、展覧会、催し物のキップを回してもよいし、医者なら、『全治一週間』というニセの診断書を作つてやつてもよい。軍人なら、PXで買ったタバコ、砂糖、酒を回してやればよい。軍幹部の中には、自分の出身地の有力者にこうして買い入れた希少品をつけ届けするものも多い。退役、転業後は、『よろしく』

というわけである^[14]。

以上のような特権は、間接的には金銭的価値もある。五〇元の料理を二〇元につけかえたり、タクシーなら数十元かかるところも、公用車なら無料で使える。損をしたのは「単位」、得をしたのは個人である。「人民のために奉仕する」という建前の下で、みんなこのように、社会主義の国家から与えられた職種の権限を活用して社会主義を食いつぶしていたのである。

社会風紀の紊乱

旧い革命時代の価値観は民衆の意識転換によつて短時間に崩れさつてしまつたが、一方新しい価値観の確立は困難をきわめた。思想教育の担当者は、引き続き共産主義精神教育によつて、大衆の思想意識の再建をはからうとし、自由主義、個人主義の意識を受け入れようとしなかつたため、意識転換は混沌状態の中に入つた。欲望の本能に委せた放任状態の下で、いろんな社会の歪みが生じてくる。

一九八一年と一九八三年に『人民日報』の「読者来信」欄によせられた記事から、こうした社会風紀紊乱の一端が窺える。

品質検査団への宴会攻勢、救済物資の着服、芝居のただ見、高級料理店でのただ食い、公用

車の流用、物資の横流し、コネの横行、贈収賄などにみる幹部の腐敗。

または輸送貨物の乱暴な取り扱い、輸送中の窃盗、車掌の暴力的検札、バス運転手の悪いマナーに見るサービスモラルの低下。

あるいは乗車、乗船切符のダフ屋行為、品不足のための便乗値上げ、裏口取引、抱き合わせ販売、詐欺、インチキ、粗悪品、欠陥品、量不足に見る商業モラルの荒廃、など。

掲載されたのは全投書の一〇〇〇分の一から三、しかも共産党機関誌で「プロパガンダ」の役割を担う『人民日報』の取捨選択によるものだから、資料の編集者が指摘するように「とりあげられた事項ないし問題は、…少なくともそれらが現在の中国にとつてのネガティブな普遍的事例、もしくはとり急ぎ解決を要する重要な典型的問題である」と認識されなければならぬ。

山東省濰坊地区のギヤ工場の例を見てみよう。

改革下、採算制度が導入されたため、経営不振に陥ったこの工場は閉鎖される羽目となつた。配転を命ぜられた労働者の不満は高まり、バリケードを作つて抵抗し、また職場にあつたもので価値のありそうなものはすべて私物化して持ち去つた。「…個人が保管していた工場の工具類は、基本的にだれ一人工場に返還せず、懐に入れた。また同工場改築時にはずした窓ガ

ラスはすべて労働者が家に持ち帰り、工場の公用自転車三〇両も、何の手続きも経ずに、元使
用していた労働者が持ち去った。このほか、工場施設内の銅管、ゴムホース、電気器具、テー
ブルガラスがはずされ、テレビの真空管やスピーカーまでが持ち去られた⁽¹³⁾。

生産意欲を刺激するため、国営企業の中にも奨励金制度が導入されたが、平均主義意識の下
でうまく行かず、たくさんの所で平均主義的持ち回り方式を採用し、なるべく全員平等にボーナスを分配しようとした。

少しばかり儲けのあつた個人経営者も、市場を取り締まる警察、居民委員会（隣組）の管理
者、原材料の入手先などから利益の分けまえを強要される。この時期「紅眼病」（嫉妬病）と
いう流行語が出現したが、この現象は「大鍋の飯」という平均主義意識の、改革に対する強い
抵抗の現れであった。

意識転換の下で、人々は国家への奉仕の義務から解放されたが、逆に国家から与えられる権
利（福祉）をしつかり守ろうとしていた。数十年をかけて培われた「大鍋の飯」の意識は、決
して一日二日で消滅するものではなかつた。

「三五年にわたる社会主義建設の結果、自分の都合を考える人が多くなり、国家の富強を考
える人が少なくなつた。：社会主義の道自体に間違いはないが、問題は社会主義の『大鍋の

飯』⁽²⁵⁾が、人々を怠けさせ、するくさせたことにある。これは、二十数年間国営企業の責任者を務めた、ある古参幹部の総括であつた。

海外脱出ブーム

意識転換下のもう一つの現象は、現代物質文明に対する若者の憧れである。

開放政策の下で外国製のラジカセ、カラーテレビ、冷蔵庫、自動車などといった文明の利器が次々と大陸の市場に入ってきた。鎖国下の宣伝で知らされた貧困、腐敗とは全く違う、豊かな資本主義のイメージは、若者の目に焼き付き、心を躍らせた。

香港ルートから持ち込まれた電気製品は憧れの的であるが、月給の数十倍もする高価な品なので、普通の人はなかなか手が出せない。せめて手の届く範囲で西洋化を体験しようと、若者はパンタロンに長髪姿、ラベル付き（国産品でない証）のサングラスをかけ、フィルター付きの煙草をくわえることで、西洋の「自由」を味わつた。歌の世界では、八〇年代の初めから香港・台湾の流行歌が爆発的に流行し、市場のほとんどを独占した。北京の若者も、意味の分からぬ廣東語のリズムにのって腰を動かしていた。台湾のスター鄧麗君（テレサ・テン）は、一時、大陸の国民的英雄となり、メイドインチャイナの歌手たちも、流行に遅れまいと伝統の

スタイルを変え、無理に香港スターのまねをした。映画界では、「エセ西洋」のアルバニア、ルーマニアのものは早々に姿を消し、代わって「本物」の海外映画が登場してきた。高倉健主演の日本映画『追捕』（日本名『君よ憤怒の河を涉れ』）が一九七八年に上映されると、全国的に空前の熱狂を呼んだ。若者が食い入るように見つめたのは、映画に写し出された資本主義国（日本）の現代都市の町並み、人の髪型、服装、生活様式、そして振る舞いのかっこよさであった。

（＊文革期、國産以外の映画はほとんどすべて禁止され、唯一許可された外国映画は、社会主義の友好国アルバニアとルーマニアの映画であった）

この盲目的な資本主義国崇拜の下で、「海外は天国」であるという歪んだ意識も生まれた。

〔…¹³ 外国に行きたい。たとえ外国でこじきになつたとしても、今の生活よりはましだと思う〕¹³ というある青年の言葉は、現状に不満を抱き、将来への希望を失つた一部の青年の心理を代表するものでもあつた。

小李もその中の一人である。「スリムで、長髪、パンタロン姿。時に外国シールつきのサングラスをかける。身にピタツと合つた背広も持つてゐる。香港の風俗を実によくフォローしている。夢のまた夢は『出国』、つまり外国に行くことだ。『米国は競争が激しすぎるから自分の

ようには才能のないものには無理。だが、カナダかオーストラリアなら、なんとか生きていけそうだ。それができなければ香港でもいい。ただ、親族に華僑が一人もいないので、それもダメだろう。となればまず広東に行つて、そこから香港に行くチャンスをねらわなければ⁽¹⁴⁾……」。

社会主义国からの脱出を目指して、上層の幹部から下層の庶民まで、智恵を絞ってさまざまの工夫を試みた。

チエン村においては、地理的な便利さを利用した密出国がブームとなり、一九七九年には「香港への細流は突然洪水に変わり」、県の拘置所はすし詰めの状態になつた。

「まるで暴動のようでした。みんなが香港に向かつて突進してしまった」。「国境沿いの県の至るところの村々から香港へと向かう同じような大波が国境の陸地に沿つた警備を圧倒した。十分な拘置所もなく、警備隊が捕らえたごく一部のものですらすぐに釈放されて、再度試みることになった。脱出が容易だということが確かめられたために熱狂は拡がつた。十五から十六歳のチエン村の十代の若者は毎夜のように家庭から逃れて（しばしば親の願いでもあつた）、イギリスの植民地にいる仲間たちに合流した。一九七九年の五月から十月の間に、二百人以上の若者たちが国境を越えていた。数ヶ月のうちにチエン村は最強の働き手たちのほとんどのみに見捨てられてしまつた⁽²⁸⁾」。

こうした不法の脱出と同時に、合法の出国もブームとなつた。開放のお陰で、文革中ひどく嫌がられた「海外、台湾、香港」の親族の存在は、かつての評価が逆転し、いつの間にか結婚相手を選ぶ際の第一の条件となつた。海外の親戚の手づるによる海外移住の申請は八〇年頃から急に増え、審査を行う公安局および外国領事館の前は、いつも長蛇の列であつた。幹部子弟の特権的な留学に続いて、一九八二年から政府の留学計画も軌道に乗り、毎年一〇〇〇人程度の官費生の選抜試験に全国からエリートが雲集してしのぎを削つた。

貿易関係の役人は取引上の譲歩と交換に、子女留学の受け入れを相手に飲ませ、海外駐在の外交官も、帰国するまでに子女留学の受け皿を密かに用意しておいた。やがて、こうした海外移住、留学ブームが庶民レベルにまで拡大し、私費留学の名義で、親戚がなくても海外に渡航できる方法が考案出された。

一九八二年ころからアメリカ、カナダへの私費留学ブームが起り、まもなくオーストラリア、ニュージーランド、日本へと波及した。その大半は、留学を口実にした出稼ぎか、永久定住を目指す新華僑（移民）たちであつた。

こうして八〇年代、多くの若者は資本主義の「天国」を目指して脱出していった。共産主義のはかない夢とともに、悪夢の舞台となつた貧しい、苦渋に満ちた黄色い大地も、同罪者のよ

うに一緒に見捨てられてしまつた。

「私」が復権した農村

改革下、大きな変貌を遂げたのは農村である。強要された「大寨」の共産主義精神は、その象徴的存在である陳永貴副総理の失脚と共に崩れさり、潜在していた「私」意識を完全に復権させた責任制、責任田の導入は、奇跡のように農民の生産意欲を呼び戻した。

農民の生活は一九七八年以降改善され、貧しさから脱出した農民達は、日々に鄧小平の「三中全会」（改革開放政策を決めた共産党の会議）を讃えた。

一九八〇年まで「どつかり腰を据えた貧困にどつぶりとつかっていた」広東省のロラム村は大きく変貌した。土地が個人の請負に出されてから、農家の収入は五倍にふえ、電気が通り、農村工業が起こされ、新しい家、学校、私有の会堂がつぎつぎできあがり、復活した自由市場も活気に満ちた。「農民たちは自分の土地を耕し、自分たちの作物を売り、自分たちの家を建て、人生で初めて現実的心配にわざらわされることなく生活」することができた。

「今行われていることは良いことだ」「誰が権力を握ろうと、この流れを変えることはできな
い」と、党委員会のファン書記がいう。

「いつも貧乏でした」。七四歳の女性チヤンの記憶には、一九四九年の解放以降の生活も、たゞ「貧乏」でしかない。彼女に真の「翻身」をもたらしたのは、四九年の土地改革ではなく、今の改革・開放の政策であった。それは一九七九年に中央政府が農民たちに自分で使える土地を与えて初めて可能になつたのである。チヤンを一番感動させたのは、やはり「自分の土地」であった。

その隣人のリー・ジャイウイグも今の生活に満足している。「わたしの人生で、ここ数年、一九八一年ごろからの変化が一番大きいですよ」「政策が緩和されてから、前より稼げるようになりました。：わたしはプラスチック工場に投資している。ブタとニワトリの数も増えた。一九八一年に自分の土地を貰つて、三年前にまた少し貰つた。：毎年、一〇〇〇元の収入があります」。

ロラム村の変貌は、改革による「私」の復権の恩恵であった。「大寨」式の貧しい共産主義とその提唱者の共産党に対し、村民は嫌悪に近い感情を抱いていた。

「入党の申請は一つもありません」。「率直に言つて、党員を作るのは難しい。：近々、入党する者があるとは思いませんね」。リー書記は、すなおに「共産党が魅力を失つていてこと、ロラムの村人たちは、党にも、それがすることにも本当の意味で興味を感じていないこと」を

認めた。⁽³⁹⁾ 古参党员で、ながく党の書記をつとめたチヨン・ウイングも、改革政策の下で、党の職をなげうつて個人経営の金物屋を開店した。

北京市房山県吳店村の農民も、異口同音に、十一期三中全会以降の政策を良しとした。十分な食糧が生産され、出稼ぎによつて現金収入も増えた。土造りの家屋が煉瓦造りに変身し、サボタージュの現象も消滅し、監督がなくともみんなすすんで働くようになった。

「改革は民心をよくとらえている」。「太陽を消耗する」働きぶり（サボタージュ）は姿を消した（郭仲安）。

「生活はよくなつた。今では食糧は家族で食べきれないくらいある」（禹国英）。

「請負制になつてから、実際に働く時間が少なくて済むようになつた。：食糧は十分にある。さらに少し豊かになつてゐる。やはり現在の生活が一番よい」（田山）。

「人民公社の時は、集団方式で、たくさん働いても、あまり働かなくても給料は変わらなかつた」。現在「農民は自分で耕作できる。涼しい時に働いて、暑い時には休めるようになつた。：今は生活もよくなつてゐる」（禹文貴）。

「現在の方が当然よい。：つづった穀物は自分の手に入り、どの家も予備の穀物をもつてゐる」（彭書田）⁽⁴⁴⁾。

ロラム村と違い、呉店村の農民達は生活の変貌を「共産党」のお陰としたが、彼らの感謝した共産党は、「私」を復権させた鄧小平の党であり、「大寨」式の共産主義を強要した毛沢東の党ではなかつた。

静海県の農民夫妻は、改革の開始から四年足らずで「万元戸」に変身した。新築の家にカラーテレビ、冷蔵庫、自転車、ラジカセを備え、農閑期には天津、北京の高級料理店にも出入りするようになつた。「大寨」、「小靳庄」（地域的な大寨式の手本）の共産主義精神に代わって、儲けることこそ名誉だという新しい意識は、もう揺るがせないほど、彼らの心を占拠した。「金があれば何も恐れることはねえ。ほら見ろ、この札束。今は儲けることが名誉だ」という時代のさ。：教養？ 教養つてなんの役に立つのかい。稼いで豊かになるには、中学程度の教養で十分さ。いくら教養があつても、金になりやしねえ。：党中央の政策はすばらしい。貧乏人を貧乏から救い出すのが、本当の共産党じやないか⁽²⁵⁾。この農民は、四年前に除隊するまでは「毛主席の戦士」（軍人）であつた。

（＊年収一萬元の家、因みにこの時期の平均年収は都市部で一〇〇〇円弱だつた）

もともと共産主義への理解が浅い農民の場合、価値観の転換は都市より一足早く、大飢饉のあとから始まつたが、それは毛の唱える「大寨」精神によつて、しつかり押さえつけられてき

た。信頼から不信に変わった都市の民衆と違い、農民の場合、もともと不信だつたものが、改革によつてやつと否定できるようになつたのである。

七 意識転換の意義と問題点

1 特徴と意義

以上では、戦後中国の各時期における、民衆の社会主義イデオロギーに対する意識の変遷過程を実例を通じて検討してきた。以下では、この三五年間の多くの実例をふまえ、民衆の意識転換の特徴、意義、および問題点を整理してみよう。

解放初期の三年間では、弾圧された少数（といつても相対的少数）の「階級の敵」を除き、民衆の大部分は共産党を信頼し、新中国の建国に情熱を燃やした。その理由は戦争・革命時期における共産党の抗戦実績、廉潔なイメージ、あるいは被搾取階級自ら被つた階級的利益にある。

り、さらに、愛国の知識人・ブルジョアジーの好感を呼んだ、統一戦線による「民主建国」の綱領にあつた。

社会主義改造の時期に入ると、私的所有制の廃止、知識人に対する思想改造の強要などという共産党の約束違反に、民衆の多くは困惑を感じた。小生産者意識の強い農民と自由を求める知識人の抵抗が現れ始めたが、それも綿密に行われた思想教育、政治運動の前に屈服し、社会主義のイデオロギーを次第に受け入れていったといえる。またこの時期、青年層、知識人一部と労働者階層を中心に、共産党、社会主義に対する自発的な支持、協力の態勢が整い、全体として上からの行政命令、政策がきわめて効率よく行われたといえる。

一九五〇年代には、社会全体が活気に溢れ、生産復興と社会主義改造・建設の過程において、莫大な大衆的エネルギーが湧き出たのは事実であつた。

しかし、「大躍進」の失敗とその後に続く大飢饉のあと、農民層を中心に、共産党の政策、社会主義に対する自発的協力の要素が薄れた。時折の、実務派による「調整」政策の成功に伴つて、建国以来水面下に隠れていた「私」と「自我」が復活し、社会主義革命と建設を継続させる上の大きな思想的障害となつた。一九六二年以降、生産力の回復、市場の繁栄という小康状態が現れたが、それは、「調整」政策の下での「私」の復活による活気であり、「大躍進」時

期のような共産主義精神による熱氣ではなかつた。

こうした自然発生的な「私」の復活に対し、毛は一連の共産主義精神教育のキャンペーンと政治運動を起こし、崩れかけた社会主義イデオロギーを維持しようと懸命に努力した。六〇年代の前半は、政治力学の点から言えば継続革命を唱える毛沢東と生産面を重視する実務派の対立期であるが、民衆精神史の点から見れば、「公」と「私」の対立・確執の時期であつた。後の文化大革命はこの対立の過程において次第に準備されていった。

一九六六年に始まつた文化大革命は、毛の個人意志によつて発動された政治運動であり、非常手段の採用によつて、組織面では、「調整」政策の推進で国民の信頼をかち取つていた実務派を肅清し、思想・意識の面では、失われつゝある「大公無私」の社会主義イデオロギーを持ち直させようとする政治実験であつた。

大衆の間の殺し合い、恐怖、流血による異常心理の下で、国中が「公」と「忠」一色に染まり、毛の絶対的地位と、失われていた延安式の共産主義精神も、一時的に、全面的に確立したかのように見えた。しかし、非常時期が終わつた一九七〇年代以降になると、生活秩序の回復と共に、「自我」と「私」が蘇り、さらに禁欲的だつた文革前期への反動として爆發的に増大していった。その結果、思想教育の拒否、幹部特權の横行、社会主義を食いつぶす行為などの

現象が普遍化し、社会全体の生命力が次第に衰えていった。

六〇年代に有効だった毛の指示、共産党の統制がこの時期から効力を失い、社会主義イデオロギーと民衆意識の乖離現象が現れた。文革の否定、民衆意識の全面的転換は、「私」の覚醒・復権と共に準備されていった。

一九七六年の文化大革命終結は、「継続革命」の理論、文化大革命に対する民衆の反抗、サボタージュ、不協力によつてもたらされた必然的結果であり、毛沢東と文革派の民心喪失を意味する出来事であつた。その後、鄧小平による文化大革命、階級闘争、継続革命理論の否定は、意識転換の政治的背景を整え、八期十一中全会後に始まつた経済改革とともに、過去の総否定を特徴とする民衆意識の大転換が始まつた。この転換は、一九八〇、八一年の人道主義論争、共産主義の「信念の危機」の出現などによつて頂点に達し、あらゆる階層に浸透して、一九八五年前後、一応終結に向かつたと考えられる。

総じて見れば、戦後の中国民衆の意識変遷の過程は、共産党・社会主義への支持・協力から反対・拒否への転換過程であり、「自我」と「個」の目覚めを軸にした、社会主義イデオロギーに対する信頼から不信への転換過程であつた。その結果、社会主義は見捨てられ、民衆の意

識は「公」から「私」へ、国家中心から個人中心へと、一八〇度、転換したのである。

改革・開放政策によつてもたらされた意識転換ではなく、意識の転換がもたらした改革・開放であつた。建国後一日も中断したことのない共産黨の綿密な思想教育にもかかわらず、また生産、生活、文化、伝統のすべてを犠牲にした毛沢東の流血の実験が幾たびも試みられたにもかかわらず、結局この意識転換の大洪水を阻止することができなかつた。また中国だけではなく、他の社会主义の国々に軒並みこのようないきな意識転換の現象が発生し、結果的に社会主义の理想が見捨てられた歴史を見れば、この民衆意識の転換はまた、少数の指導者の誤りや、共産黨の政策的失敗によるものではなく、人間の「自己」への回帰」という歴史的趨勢の中に位置づけられる現象であつた、といえよう。

この意味でいえば、社会主义社会の衰退をもたらした重要な内在的要因は、實にこの民衆意識の転換にあり、文革の終結も、改革・開放の試みも、さらに社会主义陣営の崩壊も、こうして民衆の拒否反応からもたらされた、歴史の必然であつた。

2 意識転換の問題点

七〇年代後半から八〇年代前半にかけて行われた民衆意識の転換は、十億の人口のほぼ全体に及ぶ価値観の根本的転換であり、また実質上、社会主義を否定する民衆裁判でもあった。全世界の人口の五分の一を占める中国民衆の中で起こったことと、中国の将来、社会主義の将来を左右するという点から見れば、この転換には極めて深い意義があると言わなければならぬ。

一方、指摘すべきは、この意識の転換は自己の目覚め・確立を意味するが、必ずしも明るい中国の未来を保証するものではなかつた、ということである。前近代から資本主義が歩んできた糾余曲折の道と同じように、この民衆意識の転換も元来、極端な利己主義の氾濫（自由放任主義）と自由主義・個人主義の健全な発展（欲望への自律、他律的な統制）という、二つの発展の可能性を有していた。

意識転換期に見られた特權の横行、抨金主義、政治の腐敗、汚職、または商業道德の低下などの諸現象から見れば、残念ながら、中国の場合ではその前者、つまり自由放任の道を辿つていると、指摘しなければならない。とくに最近、これらマイナスの面がますます増幅し、大きな社会問題となり、改革・開放の行方さえ妨げかねないまでに深刻化している。

なぜ民衆の意識転換は自由放任主義の方に走ってしまったのか。現在の政府当局は、意識転換下の腐敗現象を「ブルジョア的自由化の弊害」、「ブルジョア的思想・個人主義の氾濫」と決めつけているが、果たしてそう言えるだろうか。本書の考察の結果に基づき私は、これらの問題の出現は、決してブルジョア的自由化の弊害ではなく、民衆の欲求、意識転換の事実を無視し、それを阻止しようとした、政府の間違った政策の結果ではないか、と指摘したい。

すなわち、民衆意識転換の過程の中で、「自我」の目覚めと同時に、抑圧されていた「欲望」も、その反動として露骨なまでに大きく成長したのも事実である。このような場合、民衆に正しい個人主義、自由主義の教育を施し、自由主義と自由放任主義、個人主義と利己主義の弁別能力を与えること、また自由社会にも存在するはずの道徳意識・社会のルールを教え、政策的規制などによつて意識転換をより正しい方向に誘導することが非常に重要と思われるが、しかし、中国の場合はどうだったであろうか。

このような誘導・教育と政策的規制がまったく行われなかつたばかりでなく、民衆の「意識転換」という歴然とした事実でさえ、今だに政府によつて認められていない。自由主義と個人主義は、社会主義の敵性意識で、「腐敗し切つた資本主義のイデオロギー」だからである。

つまり、政治の改革を拒否した政府当局は、「四つの基本原則」、社会主義イデオロギーを維持する考え方から、自由主義と個人主義の思想意識の受け入れを拒否し、「自我の目覚め」を実質とする民衆の意識転換を黙殺してその進行を放置してしまつたのである。意識、価値観の転換は誰もが自覚した公然の秘密になつたにもかかわらず、個人主義や自由主義はイデオロギー上で正統の地位を得られなかつた。「為人民服務」（人民のために奉仕する）というスローガンは一字も変えずに掲げられ、「大公無私」の共産主義精神教育も以前のように行われている。多くの若者を代表した潘曉の苦惱も、まさにこうした空洞化したイデオロギーと社会現実との齟齬から生まれたものであろう。

このような歴史の潮流に逆らう誤つた対策の結果、もはや止められない民衆の意識転換は無指導・無規制の転換、闇の中の転換になつてしまい、個人主義、自由主義の真意を知らない十億の民は、転換前とは正反対の方向、つまり利己主義の方向にむかつてとめどもなく狂奔し始めた。極端な利己主義が氾濫し、自由放任主義時代の資本主義にあつた一番汚い部分も遠慮な

く受け入れてゆく。ここに、ポスト社会主義の新たな問題が生まれ、現代中国のあらゆる腐敗現象を生み出している。

現代中国社会の最大な矛盾は、なんといっても、空洞化・形骸化した社会主義イデオロギーと、生身の存在である民衆の意識との間の乖離現象であろう。この矛盾を解決しない限り、ポスト社会主義中国の飛躍が期待出来ず、「改革・開放」も最終的な成功を認められないであろう。

III

社会主義とは何か

1 社会主義衰退の原因

前章の考察を通じて、中国の社会主義はなぜ衰退してしまったか、という問題について、一応の回答が得られたと思う。「上」からの理論研究、政策分析から得られた答えではなく、実際に社会主義システムの下で生活し、その支え手となっていた一般民衆からの素朴な答えである。社会主義論が五里霧中の混沌状態にある現状では、こうした民衆の声にも耳を傾ける必要があるのでなかろうか。ある意味でいえば、こうした民衆の生活経験は、一五〇年前のマルクス主義の經典や、大家による理論書の山に埋もれているいずれの理論よりも、明快にして簡単、しかも正確な答えであるかも知れない。

以下では、前章における民衆意識転換の考察を踏まえて、社会主義とはいつたまにかを考えてみよう。

一九八九年の天安門事件をきっかけに、社会主義の国家群が激しく揺れ動いた。その結果、四〇年以上の歴史を持つ東欧の社会主义陣営が解体し、残されたいくつかの「社会主义」と称する国も、生き残るために、いろいろな改革を試みざるを得なくなつた。もちろん、このいわゆる「改革」はほとんど、アンチ社会主义の性質をもつ改革である。

人類の究極の理想として、かつて多くの人々に夢を与えた社会主义社会はなぜもろくも崩壊してしまつたのだろうか。

前章においては、意識の変化を中心に、体制を支えていた民衆の不信・離反を概観してみたが、以下ではさらにこの意識の変化を來した経済上・制度上の理由を考えてみたい。

現在では、自由、民主、人権という要素の欠落から社会主义の没落を論じる人が多いようである。私はこの論自体を否定しないが、しかし、それよりもっと重要な理由は、生産力発展の面での敗北にあるのではないか、と考えている。

古くから、産業革命を牽引した資本主義の生産力発展の面での優越性は、一般的に認められてきた。同時に、その無計画な利潤追求による生産過剰、それに起因する周期的危機の問題も指摘され、さらに分配の不公平から生まれた階級的対立、市場・原料の獲得をめぐる帝国主義戦争などの致命的な弱点も、マルクスによつて突き止められた。マルクスは資本主義がこれら

の問題点を自ら解決することができないと断言し、その衰退、消滅およびそれに取つて代わる社会主義システムの誕生を予言したのである。

マルクスが描いた社会主義の理想像は、すばらしいものであった。生産手段の公有、国家計画による経済需給のコントロール。こうしたシステムは、生産過剰、周期的危機といった資本主義の弊害を克服し、生産力の発展をいつそう推進できるだけではなく、分配の面でも、国家による公平な分配と周到な社会福祉政策を通じて、貧富の差をなくし、人々は各自平等で豊かな社会福祉の恩恵を享受できる、という。

マルクスの予言はある程度当たつていたといえる。一〇世紀初期の資本主義は、周期的経済危機、国内の階級矛盾の激化、国際間の帝国主義戦争の拡大などによつて一時、瀕死の状態に陥り、逆に第一次大戦後に生まれた社会主義国家ソ連は次第に困難・孤立から脱出し、二、三〇年代の資本主義世界の恐慌をよそ目に、飛躍的に国内生産力をのばしていった。ソ連の成功は多くの人々に夢と力を与えた。戦後、社会主義のソ連に倣つて多くの社会主義国家が誕生し、冷戦を背景に世界政治、経済に大きな影響を及ぼしたのである。

しかし、歴史はマルクスの予見通りに進まなかつた。自滅するはずの資本主義は、第一次大戦の後からシステム内部の修正を試みた。試行錯誤を重ねた末、生産力の発展を維持し、周期

的危機をある程度克服したばかりではなく、不公平の是正も試み、計画経済、社会福祉など、社会主義的要素の取り入れにも成功したのである。つまり自己浄化、自己修正の働きをもつて、マルクスが予見した危機を乗り越え、システムの再生が出来たのである。第二次大戦後の資本主義世界の繁栄は、大きな意味において物質的な豊かさによる繁栄であり、それは生産力発展の結果であるといえよう。

一方、社会主义社会の方では、計画経済の硬直化、労働者の生産意欲の喪失など生産力発展の面での敗北は次第に明らかになつたばかりでなく、すぐれているはずの分配の面でも、ものの不足、特權の発生、汚職の日常化などによつて、優越性を失つてしまふ。分配の不公平はともかく、肝心なことは生産の停滞である。ものがないと初めから公平な分配の意味はない。いくらすばらしい理想といつても、現実の生活に還元できないと民衆の心を引きつけられないことは、前章における考察の通りである。

中國民衆の体制へのポジティブな協力が消えていったのは六〇年の「大飢饉」以降のことであり、ソ連のペレストロイカの実質も「パンの革命」といえる。すなわち、社会主义社会を根底から搖るがした基本的な原因は、長年にわたる生産力発展の停滞と、それに起因する民衆生活の窮乏だと、私は考える。もちろん、天安門事件、ベルリンの壁の崩壊など民主化を求める大

衆的政治運動が社会主義の崩壊の引き金となつてゐるが、しかし、掘り下げてみれば、こうした政治的事件を醸成した土壌は、やはり経済面の失敗にあろう。平たく言えば、飯が食えなくなつたため、民衆は社会主義のシステムを見捨てたのである。

では、なぜ社会主義では飯が食えなくなつたのだろうか。

無能な指導者の出現、経済政策の失敗、あるいは官僚主義の発生など、システム以外からその原因を論じてゐる人が多いようだが、私は、前章における考察の結果に基づき、システムの内部にある「人間」の問題に注目しておきたい。つまり、飯が食えなくなつた原因は、人々の働く意欲の喪失にあり、さらにこうした「意欲の喪失」を生み出した理由は、社会主義システムの中にある。言い換えれば、社会主義のシステムには、社会の活気、人間の働く意欲を消失させてしまう必然性が内包されていた、ということである。

2 社会主義における「人間」の問題

この理屈をはつきりさせるため、改革・開放前の社会主義中国における「人間」の問題を見てみよう。

最初に指摘したいのは、社会主義社会の人間の中に、「依頼心」と「平均意識」が根強く存在していることである。

中国ではこの意識を「大鍋の飯」と称するが、日本流に言い換えると「親方日の丸」となる。この意識は所有制度から生まれたものだと思われる。生産手段のすべては国家所有、あるいは集団所有制であり、個人が所得税を納めないかわりに、すべてが国家、集団から保証されるシステムなので、依頼心が生まれてくる。この国有制、公有制のシステムは、一見して非常に公平ですばらしいようであるが、その落とし穴は、まさに人間の進取性を挫くことにある。社会の活気と生産力の発展を支えるのは結局のところ、個々の人間の能動的要素であるが、こ

の個々の存在に普遍的な惰性が生じると、社会全体の進歩が停滞してしまう。

中国の社会主义のシステムは、一時的にうまく機能した時期があった。前章で述べたように、建国後大々的な政治運動が繰り広げられ、また冷戦下で自由主義陣営に封じ込められた一九五〇年代では、大衆の間に緊張感があり、社会主义の理想を信じ、共産党への自発的な支持・協力があつた。しかし、大躍進が失敗した後、「公」に献身的な革命精神が後退し、逆に「私」を中心とする生活意識が生まれる。農民たちは「自留地」でしか働く意欲が出ず、都市の労働者も計画経済の管理システムや国営工場の福祉のため、意欲と創意を失ってしまう。公有制のシステムの下で、いくら努力しても、結局自己の成功、自分の利益が期待できないためである。ここに平均意識・依頼心からくる惰性化現象が生まれてくる。

この自然発生的な惰性を克服するため、毛沢東は一連の政治、思想教育運動を起こして、雷锋、大寨のような手本を立てて共産主義への献身的精神を強要したが、結局、文化大革命のような非常時期を除いてほとんど効果が現れず、さらに禁欲の反動として、文革後、惰性化現象は猛スピードで進んでいく。最後には、文革後期に見られるような、みんなが座つて社会主义を食いつぶすという、末期的な現象にいたり、文化大革命の終結と、社会主义の崩壊につながつて行く。つまり、平均意識、依頼心が生んだ普遍的惰性が、社会主义の衰退をもたらしたの

である。

社会保障が整つた公有制が人間の依頼心を生むということは、資本主義社会にも無縁ではない。ご承知のように、戦後、資本主義世界では「イギリス病」と称する現象が生まれ、高福祉政策を施行したいくつかの資本主義国家にも次第に衰退の兆し現れてきた。その理由の一部は、高所得税制度と、社会保障の充実した社会システムにあると考えられる。すなわち、働いただけ、その分税金負担が高くなり、逆に努力しなくても基本的な社会保障がえられるのである。逆に日本のように、低福祉だからこそ、不安感に駆られて、人間には緊張感と競争心が旺盛であり、その善し悪しはともかく、結果的に生産力の増進につながった例もある。ここで、「福祉」と「生産」、「社会保障」と「働く意欲」という一律背反の問題が浮かび上がってくるが、かなり取り扱いにくい問題である。福祉、社会保障の「過剰」とはどんな状態なのかは、決して物量で計れるものではない。私は、福祉や保障があるために、依頼心が生まれ、働く意欲が低減してしまうような現象が広く発生してしまうと、それは福祉の過剰といつてよいのではないかと思う。社会主義の場合は、あきらかにここに問題が発生したと言える。

次に見てみたいのは、人間性の養成面の問題である。

社会主義社会では、そのイデオロギーからの必然として、公を中心とする意識構造が要求さ

れる。中国では「為人民服务」（人民のために奉仕する）という毛沢東の言葉がよく使われていたが、社会主義イデオロギーの最も簡潔な説明といえる。「公」ための献身精神が子どもの時期から教育を通じて注入され、すべては「共産主義」、「国家」または「集団」のためでなければならぬと、教えられている。このような教育・宣伝の結果、個人の向上の可能性、自我の存在の意義はいつたどこにあるか、という基本的な問題において、ほとんどの人が迷つてしまふ。

思想教育のほか、プロレタリア独裁の行政システムも人間性の形成を抑圧している。公務員試験、資格試験のシステムがないため、人間の向上心を刺激し、吸収する場所がなく、出世の道と言えば、権力者の抜てきを仰ぐか、革命への忠誠心、政治的態度によって左右される。ブルジョアの出身が致命的であることはいうに及ばず、直系の親族に一人でも右派のような革命の敵が出たりすると、一生巻き添えを食う運命となる。

また良い成績で学校を卒業しても、仕事を選択する自由はなく、仕事の種類、つとめる場所、さらに生活する地域まで、すべてが党、国家、指導者によつて決められてしまう。このような教育と行政施策の結果、個性、自立心と進取性が著しく挫かれ、惰性や依頼心がさらに濃くなつてくる。唐亞明の『ビートルズを知らなかつた紅衛兵』に描かれたように、貴族学校の

子供たちは、親の官位・階級、出身を見比べることで自分の位置を決め、また何をやるにしても、まず本能的に先生や、上からの指示を仰ぐようになる。このように、社会主義のシステムは個性形成の面において大きな障害となっている。

その次に指摘したいのは、少数者の支配と中央集権主義の問題である。

社会主義の国家はその絶対主義的イデオロギーからして、ほとんど例外なく、中央集権制と特権指導者層による終身支配が行われている。絶対の「真理」が存在し、「完全無欠」な偉大なる指導者が国民の上に君臨している。国家のすべては、ごく少数の人によつて、上から動かされるのが、特徴である。このような政治システムの存在も、結局、地方の自主性を扼殺し、國家をささえる基本的な要素である「民」、またその集合体である民衆の存在を無視する結果になる。少数の「偉大なる指導者」の出現は、もし多数の「凡俗」の犠牲が伴わなければ、別に恐れるべきことではないが、しかし、現代社会主義の場合、少数の「英雄」の出現のかげで、個人崇拜、指導者贊美の操作が行われ、その結果、往々にして民衆すべての自己喪失が代価とされる。愚民政策をとらなければ、絶対の権力者が生まれてこないためである。このような集権的システムの下で、大多数の民衆は、どのように個の価値を認識し、自分の可能性、地方の可能性をのばすのであろうか。「偉大な指導者」、「強大な社会主義国家」、「広い領土の統

一」、「各民族の大団結」という素晴らしい社会主義のイメージが創出される陰で、夥^{おひただ}しい人間の自己犠牲が強いられていたことを、いつたいどれだけの研究者が認識したであろうか？要するに、社会を構成する基本的要素である個としての「人間」の存在を無視し、その可能性を扼殺してしまったのが、社会主義社会に生産力発展の停滞をもたらした基本的原因であり、従つて社会主義の没落を促した重要な原因でもある。

3 システムの原因を問う

では、社会主義はなぜ「人間」の問題を生ませたか、システムの分析からその原因を探つてみよう。

先にも触れたように、社会主義社会は基本的に「公」を原理（原点）にしてつくられた社会であるのに対して、資本主義社会は「私」を原理（原点）とするものである。もちろんこれは非常に単純化した図式であり、実際には、両者ともある程度相手の原理を受け入れなければ、

社会の運営は不可能となるが、イデオロギー的には、また哲学的にはおおよそこのように分類すれば把握しやすいのではないかと思う。

理念の面では、社会主義は絶対主義、専制主義、ファシズムと大きな違いはあるが、組織形態、存在形態の面では共通した点が多く、「絶対主義」、「全体主義」の一形態として理解できよう。

社会主義の特徴はどこにあるか、見てみよう。

まず第一に、思想方法における絶対主義。

社会の発展、歴史の進歩を無視し、ある経典、あるいはある指導者を絶対視する傾向にこの特徴が窺える。一五〇年前のマルクス主義の経典はいまでも「絶対真理」であり、「偉大な指導者」たちは死ぬまで、退陣もしないし過ち一つ認めようとしない。こうしたあり方は、共産主義・社会主義のすべてを「善」とし、それ以外のすべては「悪」とする一方的教育、宣伝の方法、及び、組織形態上に一党独裁、終身政治などの専制制度を生ませたばかりでなく、思想方法が硬直化したため、システムの再生能力まで弱めてしまう。二〇世紀の歴史を見ると、危機に瀕した資本主義は、内部の自己浄化を通じて、社会主義の良い要素をもふんだんに取り入れシステムの再生を遂げたのにに対して、社会主義の方は、マルクス主義の原則、イデオロギー

にこだわりすぎたため、ほとんど過ちを認めず、崩壊の道をたどつていった。

第二に、思想意識の面で「国家」、「社会」、「公」の利益が重視され、それに対する「民衆」、「個人」、「私」の献身、自己犠牲が要求されること。

国益優先のため、国家が強い権力をもち、ある政治的目的を達成するため、国家は総力をあげて拳国的体制を形成しやすい。そのため一時的にある部面で優れた成果を挙げたり、あるいはある政治・経済運動を通じて莫大なエネルギーを放出したりすることはできる。

旧ソ連の宇宙開発・核軍備競争での強さ、中国の「大躍進」・文化大革命のエネルギー、ベトナムの反米戦争における軍事力の発揮、さらに旧ソ連、東ドイツのスポーツ選手の養成などはその例である。冷戦下、こうした力を行使して、一時に相手の国を圧倒し、国威、国力を伸張した例がしばしば見られたが、全体として、民意・採算の如何などを問わない国家による独断的な行為なので、国民経済のアンバランスをもたらしたり、あるいは国家の代表者である指導者個人によつて濫用されたりすることが多い。スターリン時代の大肃清、ポルポト派の虐殺、中国の大躍進、文化大革命などは、国家、指導者による権力濫用の例である。全体として、この公益・国益優先のシステムは非常（戦争）時に強く、平常時に弱いと考えられる。

第三に、中央集権的専制政治、一党・一階級の独裁、少數人による終身政治の組織形態。

この共産党の專制主義的要素について、よく封建的意識の影響、あるいは「後進国」で行われた社会主義革命の悲劇と言われるが、全ての社会主义国家にも、あるいは先進国の共産党を含める全ての共産党にも同じような傾向が現れていることに注目してもらいたい。システムや、絶対主義的な思考方法から生まれた必然だと考えられよう。

この專制主義的組織形態の下で国民全体の思想、言論の自由はない。学問、教育、マスコミの全ては国策によつて動かされ、しばしば大規模な思想改造・教育運動が行われ国民思想の画一化が図られる。政治の面では、民意を問う方法はなく、わずかに許された選挙も背後で操作された飾りものに過ぎない。また、人権、言論・思想の自由を要求する民主化運動に対しても徹底的弾圧姿勢がとられている。民主、自由を認めれば、このような専制的国家制度は一日も維持できないためである。こうした専制制度の弊害は、また長期政権に伴う官僚主義の増長、腐敗の発生、経済政策の失敗などによつて次第に増していく傾向があり、しばしばシステム崩壊の直接的原因となる。

第四に、経済上の国有・公有制、非利潤追求の統制経済と計画経済。分配上の平均主義方式と国家による社会保障、国民福祉。

これは一見理想的に見えるが、実施した場合には問題は決して少なくない。

生産面では、国益優先のため、利潤、採算、個人の利益は無視され、経済計画の全体は、指導者と少人数の国家官僚に動かされ、国策・政治目的に従わせられがちである。その結果、生産力の軍備面への大量転用、命令主義・官僚主義の画一的指揮、大量の浪費、無駄遣いなどの問題が発生したばかりでなく、労働者の働く意欲も損ね、サボタージュの現象を普遍的に引き起こしている。戦後のほとんどの社会主義国家には、計画経済の破綻、国有企业の経営不振、労働意欲の喪失などの問題が発生したと指摘される。

また分配の面をみると、社会主義社会には貧富の差が少なく、社会保障、社会福祉も周到である点は確かである。個人納税の不要、教育費不要、全民就業、低家賃の公営住宅、公費医療、老後の保障など、資本主義社会の人々からは喉から手がてるほど羨ましがられる点が多い。一方、分配のアンバランス（国益優先）、生産力の低下による福祉・社会保障の財源の窮乏（貧しい共産主義）、特権意識の発生による平等・公平の侵食、さらにこの平均主義的分配システムから生まれる依頼心、働く意欲の喪失など、マイナスの面も決して無視できない。特に人間の働く意欲の喪失という問題は、社会主義の死活を決する非常に重要な問題であると指摘しなければならない。実際、生産力発展の失敗、國家権力による国富の濫用により、社会主義の分配面での優越性はほとんど実現されていない。

以上の四点のいずれからも、「国家」、「公」を中心とするという、社会主義社会の最も基本的な特徴が窺えよう。国家が強大化し、公益が必要以上に重視されたために、「個人」、「私の利益・存在が無視され、先述した社会主義の「人間」の問題を生んだのである。

もし、社会の活力、生産力発展の点から、「公」の社会主義と「私」の資本主義を比べてみれば、後者が優勢に立つのは戦後の世界経済から見れば明らかである。その理由は、資本主義のシステムの原理は人間の本能に近い、ということなのではないかと私は思う。資本主義社会では、人間の原始的欲望、生きるための素朴な営みが直接に社会の生産力の発展につながっており、生存のため、欲のため、外部からの動員や、思想教育がなくても人間が本能的に動きだす。社会の活気はこうした自発的な活動を基礎にして生まれたのである。経済システムの調整、国際的な政治環境の安定などの外的条件さえうまく整えば、生産力の発展と経済活動の繁栄は不況期を除いて断続的に期待できる。

一方「公」を中心とする社会主義の方では、社会生産と個人分配の関係は薄く、人間の原始的欲望は生産力と直接に結びつくことは出来ない。非常時なら、人々が公の理想や目標に献身し、あるいは政治・行政的操作で一時的に生産力の発展を促すことは不可能でもないが、平常時に戻ると、生産意欲がなくなり、社会の底辺から湧き出る自発的なエネルギーが非常に弱

い。結局のところ、なにもかも上からの政策的指導、及び思想教育・動員の下で、ネガティブに行われる。社会主義と資本主義との間の生産力発展のギヤップは、戦時下ではなく、戦後の平和の時期において大きく開かれた理由もここにあろう。

4 非常時の社会形態

さらに、私は、「公」を原点とする社会主義のシステムは、あくまでも一種の理想であり、ある特定の条件の下での、一時的な存立の可能性を認めるが、普遍性のある社会形態として長く存続する理由は、初めからないとと思う。なぜならば、このような社会では、自分のためではなく、もっぱら他人のために生きる「無私、利他」的な人間の存在を、社会存立の前提としているからである。

前章における考察からも分かるように、毛沢東が政治生命をかけて求め続けた延安精神の復活と雷鋒・大寨精神の樹立は、まさにこうした人間を造成するための努力である。民衆全体に

わたる徹底的な思想・意識改造を成功させなければ、社会主義は遅かれ早かれ資本主義に変わつて行く必然性を、毛は認識していたのである。

しかし、このような「無私、利他」的な人間の造成は、果たして可能なことであろうか。残念ながら、毛沢東の実践から、否定的な結論が導き出されている。「雷鋒」のような無私の人間は、たとえ一時的に現れたとしても長い続ける理由はないし、またたとえ一人二人がいたとしても、社会の多数を形成する理由はない。「人民のために」と唱えている為政者たちが、一体自分自身でそれを信じているのか。社会主義諸国の上層部の専横、腐敗現象から見れば、とても信じているとは思えない。スターリンも、毛沢東も信じないし、鄧小平も、金日成も、カストロも信じていないと思う。このような、平常時ではだれも信じない非現実的イデオロギーを善良な国民に信じこませ、さらにその上で理想的な社会主義国を構築し、永遠に存続させようとする試みは、初めから、原理から間違っていたものと、いわなければならない。

一方、社会主義、共産主義はなぜ一世紀以上にわたって世界を風靡し、また実際にも四〇年の間、その国家群を作り出し、繁栄をみたのであろうか。

これも実は難解な問題ではない。すなわちこの間、「公」や「国家」の原理で民衆を統合できる社会的背景が実際に存在していたためである。私は原理的に「公」を中心とする社会主義

システムの永続を不可能と見てゐるが、ある特定条件の下での、一時的存立の可能性を認め
る。この特定の条件とは、つまり「公」のため、「国家」のために生きるという精神状態が、
大衆の間に普遍的に発生することである。

この条件は、階級的矛盾が激化した一九世紀の半ばごろから、西欧において存在した。また農奴制と帝国主義戦争の一重の圧迫に喘いだ、今世紀初頭のロシアにも存在した。さらに帝国主義の侵略と封建主義の重圧の下に苦しむ解放（一九四九年）前の中国にも存在した。階級的搾取と帝国主義の侵略に脅かされ、各個人が生存を続けることが難しくなると、「公」のため、「國家」のためといふ訴えが、民衆の統合に成功する。このような非常時においては、社会主義、共産主義のイデオロギーは人々に夢をあたえ、大きな動員力、行使力を持つていた。「私」や「個」が生きられないところで、そのエネルギーが「公」や「国家」の方へ噴出し、そこで、共産党の革命（実質上の社会主義革命）を成功させたのである。この意味では、社会主義社会の出現は、「公」のイデオロギーが民衆によつて受け入れられ、民衆の意思や行動と一体化した結果といえる。

このような「公」、「国家」のために献身する大衆的精神状態の発生は、また革命時期だけに限らない。革命が終わった後もしばらく続く傾向があり、また続けさせなければならぬとい

う政権からの要請もあつた。

中国の例でいうと、一九五〇年代と文化大革命前期はこうした非常時の継続期といえる。前者では国際間における朝鮮戦争、冷戦、資本主義陣営による封じ込め政策や、国内における思想改造、所有制の社会主義改造、共産党の組織整頓、「反右派」、「大躍進」などの運動によつて、戦争時代からの緊張状態がほとんど弛緩無く継続されているのに対し、後者では、いつたん緩んだ非常時の状態が、毛沢東による文化大革命の発動によつて再び作り出されているのが特徴である。この二つの時期において、自發的にせよ強制的にせよ、「公」に対する献身的精神は、民衆の大多数によつて受け入れられたといえる。

しかし、いつたん階級的矛盾、あるいは民族的矛盾の激化した非常時がおわつてしまふと、一時的に退いていた自我、人間の欲望が甦つてくるのはごく自然なことで、いくら政治運動や思想教育を施しても変わらないものである。前章の考察からも分かるように、社会主義を没落させた内在的・決定的因素は、まさにこの自我の目覚めという、人間性に基づく自然発生的現象なのである。

以上の理由で、私は、社会主義を「非常時の形態」ととらえ、その原理上の欠点、理論と実践面における問題点を指摘する一方で、ある特定の歴史段階での存在の可能性と必要性をみと

める。将来、条件さえ整えば社会主義はまた世直しの警鐘をならすものとして生まれてくる可能性があると思うが、とりあえずいまのような平常時では、社会主義のイデオロギーは社会改造のひとつ、「理想」、資本主義の醜さを映す鏡とされる以外、実際の社会形態として存立する理由はないと思う。これは、戦後中国の社会主義実践における民衆意識の考察から、導き出された結論である。

5 現代中国の行方

結びに、本書の方法論を用いて現代中国の行方にも少し触れてみたい。

一九八九年の天安門事件以降、ベルリンの壁の倒壊に伴い、社会主義陣営が崩壊した。しかし、その震源地となつた中国は崩壊の運命から免れたばかりでなく、多くの中国研究者・評論家の予言を裏切り、めざましい繁栄と発展ぶりを見せつけている。かつて毛沢東は「社会主義こそ中国を救える」という言葉を残したが、この言葉をもじつて「中国こそ社会主義を救え

る」というジョークが盛んに飛ばされ、為政者たちの抱負を示す絶妙な表現となつてゐる。この「社会主義中国」の中興現象をどのように見たらよいだろうか。

ここでまず確認しておきたいのは、現在の中国社会の性質である。いま、政治体制や憲法を見て、また変わらぬ指導者の顔ぶれを見て、中国社会の性質を「社会主義」と見る人は多いようだが、私は本書の考察結果に基づいて異論をとなえたい。

確かに、一九八九年当時の指導体制はほとんど変わりがなく生き延びてきたが、しかし、社会主義といふものの内実がどれほど残っているかは、疑わしい問題である。

まず民衆意識の面から見れば、文革後の価値観・意識の大転換が完了し、社会主義のイデオロギーが民衆の心から離れ、完全に空洞化した一九八五年頃から、生命力のある社会主義の要素はもはや存在せず、中国の社会主義は、そこで事実上終焉を迎えたといって、過言ではない。理想が掲げられていても、実践する人はなく、政策があつても支える者はない。社会主義社会はその支え手の離反によつて完全に形骸化されたのである。

次に経済の仕組みを見ても、その中にある社会主義的因素は著しく萎縮しているのが指摘される。中国の今日の安定、繁栄は、決して政権の強圧や、思想統制によつて作り出された人為的なものではなく、生産力の発展、生活の改善によつてもたらされた自然な結果といえる。つ

まり民衆が「飯を吃えるようになつた」ため、豊かになつたため、中国の現体制が安定し、ソ連の社会主義と明暗を分けたのである。しかし、問題はこの「飯」の性質にある。それは果たして社会主義の飯なのかというと、そうではない。この飯は「改革・開放」というアンチ社会主義的な改造から得られた果实で、資本主義の自由市場経済の原理、私的所有の原則を取り入れてから生まれたものである。実際、今日の中国の経済活動を観察してみると、活気に満ちているのは、大半が個人経営体、「郷鎮」企業（町営企業）、合弁企業あるいは外資系企業といった、非社会主義的形態の企業であり、逆に国営の在来産業、基幹産業の方はかなりの割合で赤字経営が続いていることが指摘できる。また、市場の活気も、利潤の追求という資本主義的な市場法則によつて支えられていることが分かる。つまり、社会主義の看板を掲げている現体制は、実際には資本主義から「飯」を炊く方法を学んで安定している、といえる。

今日の中国は、社会主義的要素を政治面、制度面に一部残しながら、経済構造と意識構造の面で社会主義から脱皮した新たな社会であり、言い換えれば、社会主義の建前の下で資本主義の実質を営む社会なのである。

このような状態の下で、社会全体が「政治」と「経済」の矛盾という、大きな問題を抱えながらも、善処さえすれば、まだタフに生きられると考えられよう。その鍵は、いかにイデオロ

ギーにこだわらずに社会生活の営みを重視し、社会の活気を作り出す経済改革の成果を守るかにある。うまくいくと、経済面での質的な変容に従って、政治体制面での修正も余儀なくされ、社会主義と資本主義のよい要素を取り入れた混合体の中国は二世紀にも繁栄するであろう。

しかし、中国の未来には、決して問題がないとは言えない。現代中国の直面するさまざまの問題の中で、私がとくに関心を持つのは、やはり「人間」の問題である。すなわち前に述べた社会主義社会の「人間」の問題とは別に、社会主義から脱皮しつつあるポスト社会主义の中国にも、根本としての「人間」の問題が存在している。

この「人間」の問題は、次のような二つの傾向に集約できると考えられる。

ひとつは、前にも触れた、社会主義が生み出した「大鍋の飯」という依頼心である。改革・開放のお陰で、依頼心から生まれた「惰性」は若い層を中心に克服されているが、四〇、五〇代以上の、既得地位・権力を持つ層の中ではなお根強く存在する。この層の人達は、インフレ、貧富の差に反対するという理由で改革に消極的であり、また改革の利点を分かつていても、自分の年、能力および住宅、医療、老後の保障などを考えて、「大鍋の飯」の現状に安住したがる。このような人々が、いま中国の中堅層を占めていることは、決して忘れてはならない

い。

数世代の人々の心に深く根をおろした「平均意識」——悪くいえば社会主義の「惰性」——を取りのぞくまでには、まだ長い年月を必要とし、同時に改革の推進、進取性の称揚、貧富の差の抑制、特権濫用の克服など、様々な政策的工夫も必要とする。これらを放棄していくと、人々の不満は改革政策そのものに向かって噴出する危険性さえある。ロシアでは、改革の失敗を契機に、中堅層、年金生活者層を中心に、旧共産党時代の平均主義を支持する傾向がすでに現れている。

いまひとつは、前にも触れた利己主義意識の氾濫である。これは「公」の意識構造が崩壊する過程において生まれた反動現象であり、対処不足、政策面での放任などによつて増幅され、現在、社会のあらゆる不正、腐敗と道徳低下の根源となつてゐる。

この傾向を是正するため、健全な個人主義、自由主義の教育が必要なだけではなく、法律、経済構造、税金制度の面でも、ルールを設けて私欲の膨張に対する適切な規制、誘導が必要であろう。

改革・開放の過程の中で、以上のような二つの不健全な傾向を克服し、民衆の多数が社会生産力の発展を担うべき自立的で良識のある人間へと育つて初めて、中国の未来があるだろう。

将来の中国は、もしうまくいくならば、それは、社会主義の中国でもなく資本主義の中国でもない。その両者の長所を吸収し短所を克服した新しいシステムをもつ国でなければならない。

あとがき

民衆の肉声、意識を出来るだけ真実のままに伝え、それを土台に社会主義の理論にアプローチすることは、本書の執筆を思いたつた時からの課題であった。こうした問題設定の意義については、当初から多少の自信があつたが、実証作業に関しては、全くの未知数であった。いざ着手してみて、こうした作業は決して一人の力でカバーできるものではないことがすぐに分かつた。すでにある資料群を操作する仕事ならともかく、所在の知れない資料を探し求めるところから始めなければならないこの仕事は、中国近現代史の分野に疎い私にとっては、あまりにも困難な作業であった。悪戦苦闘に疲れ、何度もこの構想をあきらめたいと思つたが、ある宿命的義務感に支えられ、なんとかこのささやかな一冊をまとめることができた。

実は、浅いとはいえ、同時代を生きた一人である私も、この本に出てくる人物たちと似通つた経歴を持ち、「紅衛兵」、「造反」、「下放」を経験し、労、農、兵の社会体験も一通りあつた。

いわば歴史の生き証人の資格をもつ一人ともいえる。しかし、私はあえて自分をこのドラマに登場させていない。自分一人の経験を語るよりも、この経験を生かして一〇〇人の経験を正しく伝えることこそ、歴史の学徒たる私の使命なのではないかと、感じたからである。

だから、本書において、私は、資料の価値・真偽の弁別役、またドラマの解説者の役を演じるつもりでいた。同時代人であるが故に、民衆の声に敏感に反応するある種の神経が生きているように感じ、また、資料の価値を判別する経験や直感的能力にも、他の研究者よりめぐまれている自信があつた。その上、十数年前に歴史学の門をくぐつたお陰で、こうした民衆の声を歴史学の感覚で加工する能力は、不十分ではあるが養われていた。本書をたんなる一般民衆の経験談に終わらせず、末尾の部分で社会主義論にふれたのもそのためである。

もちろん、限られた紙数の中で、十億人の数十年にわたる意識の全体像を示すことは、不可能に近いといつてよい。また第三章の理論部分にも、浅学のため、多くの問題点が残されていることは、いうまでもない。いずれも今後の課題としたい。

社会主義を論じた膨大な書物の中でも本書がどのような位置を占めるかは、私にはわからない。微かなうめき声にしか聞こえないかもしれない。とはいって、私ははやり、このつたない書物が、マンネリ化した「上」からの研究方法の型を破る一石となることを密かに期待してや

まない。

本書の扱う時期と使用資料は、「意識転換期」に対する私の認識から、建国後から一九八五年までに限定した。引用文に付した番号は巻末の文献リストに対応する。中国語の資料についていちいち注記していないが、拙訳である。また日本語に訳された資料も、漢字の表記が分かることは、漢字を採用した（たとえば、「ウン・チアン」は「張戎」に）。

末筆ながら、私のつたない構想に多大な興味を示して下さった丸善出版事業部の島添耕治氏と、二年間、岡山大学文学部の特別講義で熱心に本書のもととなつた研究報告を聞いてください。つた受講生のみなさまに心から感謝の意を表したい。

一九九六年四月五日清明

著者

主要参考・引用資料

- (1) G・バー・チエット『纏足を解いた中国』岩波新書、一九五三
- (2) 福地いま『私は中国の地主だった』岩波書店、一九五四
- (3) 本郷賀一訳『工作通信抄』時事通信社、一九六四
- (4) ヤン・ミュルダル『中国農村からの報告』中央公論社、一九七三
- (5) 秋山良照『中国土地改革体験記』中公新書、一九七七
- (6) チイ・ハオ『李一哲の大字報』日中出版、一九七七
- (7) 西条正『中国人として育った私』中公新書、一九七八
- (8) ジャック・チエン『文化大革命の内側で』上・下、筑摩書房、一九七八
- (9) 松井やより『人民の沈黙』すずさわ書店、一九八〇
- (10) 山本市朗『北京三十五年』岩波新書、一九八〇

(11) 東功『北京の路地裏』合同出版、一九八一

(12) 伊藤正『チャイナ・ウォッキング』CBSソニー、一九八一

(13) 伊藤正『中国の失われた世代』PHP研究所、一九八二

(14) 船橋洋一『内部——ある中国報告』朝日新聞社、一九八三

(15) 中国研究センター編『「人民日報」読者来信』日本評論社、一九八四

(16) 梁恒『中国の冬』サイマル出版会、一九八四

(17) 佐藤慎一郎『中国大陆の農村と農民から「中国」を見る』大湊書房、一九八五

(18) 費孝通『中国農村の細密画』研文社、一九八五

(19) 辻康吾編『中華曼陀羅』学陽書房、一九八五

(20) 中国研究センター編『続・「人民日報」読者来信』日本評論社、一九八六

(21) 今田好彦『現代中国百景』中公新書、一九八六

(22) 田口佐紀子ほか訳『中国女性事情』草風館、一九八六

(23) 林滋子『中国・忘れぬ日々』亞紀書房、一九八六

(24) 竹内実編『中国文学最新事情』サイマル出版会、一九八七

(25) 張辛欣・桑暉『北京人』芸文図書公司

(26) 小林弘二編『中国農村変革再考』アジア経済研究所、一九八七

- (27) 鄭念『上海の長い夜』上・下、原書房、一九八八
(28) アニタ・チャン『チエン村・中国農村の文化大革命と近代化』筑摩書房、一九八九
(29) 唐亞明『ビートルズを知らなかつた紅衛兵』岩波書店、一九九〇
(30) 陳凱歌『私の紅衛兵時代』講談社現代新書、一九九〇
(31) フォックス・バターフィールド『中国人』上・下、時事通信社、一九九一
(32) 阪本楠彥『八億の農民は今』農山漁村文化協会、一九九一
(33) 金山『人生透視』華齡出版社、一九九一
(34) 陳白塵『雲夢澤の思いで』凱風社、一九九一
(35) 馮驥才『一百个人的十年』江蘇文芸出版社、一九九一
(36) 丁抒『人禍』学陽書房、一九九一
(37) 蘇小康『河殤』弘文堂、一九九一
(38) ベティ・パオ・ロード『中国の悲しい遺産』草思社、一九九二
(39) エドワード・A・ガーガン『中国の挑戦』徳間書店、一九九二
(40) 張承志『紅衛兵の時代』岩波新書、一九九二
(41) 劉小波『現代中国知識人批判』徳間書店、一九九二
(42) 鄭義『中国の地の底で』朝日新聞社、一九九三

- (43) 郭雁壯『ハルビンからの留学生』オクムラ書店、一九九三
(44) 三谷孝編『農民が語る中国現代史』内山書店、一九九三
(45) ウー・ニンクン『シングル・ティア』上・下、原書房、一九九三
(46) ユン・チアン『ワイルド・スワン』上・下、講談社、一九九三
(47) 麦海華ほか編『中国人的良心——民運百人的心路歷程』香港市民支援愛國民主運動連合会、一九九三

九九三

- (48) 于輝編『紅衛兵秘録』團結出版社、一九九三
(49) 秦懷錄『扎白毛巾的總理陳永貴』当代中国出版社、一九九三
(50) 楊威理『豚と対話ができたころ』岩波書店、一九九四
(51) 垣口阿文『長春大學教師日記』草思社、一九九四
(52) 智清編『老挿話当年』大衆文芸出版社、一九九四
(53) 何嵐・李衛民『漠南情』法律出版社、一九九五
(54) ヘルガ・ベルトラム『最新中國見聞録』文芸春秋、一九九五
(55) ユエ・ダイユン『チャイナ・オデッセイ』上・下、岩波書店、一九九五

姫田光義ほか『中国近現代史』下巻、東京大学出版会、一九八二

矢吹晋『二〇〇〇年の中国』論創社、一九八四

宇野重昭ほか『現代中国の歴史』有斐閣、一九八六

安藤正士ほか『文化大革命と現代中国』岩波新書、一九八六

小島朋之『文化大革命』講談社現代新書、一九八九

天児慧『彷徨する中国』朝日選書、一九八九

林蘊暉ほか『凱歌行進的時期』河南人民出版社、一九八九

靳徳行ほか編『中華人民共和国史』河南大学出版社、一九八九

中嶋嶺雄『中国革命とは何であつたのか』筑摩書房、一九九〇

戴晴『毛沢東と中国知識人』東方書店、一九九〇

加々美光行編『天安門の渦潮』岩波書店、一九九〇

野村浩一ほか編『岩波講座・現代中国』(全八巻)一九九〇

孫啓太・熊志勇『大寨紅旗的昇起与墜落』河南人民出版社、一九九〇

梅志『胡風追想』東方書店、一九九一

石田浩『中国農村の歴史と経済』関西大学出版部、一九九一

小島朋之『中国共産黨の選択』中公新書、一九九一

王朝彬『三反実録』警官教育出版社、一九九二

姫田光義ほか『中国二〇世紀史』東京大学出版会、一九九三

徐達深ほか編『中華人民共和国実録』（全一〇巻）、吉林人民出版社、一九九四

一九九四

写真提供：共同通信社

現代中国を見る眼

民衆からみた社会主義

丸善ライブライ一 224

平成9年3月20日 発行

著作者 姜 克 實

発行者 鈴木信夫

出版事業部 深山恒雄

発行所 丸善株式会社 東京・日本橋

出版事業部 〒103 東京都中央区日本橋二丁目3番10号

編集部 電話 (03) 3272-0513／FAX (03) 3274-0581

営業部 電話 (03) 3272-0521／FAX (03) 3274-0551

郵便振替口座 00170-5-5

© Keshi Jiang, 1997

組版印刷・暁印刷株式会社／製本・株式会社 星共社

ISBN 4-621-05224-1 C0230

Printed in Japan